平成21年１月１日
発行　防衛大学校同窓会

Vol.16

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより

槇　記　念　室

■防大生に寄せる横須賀市民の期待

■防衛大学校の現状について

- 様変わりした防大施設
- 変化する小原台

■特集記事：今人生、男盛り

同窓会ホームページアドレス：http://www.bodaidsk.com/
メールアドレス：honbu@bodaidsk.com

新年のご挨拶

防衛大学校同窓会会長　竹河内　捷次
（９期・空）

全国各地そして海外各地でご活躍中の同窓会会員の皆さん、健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

さて、昨年、自衛隊はインド洋での補給支援活動、イラクでの人道復興支援活動、国連ネパール政治ミッション、ゴラン高原平和協力業務及び国連スーダンミッションにおける司令部要員の派遣等国際平和協力活動などを積極的に行い、国内外から高い評価を得ております。

一方、わが国周辺情勢はといいますと、北朝鮮の核・ミサイル・拉致問題をはじめ、領土問題などさまざまな問題が存在しており、国の平和と安全の観点から目が離せない状況が続いています。国内における政治情勢は安定せず、経済情勢の厳しさも継続しています。

いつの時代も情勢は流動的ですが、国の平和と安全の最後の砦となる自衛隊は泰然とし、粛々と任務を遂行することが大切であり、国民の期待に応えることになると思います。その意味で、昨年10月28日、母校に開設された「槇記念室」は、防大建学の理念と槇校長の深い思索と歴史の研究を通じて確立された信念、教えを展示してあり、ここを訪れる同窓生に国防の任にあたるものの心構え、揺れ動く情勢にあっても微動だにしない信念を今一度想起させてくれる意義あるものになっています。「広い視野」、「科学的思考力」、「豊かな人間性」、「理性ある服従」などの「槇イズム」がそこにあります。

「槇記念室」の開設に加え、五百旗頭校長は熱情をもって母校の発展充実に努力しておられます。一昨年来、多様な国際的貢献活動に対応できるよう地域研究体制の充実を図っておられますし、昨年11月には念願であった「防大の任務に研究を加える」ことが実現に向け動き出し、先生方の研究を後押しする制度ができることになりました。また、今年４月からは安全保障にかかわる博士課程も開設されることになっております。これらの改革によって防大教育が高次化し、国の安全保障に関連して今まで以上の幅と深さで活動することが求められる同窓生にとっても大変意義あるものとなりました。今後、より高次の学課教育とともに訓練、校友会活動、学生隊生活がバランス良く取り入れられ、一段と充実した教育が行なわれるものと期待しております。

さて、同窓会の状況ですが、昨年、新たに52期生を迎え、会員数は約２万１千名に達しました。また、地域支部等は、昨年４月に徳島地区支部が海・空の出身者を加え本格的に発足し、６地域支部、９直轄支部となり、更に新たな地域支部等の発足準備もなされておると聞き及んでおります。同窓会の交流と親睦も継続しており、ゴルフ、テニス、囲碁の大会を実施しました。昨年は新たに18期生が加わり、１期生から18期生まで、それぞれの技を競い合うとともに、期別、要員別の枠を超えた親睦が図られました。１期生から始まったホームカミングディ（卒業式当日に防大校長から招待を受け母校訪問）も、昨年度は９回目で、９期生及びそのご家族で約350名の方が防大を訪問し、親睦を図るとともに懐かしい母校を堪能しました。30期生から始まったホームビジットディ（卒業後20年で開校祭当日に防大を訪問）は、本年度で３回目となり、32期生がご家族を含め200余名参加し、期生会としての団結を強化するとともに、親睦を深め、記念植樹も行ないました。

同窓会の財務については、会員の皆様の理解を得ながら、引き続き会費納入の促進による安定的な財源確保を図るとともに、事業の計画及び実施段階における経費節減努力を行い財務基盤の健全性と安定性を確保していきたいと考えています。

平成18年から開始した「MCIホームページ」での同窓生の著作物紹介は、現在69名255冊となりました。また、広く軍事情報を発信するため、既に個人のホームページで軍事情報の発信をされている同窓生のホームページとのリンクも平成20年度から開始しました。今後とも同窓生の防衛に関する知識・経験を社会に発信できる施策の検討・実現を目指します。

以上、母校の状況及び同窓会の現況を紹介しましたが、同窓生は、自衛隊の中核にあって、近年における自衛隊の活動の広まりに対応するとともに、国民の期待の高まりを受け止める重要な立場におります。同窓会はそうした会員の皆様の団結の受け皿になるとともに、皆様の活動が円滑に行なえるよう、その設立趣旨にそった活動を積極的に行っていきたいと考えております。会員の皆様のご理解、ご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

おわりに、同窓会会員及びご家族皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈りして新年のご挨拶といたします。

目　次

■新年のご挨拶 …… 2
■防大生に寄せる横須賀市民の期待 …… 4
■防衛大学校の現状について
様変わりした防大施設 …… 5
変化する小原台 …… 6
■新編・改編の部隊で活躍する同窓生
統合運用における災害派遣活動 …… 7
世界一を目指す「中央即応連隊」について …… 8
自衛隊指揮通信システム隊の概要 …… 9
■国際平和協力業務
「しらせ」最後の南極航海を終えて …… 11
国際平和協力活動に参加して …… 12
■防大52期生に聞く
幹部候補生学校で学んだこと …… 14
後輩に伝えたいこと …… 14
幹部候補生学校に入校して …… 15
防衛大、幹部校そして部隊へ …… 16
■特集記事：「今人生、男盛り」
古希を迎える６期生 …… 17
思いつくままに …… 18
幸運な出会いの人生 …… 20
『男盛り』について思う …… 22
指揮官と幕僚 …… 24
■就職援護最前線で活躍する同窓生 …… 26
■小原台は今
槇記念室完成・ご来館あれ …… 29
防大留学生協力家庭の現状について …… 30
防大への支援事業の状況 …… 31
平成20年度運動系校友会活動結果及び部員状況 …… 32
■同窓会事業等
顕彰碑献花式 …… 33
防大卒業留学生歓迎夕食会 …… 33
ゴルフ・テニス・囲碁 …… 34
９期生のホーム・カミング・デー（HCD） …… 35
第３回ホーム・ビジット・デー（HVD） …… 35
MCI事業について …… 36
地域支部等への助成事業について …… 37
防衛大学校同窓会創設50周年記念事業について …… 37
同窓会の法人化に関する検討の状況 …… 38
■同窓生アラカルト
国政から見た我が国の防衛 …… 39
我が原点は小原台にあり …… 40
NGOの新たな枠組みへのささやかな挑戦 …… 41
囲碁遍歴 …… 42
台湾勤務を通じて感ずること …… 43
防衛学教育はいま… …… 44
アフリカで地雷処理 …… 45
津軽の郷土と共に …… 46
■期生会だより
卒業50周年記念行事 …… 47
９期生ホームカミングデー …… 47
16期生だより …… 48
第31期生便り …… 49
卒業20周年記念行事のお知らせ …… 49
■支部だより …… 50
四国、徳島、東北、別海、小原台クラブ、
山口、広島
■会員の訃報 …… 56
■会計報告 …… 57
■同窓会本部・支部等の役員紹介 …… 59
■期生会会長・代議員名簿 …… 60
■名簿管理に関するお知らせ及びお願い …… 61

防大生に寄せる横須賀市民の期待

防衛大学校協力会会長　小沢　一彦

平成11年８月、第６代学校長松本三郎氏から「防衛大学校の３大行事及び学生教育のため支援をいただきたい」旨、要請を受けて同年10月27日、横須賀商工会議所にて、松本学校長ご臨席のもと、設立総会を開催しました。

設立の条件はかなり厳しいもので、１．会員定数50人以内　２．全て個人の加入資格であり、法人加入は不可。したがって会費は個人で負担。３．学校と利害関係のある人は除く。４．市、県、国の議員は除く。との条件でありました。

その上で、我が国の国防に関する理解を持ち、防大生に対して心から愛情を持てる人に限られたのであります。選ばれた会員は、それぞれ防衛大学校と協力会に誇りをもち、積極的に大学への理解と関心を高め、歴代学校長による講演や大学の各種事業への支援や参加によって、精神的にも逞しくなっていったのであります。

横須賀は近代日本の大きな節目に、常に関わりあってきたところであり、市民は保守的ではありますが、時代の変化には柔軟に対応できる性格を併せ持っているように思います。

幕末のペリー来航は近代国家日本への夜明けでありましたし、日本に初めて出来た製鉄所や造船所は、まさに工業国としてのスタートでありました。

富国強兵の時代が始まり、日本で最初の鎮守府がおかれたのも横須賀でありました。

日清戦争、日露戦争、第２次大戦へ進み、1945年（昭和20年）終戦を迎え、その９月２日に戦艦ミズーリー号上で無条件降伏の調印がなされたのも、軍港横須賀の先、東京湾でありました。

再び日本は廃墟の中から連合軍による指導ではありましたが、民主国家として、がむしゃらに努力を積み重ね、世界的にも稀な経済復興を成し遂げたのであります。

しかし、その過程においては、様々な歪みを生じ、現在多くの調整すべき課題を残しております。

自らの国の歴史の問題、教育の問題、国防や外交についても、先の大戦が多くの課題を残したのであります。しかしながら、我が国は徐々にではありますが、この時代にふさわしい、平和で心豊かな国を目指して立ち上がってきております。

去る５月23日、米海軍第七艦隊の空母として10年間横須賀を母港として任務を果たした、キティホークのお別れ会が開催されました。

市民と乗組員700人によって、その会場は「ご苦労さま、ありがとう」と、信頼と友好の場であり、イデオロギーも政治も超越した心豊かな交流の場として盛り上がりました。

東京から来られた多くのメディアの人たちもこんな光景は横須賀でしかありえないと感激されていたのが印象的でありました。５日後、キティホークは母国アメリカに向けて横須賀を出港したのであります。

キティホークの後継艦については、多くの意見がありました。それは、通常艦から原子力艦に変わらざるを得ないからであります。

数年前から原子力艦の安全性についての検証が市民や市議会にて注意深く行われる様になり、ついには２度にわたる公平に選ばれた市民の代表による公聴会が開催され、９月25日世界唯一の被爆国である日本の横須賀に原子力空母ジョージ・ワシントンが配備されたのであります。市民、市議会、市長、知事により容認された結果のことであります。

原油に対する依存度、価格や環境汚染に配慮すれば、日本はしばらくの間は、原子力エネルギーの安全な活用に道を開いていかなければならないと思います。

原子力空母ジョージ・ワシントンによる安全性と経済性が実証されることにより、我々は、原子力に対するトラウマを克服することでありましょう。

ここに到るまでの米海軍指導者の様々な配慮に敬意と感謝を表したいと思います。

現在、防衛大学校協力会は、学校行事への支援はもとより、約60人の本科留学生と市民との国際交流のプログラムも毎年楽しく開催され、また、防衛大学校協力会の活動に賛同、刺激された人により全国20ヶ所以上の都市に協力会支部も組織され、全国各地における学生の夏季訓練の支援を展開しています。支部との連絡調整は、横須賀商工会議所にある事務局が担当し、少しずつ全国各地への拡がりが期待されるところであります。

防衛大学校が将来、日本の安全はもとより、国際理解と世界の平和に貢献する貴重な人材を輩出され、国防に限らず、広範囲な分野での活躍を切に願い、会長としての責任を果たしていきたいと考えております。

卒業生の皆様には、今後も防衛大学校協力会に対して、一層のご理解とご指導をいただきますとともに、ご健勝でご活躍されますことを祈念いたします。

様変わりした防大施設

防衛大学校副校長（企画・管理担当）　岡﨑　　匠

私は、８月１日付で、防衛大学校副校長（企画・管理担当）に就任した。

この企画・管理担当の副校長は、平成17年８月、石井道夫・元防衛研究所長が、初代として着任して以来、私で、４代目であり、新設後３年半にもならず、まだ日が浅いので、防大同窓会の皆様には、あまり馴染みがないのかと思われる。それまでは、副校長は１名で、教授が就いており、事務系の副校長というと、発足当初からポストがあった防衛医科大学校の管理担当のそれが、頭に浮かぶ人も多かろうと思われる。（私も、防衛医大副校長（管理担当）を、平成17年８月から、半年であったが、勤めている。）実際、今回、挨拶状の返事を頂いた方の中に、防衛医大の副校長と勘違いされた人が数人いた。

そういう事情もあり、防衛医大と違い、企画・管理担当の副校長の役割についても、正直なところ、まだ試行錯誤の段階と言ってもよいと思われる。

挨拶状の話に戻るが、返事を頂いた数は、防衛医大副校長就任時に比べて、格段に多かった。その大多数が防大OBからのものであり、そのほとんど全部に「後輩をよろしく」と書いてあった。同窓会組織として、日本一の結束を保っている防大同窓会の団結の強さ、後輩を思う気持ちの一端を垣間見た思いがした。

着任してからまだ数カ月しか経っていないが、退職された防大OBの方、特に仕事を一緒にして、お世話になった方々にも、多数お会いできて、大変懐かしく、また、嬉しく思っている。

さて、防大との関わりをいえば、遡か20年以上も前、経理局会計課予算・決算班（当時）部員として、昭和60年度予算編成に携わった時が最初である。

当時は、土田國保学校長、岡崎清副校長、水澤博幹事、小池清彦総務部長という体制だった。60年度予算では、理工学１号館（理工学館）の増設が最大の課題であり、その他、理工学２号館（旧土木化学館）の内部改修、学会参加旅費の増額等の要求もあったが、無事実現できた。

ところで、今回着任して、防大の施設が整備され、外観が一新されて、大いに驚いたところである。

最近の施設整備について申し上げると、平成９年２月に新武道場が、10年３月に新時計台（給水塔）が、11年８月には新人文学館が、それぞれ完成した。

更に、創立50周年（14年）を契機に、12年10月に新本部庁舎が、13年12月に記念講堂（多目的講堂）が、14年９月に新図書館（図書・情報館）が、それぞれ完成した。

学生舎についても、16年８月に第３学生舎が、18年３月に第４学生舎が、それぞれ完成しており、また、第２学生舎が21年６月に完成する予定であり、残りの第１学生舎についても、今年度中に一部の発注がなされ、21年度要求分が認められれば、23年３月に完成の予定である。

また、資料館に、「槇記念室」が設けられ、20年10月28日には、槇智雄初代学校長のご長男の夫人の和子さん、お孫さんの桂さん等をお招きし、竹河内捷次防大同窓会長、各期生会長にも参列していただき、開設行事が行われた。（「槇記念室」については、五百旗頭学校長が、「槇記念室の開設」（防衛大学校同窓会機関誌『小原台だより』Vol. 15、平成20年１月１日）で、書かれているので、ご覧いただきたい。）

今後、学生食堂、浴場の建替も予定されており、現在のところ、両者の合棟の方向で考えられている。

また、昭和30年に建てられ、現在築53年の理工学館の建替も予定されているが、この建替に際しては、有効利用の観点から、より高層化し、集約することとしており、災害時の防災拠点の観点も考慮して、本館のラインより前には、基本的に建物がないようにすることも考えられている。

閑話休題、私は、防衛庁（当時）の採用面接の際に、プラトンの『国家』の話をして、面接官に好印象を頂いたことがある。プラトンは、『国家』において、「最も必要なものだけの国家」（生きて存在するための食料、住居、衣服類の供給をする農夫、大工、織物工などからなる国家）を検討してから、貿易の必要から貿易商が必要になると話が進み、更に、国家というものは、それだけで満足することなく、領土や財貨を求め、他の国家との間に戦争を引き起こすこととなり、そのための専業者として、「知を愛し、気概があり、敏速で、強い人間であるべき」立派な守護者（軍人）が必要となり、この守護者の教育が重要である旨、述べている。（プラトン著、藤沢令夫訳『国家』(上)、岩波文庫、1979年）

防大は、正に、プラトンのいう「守護者」の教育に任じるところであり、私自身は、直接教育に携わるわけではないが、いわば後方支援の面で、全力を尽くしたいと思っており、同窓会の皆さんにも、ご指導、ご協力、ご支援の程、よろしくお願いしたい。

（平成20年11月１日記）

変化する小原台

防衛大学校　幹事　君塚　栄治（20期・陸）

1　はじめに

約30年ぶりに帰った母校防大。姿かたちは美しく変貌したが、その教育の原点は変わらない防大。私の国防の原点にもどった感慨と将来の国防を担う後輩の育成という重責に身が引き締まった。前号に火箱前幹事が防大創設期と現代の違いについて詳しく書かれたので、私は、防大の近年、更に変化している内容とそのねらいを紹介しようと思う。

2　学科教育の変化

理工学及び人文科学については、前号に馬場副校長記述の「改革と現状」に詳しく記述されているのでそれに譲ることとし、特に、防衛学の変化について紹介する。

一番の大きなトピックスは、平成19年７月３日に防衛学研究会を改め、日本防衛学会が設立されたことである。その主な目的は、「学術と実務の統合である。知性に導かれた実行力の達成を望み、学術的研究なくして防衛の実務は世界の現実に届かず、防衛の実務の伴わない学術研究は実効的安全保障をもたらすことができない。」と設立趣旨にある。学会は、春と秋、年二回開催しており、防衛の思想を内外に広く普及することが期待される。関心のある研究者と防衛の実務者の多くの参加が求められていることをここに紹介する。

また、本科教育においても、防衛学特論の課目に新たな変化を求められている。従来の防衛テーマに従ったスピーチやデスカッションに加え、自分の考えをまとめる力や表現力の向上を図るため、総合レポート（軽易な論文）を作成させるように検討中である。この試みは、理工学や人文科学の卒業論文には至らずとも、防衛学の学術としてのレベルアップに呼応した施策といえよう。学生に４年間の集大成として、少なくとも防衛学をやったという充実感を与えていきたい。

3　訓練における変化

陸上要員の４学年の夏季の総合訓練という位置づけで、101km行進に続く陣地攻撃の訓練を開始した。疲労困憊した中で攻撃という任務を遂行することが狙いだったが、初年度だったためか、手段である101kmを歩くという方に努力が行ってしまった反省がある。今後も総合訓練に相応しい内容に更に充実し、陸上要員としての基盤となる資質、基礎となる識能の集大成となるような訓練としたい。

海上要員は、従来から短艇、ヨット、機動艇等の実際の船での実習とシミュレーターによる模擬航海訓練を実施して、海上要員としての海技技術の向上を目指していたが、先般のあたごの海難事故を契機として、シーマンシップ及び海技技術は、海上要員としての基盤となる資質、基礎となる識能として、従来にも増しての充実が期待されているところである。

航空要員は、従来から防大で航空要員らしい訓練ができないという悩みがあったが、新たにグライダーを１機購入して、２機体制として、実際に航空機を飛ばし自ら体験させるとともに、飛ばすことに関わる気象、管制、整備、操縦、運行管理という一連の業務を実際にやらせることとする予定である。これにより航空の勤務を具体的に理解できるようにしたい。近い将来に３機体制として、体験回数を増やし、航空要員の訓練の柱としたい。

4　学生舎生活の変化

現在、４人部屋から８人部屋制に移行途上である。3、4大隊はすでに立派な学生舎が出来上がり、1、2大隊の学生舎は、現在建設中である。２大隊舎は21年度末、１大隊舎は23年度末の完成予定である。建設中のハプニングとして、明治時代の煉瓦造り構造物と縄文早期の遺跡が出土し、工期がやや遅れているが、ほぼ予定の時期に完成する見通しである。

８人部屋学生舎完成に従い、自衛隊の指揮・統率の実践の場のハードは整うが、リーダシップやフォロアーシップを育むソフトにはやや問題が残る。指導する立場の大隊、中隊、小隊指導官は、いずれも学年別の４人部屋や２人部屋体制で教育を受けた世代の学生である。このため指導する側も手探り状態の中で、今後８人部屋体制が正しく機能するには今少し時間がかかると思われる。

次に学生数の話であるが、本年度は、皆の努力で定員を460名から480名に増加したが、１学年（56期）は、入校時に既に454名で定員割れ。その後退校者は、夏の時点で40名を上回り、今後、卒業時には、400名のラインを維持できるかが不安である。最大の退校理由は、学生舎生活になじめないことにあり、中には適応障害に至る事例もある。少子化で大切に育てられてきた家庭環境と学生舎での団体生活との大きなギャップが原因と思われる。また、本年著しく入校者が少なかったのは、少子化傾向に加え、公務員離れの傾向、そして度重なる防衛省不祥事の影響も無視できないと思われる。しかしながら、卒業後の職場である陸海空自衛隊の勤務は、益々厳しさを増している現実を考えると、卒業生の質的レベルを落とすわけには行かない。さりとて量的な確保も無視できないので頭の痛いところである。

5　おわりに

私が沖縄の第一線指揮官の時に、防大出身の若手幹部が地元市民を殺人する事件が起き、その後の信頼回復に大変な苦労した経験から、学生綱領の精神である廉恥、真勇、礼節を重んずる人を育てていきたい。また、戦闘戦技に優れた軍事のプロフェッショナルである兵士に育てたい。そしていかなる困難な状況においても、あらゆる手段を講じて任務を達成する執念を持った幹部として育てたい。

統合運用における災害派遣活動

統合幕僚監部災害派遣班長
西　村　弘　文（29期・空）

1　はじめに

平成17年度末に自衛隊が統合運用体制に移行して２年半が経過しました。この間、私は統合幕僚監部災害派遣班長として、中越沖地震及び岩手・宮城内陸地震という比較的大きい２つの地震に対応しましたが、その中において、統合運用体制に基づき各部署の機能が発揮されたことによって災害派遣任務が効果的に遂行されたと感じました。

この度、投稿の機会を得て、防大在校生及び同窓生の皆様に統合運用の進捗についてご理解をいただく一助となればと思い、両震災における統合幕僚監部及び災害派遣部隊の活動状況を紹介します。

2　統合運用体制の概要

ここでいう統合運用体制とは、自衛隊の運用については統合幕僚長が一元的に大臣を補佐する体制をいいます。陸海空各幕僚長は運用を除く隊務に関して大臣を補佐します。運用に関しての大臣に対する報告や大臣命令の執行に係わる事務は、内部部局と協力して統合幕僚監部が実施します。通常の災害派遣は、県知事からの派遣要請を受けた指定部隊の長及び指定部隊の長から協力依頼を受けた他の指定部隊の長が協同の関係で実施しますが、統合幕僚監部を仲介として陸海空の垣根を越えた調整がなされており、状況に応じた戦力が適時に投入されることにより、より効果的な活動ができるようになったと感じています。

3　中越沖地震における震災対処

平成19年７月16日、新潟に被害を及ぼした地震の特徴は、海岸線に近い市街地で広範囲に被害が及んだところにあります。自衛隊は救助活動のほか、給水支援、給食支援、入浴支援、物資輸送等の生活支援を行うにあたり、最大約13,000名の避難者が約130箇所に及ぶ避難場所に分散避難していたことから、多数の給水車両、炊事車両、入浴セット等を必要としました。そのため、東部方面総監からの要請により、陸上自衛隊の全方面隊から必要な車両及び操作員等を東部方面隊に配属させるとともに、航空自衛隊からも給水支援のための協力がなされました。最大兵力は、人員約4,000名、給水車両約380両、炊事車両約130両に上ります。また、部隊が集中するに要した期間も短く、５日間で集中を完了しており、統合運用体制移行前の中越地震の際に10日間を要したことからも集中の速さが見て取れます。これは、災害派遣部隊指揮官の決心が早かったこともありますが、統合幕僚監部によって他の方面隊との調整及び大臣命令発出のための諸手続きが速やかに行われたことも大きな要因でした。

行方不明者捜索のために、ヘリに乗り込む隊員
（岩手・宮城内陸地震）

海自艦艇「うらが」から給水を受ける陸自水タンク車
（中越沖地震）

沿岸部での被災であったことから、海上自衛隊の活躍を特筆すべきでしょう。近隣で訓練中の護衛艦が発災後直ちに柏崎港に進出し、搭載していた非常糧食を提供しました。また、海上自衛隊の艦艇は被害を受けていない直江津港から柏崎港に水を搬送し、陸上自衛隊及び航空自衛隊の給水車に水を供給しました。

4　岩手・宮城内陸地震における震災対処

平成20年６月14日、岩手県及び宮城県に被害を及ぼした地震の特徴は、中山間部の多くの箇所で土砂災害が発生したことにあります。駒の湯をはじめ10箇所以上で生き埋めの情報があり、また、道路の遮断による孤立地域が多数発生しました。自衛隊は行方不明となった方々の捜索救助及び孤立者の救出を重視し、当初からヘリコプターを集

谷に転落したバスから
救助活動中の空自ヘリ
（岩手・宮城内陸地震）

駒ノ湯にて行方不明者を捜索中の隊員
（岩手・宮城内陸地震）

中させました。東北方面総監は直ちに東部方面総監、中央即応集団司令官及び航空自衛隊航空支援集団司令官にヘリコプターの協力を依頼し、11機の大型ヘリコプター（CH−47）が駆けつけました。道路が寸断された被災地での災害派遣においてはヘリコプターの機動力が非常に有効であり、約360名の孤立者等を救出したほか、行方不明者の捜索にあたる部隊の移動や被害復旧に必要なブルドーザー等の重機ならびに人員の輸送に威力を発揮しました。

また、谷間に転落したバスから17名の乗客を航空自衛隊の救難ヘリコプターが救助する様子はメディアにも流れましたが、救難の専任部隊がその能力を遺憾なく発揮した場面であったと言えます。

5　おわりに

以上述べた災害派遣においては、被災者側のニーズに自衛隊が即応し、また、陸海空自衛隊それぞれの特性を十分に活かした活動がなされたと言えます。統合運用体制になってからわずか２年半ですが、この間、一元的指揮による迅速な対応と各軍種の特色を活かした活動を積極的に行おうとする精神が、かなりのスピードで浸透していると感じています。統合運用はこれから益々その実を上げなければなりませんが、そのためには若い時期に統合を理解することが重要と考えます。統合幕僚監部での勤務を希望する若い力がどんどん増えていくことを期待しています。

世界一を目指す「中央即応連隊」について

陸自　中央即応連隊長
山　本　雅　治（27期・陸）

1　はじめに

平成20年３月26日、栃木県宇都宮市、宇都宮駐屯地において、陸上自衛隊「中央即応連隊（CRR：Cenntral Readiness Regiment）」が編成完結しました。

CRRは、平成19年３月に発足した中央即応集団隷下の唯一の連隊であり、集団と同様に、地域的な責任を有していません。国内全域の多様な緊急事態に即応し、更に国際的な平和協力活動にも先遣隊として運用されるべく結成された陸上自衛隊初の連隊となりました。その初代連隊長である私は、防衛大卒業後、陸上自衛隊の幹部の道を歩んできた者として、本職務を拝受したことを身に余る光栄と思いながらも、職責の重さに常に厳しい緊張感を持って勤務している毎日です。

防衛大の現役学生並びに卒業生各位に、本稿を以てCRRの概要を周知頂き、その活動に対しご理解とご声援を賜れば幸いです。

なお、中央即応集団の概要については前山口司令官（17期）が投稿されている記事がありますので割愛させて頂きます。

2　CRRの任務

①国　内

ゲリラや特殊部隊による攻撃が生起した場合、各方面隊の増援、特に首都圏防衛の増援部隊として、他の部隊の地上戦闘に連携または短期間独立的に行動することとなります。

②国　外

国際平和協力活動における（イラクの様なコアリション型派遣事態含む）先遣隊として、策源から離隔した海外において、一定期間独立的に行動することとなります。

上記のように、国内外において行動できる陸自としては唯一の「オールラウンドプレイヤー」と認識しております。

3　CRRの編成・装備

本部及び本部管理中隊と３個の普通科中隊で編成されており人員は約700名、車両は約150両です。ただし、本部管理中隊は、対戦車、重迫、情報、通信、施設、補給、整備、衛生と職種専門部隊で編成されており、各種機能による高い自己完結性を保持し、一般の普通科連隊とは異なる諸職種連合部隊と言えます。

装備品は、軽装甲機動車（LAV）、防弾仕様の高機動車、防弾仕様の大型車両等、国際貢献用のものが主体です。

また、鉄条網構築セット、遠距離・近距離監視システム、ドラッシュ天幕、コンテナスキャナ等、他の部隊が保有しない国際専用装備品を多く保有しています。

4　CRRの特色

人事上

新編部隊であることから、隊員は全国から集まっており、最も多いのは東北出身、次いで北方、東方、西方、中方の順になっています。

なお、郷土部隊と異なるため、家族との連携を図りつつ、家族支援施策を特に重視して隊務を運営しているところです。

運用上

平成20年４月１日より、新編と同時に待機態勢（６ヶ月交代）をとっており、いつでも任務を遂行するべく訓練に邁進しております。

特に国内外のあらゆる事態に対応するため、優先順位をつけながら重視する訓練から確実に実施しています。

装備上

国際専用装備品を多く保有することから、慣熟訓練、整備、管理といった後方業務が煩雑であるため物品管理態勢の充実を図っていく必要があります。

5　おわりに

CRRは、全国各地から崇高な意志を持った隊員を集め、宇都宮の地において「世界一を目指せ」を合い言葉に日々訓練に邁進しています。

防大の現役学生諸君には、是非、新たな時代のニーズに基づき新編されたCRRの一員を目指して頂きたいと期待しています。

自衛隊指揮通信システム隊の概要
（初の常設共同部隊誕生）

自衛隊指揮通信システム隊司令
１等空佐　糸　永　正　武（22期・空）

1　始めに（設立経緯）

遡ること平成13年度から防衛庁（当時）において将来の統合運用を見据え、「統合運用・組織の検討」の一部として「将来の統合運用に必要な通信電子組織、装備の検討」が開始されました。その後、約６年間に亘り当該検討の更なる深化が図られ、その成果として（統合運用体制移行の一環として）統合幕僚監部が新編された２年後の平成20年３月26日に自衛隊指揮通信システム隊（C4SC：Japan Self Defense Force C4 Systems Command）が新編されました。紙面の制約もありますが、その概要を簡単にここに紹介いたします。

2　編成

統合幕僚監部の指揮通信システム部に所属していた３組織、即ち「中央指揮所管理運営室」、「防衛情報通信基盤管理運営室」及び「サイバー防護保全班」を母体とし、次頁の図に示すとおりの編成が執られました。その特色としては自衛隊初の「防衛大臣直轄の陸海空自衛官から構成される常設共同部隊」であり、このため監督幕僚長は統合幕僚長となっていることです。

3　任務及び活動

防衛省、自衛隊の指揮命令中枢である中央指揮所（CCP：Central Command Post）、中央指揮システム（CCS：Central Command System）（狭義）及び自衛隊の

骨幹ネットワークである防衛情報通信基盤（DII：Defense Information Infrastructure）を維持、管理、運用するとともに、現在、新たな脅威としてクローズアップされているサイバー攻撃対処を組織的に実施することを主任務としております。

主な活動としては次に示すとおりです。

①・大臣等の意志決定及び状況把握から計画命令に至るまでの一連の幕僚業務の支援機能を有するCCSを24時間態勢で維持、管理、運用

・特記事項として各種事象発生時における大臣等への至短時間報告及び統合運用移行後における統幕直接運用に関わるニーズから、報告、運用ツールとしての当該システムに対する信頼性の更なる向上を強く望まれるところ

②・全国に展開しているDIIネットワーク運用を24時間態勢で監視統制

・特記事項として先般、実施された洞爺湖サミットにおいて、各自衛隊の通信部隊と協力して新規通信拠点を現地展開し当該サミットに要するネットワークを臨時構成し万全な態勢を確立したところ

③・政府機関及び各幕、各自衛隊部隊等との組織的連携の下、セキュリティー情報の収集及びDIIセキュリティーシステムの最適設定等並びに各種システムの監査、脆弱性検査により情報システム保全及びサイバー攻撃対処を24時間態勢で実施

・特記事項として現在、世界各国で発生している不審メール及びマルウエア（悪質な活動をするウイルス）の対処等を重視しているところ

4　C4SC指揮官としての着意、心構え

初代指揮官として次に示す認識等を保持し当部隊の指揮を執るように心掛けております。

①　今日の安全保障環境は脅威が多様化、複雑化し、その脅威がいつ、どこで顕在化するか予測することが一層困難になっています。中でも情報通信の発達による社会のグローバル化の進展を巧みに利用して国境を越えて、手段を選ばず、無差別な破壊行為等を行う趨勢が顕著になってきており、その最たるものがサイバー攻撃等であると考えます。即ち我々の任務、命題である軍事的抑止、阻止の主対象をハードウエポンからソフトウエポンに移行、シフトすべき時代に突入していると考えます。一方、我が防衛省に焦点を当てても、「システムの連接拡大、相互依存」により「運用に使用する各種システム、骨幹ネットワーク」の重要度は高まり、「サイバー攻撃等の精緻化、複雑化」により「攻撃対処、セキュリティー確保等」の重要性は益々、増大していると考えます。この点を考慮した場合、サイバー攻撃対処を含め防衛省の中核機能であるCCS及びDII等の能力、機能を適切に確保する等の任務を有する当部隊は、有事、平時を問わず軍事オペレーションを司る部隊であると言え「これまでの維持、管理を主体とする支援部隊」の概念を払拭し「激烈な最前線運用部隊」である旨の気概を強く持つことが必要であると考えます。

この為、現在、「検討途上の省改革及び今後、本格化する統合運用の更なる推進を見据え、防衛力を統合的かつ有機的に運用するために必要不可欠な指揮命令の中枢、骨幹たるシステム及びネットワークを如何に適切に運用するか」及び「米国をも含む諸先進国が試行錯誤の途上にある日進月歩、千変万化するサイバー脅威に如何に組織的に対処するか」を念頭に置き施策の検討、推進に努めているところです。

②　前述の如く、初の共同部隊として当部隊は設立されましたが、今後、統合運用が本格的に推進される中において、他の機能を有する同様の共同部隊の検討、設立が強く望まれることが予想されます。この状況を考慮した場合、他の部隊の模範として存在し、各種検討に資する成果を得るために、共同部隊の在るべき姿を模索、追求する位置付けにある当部隊の存在意義は非常に重要なものであると認識することが必要であると考えます。

この為、現在、「初の共同部隊として陸海空自衛隊の有する有形無形の歴史、伝統、文化の差異を発展的に解消、融合し如何に所属する陸海空自衛官等の組織的活動を円滑に図るか」を念頭に置き施策の検討、推進に努めているところです。

5　終わりに

簡単に当部隊の紹介をしてきましたが、その姿は「厳然と任務を遂行しつつ、フロンティア・スピリッツの精神を持ち更に成長、発展させるべき部隊である」の一言に尽きると考えます。中でも内的要素としては「人材の育成、管理」、「組織、機能の発展」及び「良き歴史、伝統、文化の醸成」、また外的要素としては「各関連組織との情報共有」、「アウトソーシングの活用」及び「他省庁とのコラボレーション」等々、今後追求すべき課題は多々存在していると考えます。これから遭遇するであろう未知の様々なチャレンジが非常に楽しみです。将来のシステム、ネットワーク、サイバー戦士を目指す勇士の参入を心より期待、希望しております。

「しらせ」最後の南極航海を終えて

第14代砕氷艦「しらせ」艦長
品　川　　隆（23期・海）

砕氷艦「しらせ」は、昭和58年から59年の第25次観測以来、25回の南極地域観測協力に従事して来ましたが、第49次観測協力を最後に引退の運びとなり、平成20年7月30日をもって除籍されました。かつて、偶然造船所で、その進水間近の姿を目にし、大きさと偉容に圧倒され、このような船に乗るのはいったいどんな人達かと羨望を抱いたものですが、今回「しらせ」最後の航海に、艦長として乗り組み、任務を全うすることができたことに深い感慨を覚えます。

昭和基地を目指し流氷域を進むしらせ

さて、我が国の南極観測は、昭和32年から33年の国際地球観測年の国際的な共同観測に、参加を表明したことに始まります。他の参加国は、全て先の大戦の戦勝国で、我が国は根強い反発を受けました。そして、南極でも特に氷状の厳しい、米海軍が「艦船での到達は不可能」とした場所に基地を設けざるを得なかったのです。以後、「宗谷」、「ふじ」と氷との厳しい戦いを続けました。その後、世界最高水準の「しらせ」を建造し、運航する力を持つに至り、初めて、これまで背負って来た不利な条件を完全に払拭することができたのです。我が国が、南極に基地を維持して行くためには、艦艇と航空機が一体となった海上輸送が必要ですが、これは海上自衛隊にしかできないことです。海上自衛隊は国の決定に基づく任務として、南極観測事業に対する輸送協力を続けて来ましたが、このことは、国家としての南極に対する取組みの姿勢を示すことにも繋がったものと考えます。

今回の航海の特徴としては、昭和基地のあるリュツォ・ホルム湾周辺の氷状が、近年ではやや厳しかったこと、第２代「しらせ」就役後の新しい輸送態勢確立のための準備作業を支援したこと、昭和基地を遠く離れて内陸で行動する別働隊に対し、空輸支援を行ったことなどが挙げられますが、ここでは、「しらせ」の運航及び南極での活動の状況に主眼をおいて話を進めたいと思います。

「しらせ」は、先代の「ふじ」とは全く能力が異なり、特に砕氷能力に関しては、２度に渡り、外国船を氷海から救出するなどの実績を誇っていますが、その「しらせ」でも、氷海航行には苦労する場合が多々あります。今回

波高13mを記録した暴風圏の航行

は、昭和基地周辺で多様なオペレーションが計画されており、しかも、出発前から厳しい氷状が予想されていたため、速やかに流氷縁に到達して氷海に進入すること、氷状予察・氷状偵察を頻繁に行い、慎重にルートを決定すること、定着氷（大陸に張り付いた海氷）進入の後は、砕氷航行に全力を傾注することを方針とし、平成19年11月14日、東京晴海埠頭を離れ、南極への航海につきました。航海とは地球上の一点から他の一点に安全かつ経済的に予定どおり到達することと定義されますが、暴風圏の航行、流氷域の航行、定着氷域の航行など南極航海には不確定要素が多数存在します。これらに一つずつ対応し、算段したとおりに艦を昭和基地沖に到達させるのが、南極航海の醍醐味です。最後の航海において、「しらせ」は予定通り、12月26日に昭和基地沖に接岸することができました。

接岸と言っても、岸壁設備があるわけではなく、昭和基地への燃料パイプライン輸送、雪上車と橇による氷上輸送が可能で、氷状が安定した地点に停留することを「接岸」と呼んでいます。先代の「ふじ」は、18回の南極行において接岸は６回のみであり、その前の南極観測船「宗谷」は、６回の南極行で接岸の実績は１回もありません。「しらせ」は25回の南極行で24回の接岸を果たしていますが、「しらせ」の砕氷能力の高さと、「しらせ」でさえ接岸できないことがある昭和基地の立地条件の厳しさを表していると思います。

第１便にて越冬隊長と１年ぶりの再会

沈まぬ太陽の下夜を徹して行われる物資陸揚

昭和基地にて道路工事を支援するしらせ乗組員

昭和基地沖では、物資の陸揚げ、持ち帰り物資の搭載、昭和基地の建設作業や観測の支援などを行い、約１ヶ月半滞在しました。単調で地味な、忍耐を要する作業が続き、乗組員は狭い艦内で缶詰状態の生活です。毎日同じ場所から見る単調な景色にも飽きて来ます。昭和基地周辺では、12月下旬から１月下旬にかけて、太陽が沈まず、夜も明るく気持ちが落ち着きません。乗組員にとっては、土木や建設作業の支援のため、交代で昭和基地へ派遣されることや、野外の観測拠点へ荷出しや荷受けの手伝いに行くことが、気分転換の機会です。南極においては、元日以外に休養日は設けていません。滞在期間とやらなければならない作業は決まっており、期間中、天候や氷の状況が、当方に都合よく持続してくれるとは限らないからです。また、南極で正確な気象を予察するのは大変難しいことです。従って、やれる時にはどんどん作業を進め、状況が悪いと判断したならば、潔くあきらめてじっくり待つのが南極でのやり方です。

平成20年２月15日、予定されていた全ての作業を完了し、「しらせ」は昭和基地を後にしました。昭和基地に残る越冬隊員が、二度と同地を訪れることのない「しらせ」を総出で見送ってくれました。その後、北方を通過する巨大な低気圧をやり過ごし、定着氷域を出て再び流氷域に入ります。ところが、進むほどに流氷の密接度が高くなり、ついには密接度10／10の最密氷域となりました。前々日通過した低気圧のせいで、流氷が吹き寄せられて強く圧着し、おまけに、砕氷の際のエネルギーを吸収する雪もかなり積っています。艦の進み方がこれまでと全く違うため、普段あまり艦橋に現れない搭乗員や観測隊員も心配そうに覗きに来ます。最密氷域で苦闘していると、今度は、流氷域が広い範囲に渡り、境をなしてずれ動くシアーリングという現象に遭遇しました。艦首から500mほど先に境界線が走り、手前の流氷域は静止状態で、境界から先は流氷域全体が右から左へずれ動いています。これに巻き込まれれば、船体の前部と後部に逆の応力が掛かる危険な状態となります。復路のスケジュールも盛りだくさんですが、大事をとって待機します。この間に、航空機による氷状偵察を行い、仔細にルートを検討します。シアーリングは１日で終息し、残りの流氷域も無事通過することができました。その後、海底に沈めた観測装置の回収、沿岸部で行われる野外観測への空輸支援、重力地磁気観測などの計画された作業を全て完了することができました。物事が予定通り進まなくても、ノルマが全てクリアーできればOKと言うのが南極の面白いところです。「しらせ」は平成20年４月13日全ての任務を終え、東京晴海埠頭に接岸しました。

「しらせ」は、南極で過酷なオペレーションを行って来ましたが、25年間を通じて、１人の死傷者も出しておらず、一度も艦船事故、航空事故を起こしていません。また、氷海における機関故障、推進器事故やビセット（氷に閉じこめられること）もなく、これは世界でも珍しい例であるのと同時に、「しらせ」の隠れたすばらしい業績であると思います。初代「しらせ」の良き伝統が、第２代「しらせ」に受け継がれてゆくことを、元乗組員の１人として、多くの先輩方と共に祈るばかりです。

昭和基地を離岸するしらせと見送りの越冬隊員

国際平和協力活動に参加して

陸自幹部学校　55AGS
１等陸佐　石　橋　克　伸（30期・陸）

平成19年３月から20年３月までの間、国際連合ネパール政治ミッション（UNMIN）で軍事監視員として勤務しました。加えて、私にはカンボジアPKO（UNTAC）における停戦監視員及びイラク復興業務支援隊のクウェート分遣班長として、主として個人派遣された経験もありますので、これらの勤務を通じて感じたことを紹介し、若

い方々の参考にして頂ければと思います。なお、UNMINの経緯や概要については、防衛白書等にも記述されていますので、そちらを参考にして頂きたいと思います。

まず、皆様に是非ともお伝えしたいことは、「日本はすばらしい国で、日本人は世界の多くの人々から好感を持たれている。」ということに自信を持って欲しいということです。そう感じるようになった理由について、いくつか紹介したいと思います。まず、カンボジアPKO時ですが、我が国は他国に比してやや遅れ気味の参加でしたが、現地カンボジアのある人物から「日本がカンボジアに来てくれたことにより、アジアの人々が見下される事がなくなるので大変有難い。奇跡の復興を遂げた世界有数の技術大国であり経済大国である日本はアジアの一員であり、日本が来たからには、アジアは劣っているなんて言わせない。」と大歓迎されました。また、東南アジアからの停戦監視員達には「平和的で優れた力を持つ日本は、もっとリーダーシップを発揮してアジアを引っ張って欲しい。今度は協力するから…」等と言われた事もあります。ネパールでは、NHKドラマの「おしん」が何回か放送されたそうで、「日本は戦後の大変苦しい時代を克服し、今日の地位を作り上げたすばらしい国だ。我々も、日本を見習って発展したい。」などと敬意を含めた親近感を持っている人が多くおられました。私が派遣された国はいずれも中・後進国であり、他の国連の仲間達もそういう国の出身者が多かったのですが、どこに行って誰と話しても、日本に対する愛着と敬意を持っていたように感じました。

また、クウェートにおいても、「日本のアラブの同胞に対する様々な支援に感謝する。」「日本人は、礼儀正しく親切で、相手のことを尊重するいい人達だと思う。欧米よりも、もっとアラブと仲良くなってくれればいいのに！」等と言われることもありました。一方、米軍人からは「共にイラクのために努力してくれて本当に有難い、日本は我々の誇るべきパートナーだ」等とも言われ、様々な制限があった我が国の事情を理解しつつ、他の同盟国よりも重要視してくれていたように感じました。皆様も、このような状況があるということを認識して、堂々と外国人と渡り合って頂ければと思います。

次に、個人派遣の特性について紹介します。個人派遣された隊員は、多国籍の軍事監視員からなる組織の一員となり、現場において活動する際は、更に少人数（３～７人位）のグループを作り、やや曖昧な任務を付与されて活動します。任務遂行要領の一例を挙げると、ある場所に数人で派遣され、自分達の安全と生活を確保しつつ、情報収集や調整あるいは監視（情勢悪化防止のための国連プレゼンスの誇示）等をするというものです。このため、生活から任務遂行までの全てを個人で自己完結しなければなりません。インフラが整備され治安が安定しているところであれば、特に問題はないのですが、そもそも、そういった場所に軍事監視員が行く必要はない訳であり、様々な困難に出会うのが常態です。例えば、現地の治安情勢や住民感情に関する事前の情報は乏しく、直接行って確認するのが通常であり、目的地に少しずつ近づきながら、逐次情報を収集していきます。現地の警察等が信頼性のある情報をくれるとも限らず、様々な所に聞いて回ったり、行き交う人々の様子から推測したりしなければなりません。油断していると、普通に生活していた現地の人々が、突如として暴徒と化してしまい、暴動に巻き込まれそうになる事もあります。また、経路も悪く、洪水やがけ崩れにより通行が困難になる場合もあって、計画通りに行動することはほぼ不可能です。現地に入っても、通信の情況が悪かったり、停電で電子機器が使えなかったり不便極まりありません。防虫剤を忘れるとマラリアになる危険もあります。その他にも、多国籍のチームですから、様々な事で意見が食い違い、その調整に手間取ることもあり、とにかくいろんな事が起きて、無難に計画通り事が進むということはほとんどありません。とても、確実に計画・調整しつつ仕事をしてきた人間には耐えられない事ばかりで、生真面目な人間はそのストレスに参ってしまう事があります。実際、一緒に派遣された日本の仲間にも、そういった不確実さやいい加減さに、苛立ちを感じている隊員がいました。

このような状況を踏まえると、個人派遣の隊員は、ちょっといい加減ぐらいで楽観的な人間が適当であり、生真面目過ぎずに、良くも悪くも柔軟に振舞うことが現地で活動し続ける上で大切だと思います。蛇足ながら、やる気がありすぎたり、好奇心が強すぎたりする人も、危険に対し鈍感な傾向もあるため適当ではない場合もあり、積極性よりは忍耐力の方が重視されるべきとも感じています。もっとも、時間が経ってそんな状況に慣れてくると、みんな状況に合わせて上手く身をこなすことができるようになってきます。また、実際の監視員業務というものは、そのような派手な活動は少なく、同じ場所に存在し続けることにより、停戦違反や不正行為を防ぐというような受動的で退屈な活動が多いというのが現実であり、退屈との戦いも困難の一つと言えます。

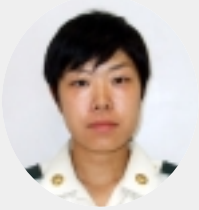
一方、そんな困難を超える遣り甲斐もあります。それは、現地の人々との交流を通じて、我々（国連）の存在が現地の安定を維持・促進し、彼らに安心感と希望を与えることに役立っていると実感できることです。たとえそれが、我々がいる間だけの安らぎであったとしても、紛争に疲れきった人々が再び希望を取り戻すことに役立っているのではないかと感じるからこそ、様々な困難を乗り越えて活動を続けることができ、帰国した今も活動してきて良かったと思えるのです。

今後、国際活動に参加される同窓生が増えてくると思われますが、日本人としての自信と誇りをもって、日本人らしさを発揮しながら、頑張って頂きたいと思います。無理をせずとも、自衛隊の幹部として勤務された皆様であれば、必ずや、世界の人々に認められるだけの仕事ができると、これまでの経験を通じて確信しています。

防大52期生に聞く

幹部候補生学校で学んだこと

―役職が人を造る―



第２候補生隊第５区隊
冨永　麻美

今年の３月に防衛大学校を卒業して、４月に幹部候補生学校に入校してから早５ヶ月となりました。入校直後から、日中は勉強・訓練、夕方からは体力練成、夜は気絶したように眠って、あっという間に朝が来る、といったような感じで、まさに息つく暇もなく、忙しく日々を送っていました。

７ヶ月たった今では環境にも慣れ、時間の余裕、心の余裕が持てるようになりました。７ヶ月間ではありますが、幹部候補生学校での自分の経験を振り返ってみると、心に残る言葉がひとつあります。それは「役職が人を造る」という言葉です。私は幹部候補生学校においてこの言葉の意味を何度か実感することが出来ました。そこで、私が経験した２つの例について以下に述べたいと思います。

まず一つ目は、６月半ばに行われた大野原野営訓練でのことです。私はこの６日間の野営訓練の前段の区隊当直に上番することになりました。区隊当直とは防衛大学校の感覚で言えば訓練班長のようなものなのですが、野営訓練時の区隊当直はとても大変そうなイメージがあり、とても不安でした。どのようにして区隊を指揮するか、最初は漠然と考えていただけでしたが、考えなければならないことが次から次へと出てきました。出発日の行動予定はどのようにするのか、荷物の集積・積載はどのように行うのか、演習場についてからはどのように行動するのか、雨天の場合はどうするのか、決定事項の下達はどのように行うのか・・・などなど、上番の一週間ほど前から、ありとあらゆることを考え、それを調整する上では難航した事項もあり、とても大変でした。しかし準備を入念に行ったため、訓練当日はスムーズに計画を実行できたように思います。

「準備は悲観的に、実行は楽観的に」という言葉を聞いたことがあります。部隊を動かす際の準備段階では、ありとあらゆる想定を考え、こういった場合はこうする、ああいった場合はこうする、トラブルが起こった場合はこのように処置する・・・といったように、ああでもないこうでもないと熟考し、綿密な計画を立てなければなければなりません。一方で、実行の段階では、「やるしかない」といった意気込みで、準備段階のイメージをもとに、迷うことなく堂々と指揮をしなければなりません。

このように様々なことを考えるきっかけを与えてくれたのは、区隊当直という役職でした。もし私が野営訓練時に一列員であったならば、何も考えることなく訓練に臨んでいたかもしれませんし、準備の大切さなども実感することはできなかったと思います。

もう一つの例を挙げると、私は区隊の中で体育係という係に就いています。体育係の任務は、区隊員の体力検定の合格、登山走・武装障害走など各種検定の合格を目標として体力練成計画を実施し、区隊員の体力を向上させる、というものです。

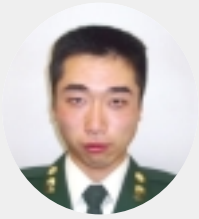
最初はどのように体力練成の計画を作ればよいのか全くわかりませんでしたが、自分なりにトレーニング方法について勉強したり、練成計画について指導を受けたりすることで、素人なりにも計画を立てることが出来るようになりました。また、体育係である自分に体力がなくては示しがつかない、といった思いがあって、これまでよりも体力練成に真剣に取り組むようになりました。

これにおいても、自分なりに体育について勉強しようとしたり、真剣に体力練成に励むことのきっかけを与えてくれたのは、体育係という役職でした。

以上の２つの例を通して、役職に就くことは、自分自身を成長させる良いきっかけを与えてくれることを実感しました。自分には荷が重いと考えている役職でも、就いてしまえば自然とそれなりの責任感が芽生えて、その任務を果たすために努力するようになります。更にその結果として自分自身の成長につながると思います。

幹部候補生学校での生活も半分が過ぎました。幹部候補生学校は、先に述べたように、役職や活躍の場を私たちに提供してくれるところであり、その実践を通して私たちは様々なことを学ぶことができるのだと信じています。自信を持って部隊で勤務が出来るよう、残りわずかな時間を積極的に行動して自分を磨いていきたいと思います。

後輩に伝えたいこと



第３候補生隊第１区隊
塩澤　正徳

３月に防衛大学校を卒業して家の荷物をまとめる時間もなく幹部候補生学校に入校し、慌ただしい毎日が始まりました。四方八方から攻撃を受ける指導教官室への入室要領から便器の汚れ一つ許さない就学環境点検（整理整頓と清掃点検）は、まさに防大一学年時代の再来かと思われました。そのような毎日ではありますが、昨年度から始まったBU一体教育により、多くの新しい同期と苦楽を共にできることは非常に有意義と感じられました。

入校当初、U課程（一般大卒）の候補生が我々B課程（防大卒）の予想をしない行動をすることが多々ありました。時間管理に対する認識や、戦闘訓練の際に空包を発射している銃口の直前を駆け抜ける等の危険な行為、また体力的な差など我々とは心身共に大きな隔たりがあり

ました。しかし、幹部候補生学校の生活は不思議なもので、あっという間に彼らをB課程のレベル又はそれ以上に成長させます。最初は各個動作すらままならなかったのに、５カ月後には小隊長として陣頭指揮を執っていたり、９月に行われた高良山走（約６kmの登山走）ではB課程の上位者を次々抜き去っていく姿が見られるなど、驚くべきものがありました。彼らは日々の生活や訓練の思い出を共有することができる仲間であり、良きライバルであると感じられました。

その一方で、ある疑問がふと浮かんできました。幹部候補生学校の教育でBUが同等のレベルに達するならば防衛大学校の意義・強みは何か。

私がB課程が絶対に負けてはならないと思うところは、同期を初めとする周囲の人々を大切にするところだと思います。防大では日常生活や訓練等で常に同期とともに行動し、自分がしなければならないことは何か、役割は何かを常に意識させられます。また、上級生と生活の場で接することで、自分の理想とする上級生像ひいては幹部像を学ぶことができます。さらに、下級生とは時に厳しく時に優しく接することで、下の者の気持ちの汲み方を教えられることが多くあります。

将来我々は指揮官として多くの部下を持つこととなるため、部下を思う気持ちが必要となります。また幕僚として指揮官の仕事を補佐するときは指揮官の企図を感じる洞察力が必要となると思います。そのような人間関係の基礎を防大で学ぶことができたことは大きな財産であると思っています。

また、防大特有の「熱い心」も忘れてはいけないと思っています。校友会活動、学生舎生活の組織運営、カッター訓練や棒倒し等の各種競技会など情熱を注いだ場所は人によって違うでしょうが、何かを頑張ったという事実は重要な財産です。幹部候補生学校でも何かと辛いことが多く責任を投げ出したくなるようなことがありますが、自分の職責を放棄することは幹部として失格です。故に何事にも一所懸命になれる熱い心が大切だと思います。

後輩の皆さんにとにかく伝えたいことは、情熱を持って、また同期・上下級生に温かく接して日々の生活を過ごしてくださいということです。陸上、海上、航空の仲間は離れることとなりますが、防大での生活を「熱くかつ温かく」共有してください。

幹部候補生学校に入校して

海上自衛隊幹部候補生
海曹長　内田　大毅

平成20年３月23日。我々防大52期生海上要員は、晴れて卒業の日を迎え、幹部候補生たる海曹長として任官しました。束の間の休みの後、３月26日に第59期一般幹部候補生として海上自衛隊幹部候補生学校（以下「海候校」という。）に着校しました。小原台で培った同期の絆を糧に、学校と称するが、その実質は修練道場であるという海候校で日々精進を続けています。早いもので防大を巣立ち、遠く離れた江田島の地に降り立ってから約５か月の月日が経ちました。ここでは卒業から入校当初までの心境を簡単に振り返ってみたいと思います。

卒業ダンスパーティーから謝恩会、卒業式という防大４年間を華々しく締めくくる行事を終え、一転、赤鬼・青鬼が住む江田島を目指した日のことは今でも鮮明に覚えています。その日は夕方から江田島では大変な大雨が降っており、同じ下宿の同期とずぶ濡れになりながら「これは歓迎の雨だ」と自分に言い聞かせながら江田島に辿り着きました。

翌日、真新しい制服に袖を通し、大きな不安と期待が入り混じる中、海候校の門をくぐりました。着校から入校式終了までは正式に候補生ではないので赤鬼・青鬼の指導も受けず、その静けさに戦々恐々としていました。しかし数日後の入校式を終え、学生館に戻ると、居室は江田島名物江田島台風の被害を受け、靴は散乱し、毛布は宙を舞っていました。この時は驚いたというよりも、「ようやく始まったか！」という高揚感がありました。当初は、神様のように振舞うことができた防大４学年から、厳しい指導を受け、時間に追われる１学年のような生活に適応できるか不安でしたが、幹事付の「何やってんだ！」の一言で、体は自然と不動の姿勢をとり、大きな声で返事をしている自分や同期がいました。「三つ子の魂百まで」とはまさにこのことだと我ながら感心してしまいました。

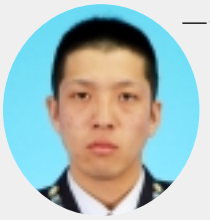
入校から今までを振り返ってみると、一瞬の出来事であったように感じてしまいますが、この５ヶ月で行なってきた訓練や教務の量を考えると、海候校の教育の密度の濃さに改めて驚かされ、幹部自衛官として部下を率いる責任の重さを認識することができました。たとえ基礎的な事項であっても、手を抜かず、全力で取り組むことが要求されます。言い方を変えると、各自の可能性の限界に挑戦することが要求されます。これは自らの実力を向上させ、結果として海上自衛隊の実力を向上させるためであり、この１年間は、手を抜きたくなる弱い心に鞭を打ち、修練に努めています。

また、厳しい環境に耐えながらも、訓練、教務に励むことができるのは、苦楽を共にできる同期がいるからだと確信しております。海候校では一般大卒（２課程）の候補生と、我々防大卒（１課程）の候補生が寝食を共にしており、１課程は生活全般を通じて２課程の手本となる必要があります。そして助け合い、切磋琢磨することで、一層強固な同期の絆を生み、これが将来数十年にわたって海上自衛隊の強さを支える基盤になるものだと思います。このような観点からも、この１年間は１秒たりとも無駄にすることはできず、常に何事にも全力で挑まなければなりません。

現在、日本を取り巻く環境は大きく変化しつつあり、自衛隊に求められる任務や機能も、より複雑化していく時代を迎えました。しかし、時代や任務が変化しようとも、我々に求められる資質とは「困難に打ち勝つ強さ」であり、変わらないものであると思います。強さを身に付け、同期の団結を深め、強い海上幹部自衛官の一員となるために、一瞬一瞬に全力を尽くし、残り半分の教育期間を全うしたいと思います。

防衛大、幹候校そして部隊へ

―やる気は責任感に変わる―



航空自衛隊幹部候補生
空曹長　飯島　隆介

1　はじめに

まず防衛大学校を卒業したばかりの若輩者の私に、この様な自己の発信の機会を与えてくださったことを光栄に思うと共に改めて自分がいよいよ部隊へ旅立つという実感を認識する今日この頃です。今回は「小原台での４年間」、「幹候校で得たもの」、「愛する後輩たちへ」という題にて述べさせていただきたいと思います。

2　小原台での４年間

私は小原台で人生の中で最も濃い４年間を過ごしました。その中で多くの人々と出会い多くの影響を受けました。その中にはたくさんの尊敬できる人々がいました。４年間の中でのひとつのエピソードを紹介させていただきます。

2004年春、私は防衛大学校52期学生として、小原台の門をくぐりました。幼い頃から戦闘機乗りになることを目指してそれまで生きてきた私は、入校してからも陸上自衛隊や海上自衛隊のことには興味がなく、自分は航空要員になる、それ以外なら防衛大学校を辞めるとまで言っていました。本当に視野が狭く、そのままの考え方なら防衛大学校で学べる多くのことを学べず学生時代を終えるところであったと感じる今日この頃であります。この様な愚かな私の思想を変えてくれたのが、当時の小隊指導官の方の熱意と人間性でした。この方は、時間があれば学生の部屋に遊びに来て色々と話をしてくださいました。私も多くの話を聞き、そして話を聞いていただきました。将来の夢や希望を真剣に聞いてくれたり、あるいは私の安易なパイロットへの固執や狭い視野に本気で叱責してもらう中で、徐々に自分の考え方が開けたものになっていくのが分かりました。これは、この方が頭ごなしに私を説き伏せようとしたり、あるいは事務的な付き合い方をしなかったことと、本当に私のことを考えてくれていると感じたことによると思います。そういった中で、１学年の最後には「陸、海、空のどの要員に選ばれても、最大限に努力する。もしも選べといわれたら戦闘機のある空を希望する」という考え方になりました。これは戦闘機乗りになるという目標よりも高い位置に国防の本質というものを確立できたと私は考えています。この様に私は幼い頃から頑固に持ち続けていた狭い視野を一人の指導官との出会いによって、より広い視野に変えることができました。

他にも私に素晴らしい影響を与えてくださった先輩、同期、後輩が多くいます。この様に人と人との真の出会いがあるのが防衛大学校だと思います。私は防衛大学校の最大の意義は人との出会いだと考えています。

3　幹候校で得たもの

幹候校での生活は、防衛大のそれとは大きく異なりました。幹候校では求められる能力はより高くそして実戦的なものとなり、また厳しい服務規律による本質の追求などが存在し、本当に学ぶことが多い半年であったと考えます。この半年の中で私に最も影響を与えた言葉があります。それは私自身の区隊長がおっしゃっていた「幹部は責任感で動く」というものでした。やる気で動くのは子供が何かをしたがることと同じ、やる気はその時の精神状態で大きく変わると言われ、それまで自分の原動力がやる気でしかなかったことが分かりました。部下を導き、日本を守る組織の中核を担う幹部自衛官の原動力がやる気だけでは不十分だというのは言うまでもありません。この言葉のおかげで多少なりとも責任感の芽というものを育成することができました。今ではパイロットになること、日本を守らなければならないということ、その守りをより強固なものにしていかなければならないということ、将来の部下の命を預かるということからやる気と責任感が私の原動力となりました。また私は希望通り操縦要員となることができましたが、その影では夢散った同期も多くいます。そういった同期の思いを無駄にしないためにも、全力でパイロットコースに臨まなければならないと考えます。これも責任感のひとつであるのだと思います。

幹候校では多くの知識や技能を学ぶことができましたが、それ以上に考え方の本質を見つめ直すことができました。私はこの「幹部は責任感で動く」という言葉を常に胸に留め、責任感の芽をより太い幹に育て、今後、自分自身も自信を持って部下や後輩にこのことを教えていけるようにならなければならないと考えます。

4　愛する後輩たちへ

53期、54期、55期そして直に接することの無かった56期の皆さん、小原台での生活はどうでしょうか。充実している人、目標に邁進している人もいると思います。その裏で、なんとなく過ごしている人、悩みを抱えている人もいると思います。私も学生時代は色々でしたが、落ち込む時や悩む時は数多くありました。そんな時、先輩や後輩そして同期など多くの仲間が支えてくれました。もしも今、落ち込んだりしているなら仲間を頼ってください。それができるのが防衛大学校です。そうすれば道は次第に開けてきます。そして、もし周りに落ち込んだりしている仲間がいるならば、その支えになってあげてください。私が先輩として後輩の皆さんに期待することは、仲間を支えることのできる真の強さを持つということです。それは将来、皆さんが幹部自衛官になった時、必ず強い武器になります。本当の優しさは真の強さです。

皆さんに残された時間はあっという間です。小原台での生活を全力で走って、全力で壁にぶつかって、全力で笑ってそして泣いて、一歩一歩進んでいってください。そうすればいずれ訪れる卒業式の花道で熱い涙を流し、かけがえのないものを得ることができたと、そう思えるはずです。

私自身も将来皆さんが部隊に来た時、頼りになる先輩でいられるようにこれからも日々努力、日々修練です。皆さんが部隊に元気な姿で来ることを楽しみに待つとして、結びとさせていただきます。

今人生、男盛り

古希を迎える６期生

関口　鉄也（６期・海）

私が平成５年の晩秋に海上自衛隊を定年退職し、現在の会社に再就職して既に15年が過ぎました。当社は最初「深田サルベージ建設株式会社」の一部門が当時の防衛庁から洋上での役務作業、製造等を請け負っていた業務を平成２年１月独立して専門に行なっている会社です。業務の主な内容は、技術研究本部で開発中の洋上での試験作業の支援、航空自衛隊のミサイル発射訓練の標的を設置・撤収、海没航空機の捜索・回収、防衛機器等の製造会社の社内試験支援等です。技本に勤務する同期生から、「深田」で艦長経験者を探しているとの情報を得て、応募して採用されました。まるで転勤のように退職の翌日に引き続き、しかも海に関連する仕事に就けたことは本当にラッキーで、クラスのおかげと感謝しています。社長（１期）はじめ殆どが空自OBの会社でしたが、私も民間会社の業務に戸惑うことばかりでした。まだ不慣れな２年目、役員ではないけれど副社長的な配置を任され、まごついているうちに海自の航空機が立て続けに３件海没しました。総監部の会計課への見積り提出、原価査定の折衝等初めての仕事で戸迷うことばかりでした。このときも当時現役の同期生に随分と助けられ、おかげで赤字にならない契約ができました。入社したころは、契約額も結構多かったのですが防衛費削減の影響を受けて以来、厳しい契約が続いています。冷戦が終わったと言われ、今日明日にもと言う事態がない今こそ、研究開発と訓練に費用をかけるべきと、現役の後輩に訴えるのですが、なかなかその方向には進みません。況して、家庭の主婦の感覚で防衛費を査定したなどと、嘗ての主計官に言われるようでは平時の軍隊の存在意義が損なわれます。

今年の２月、米国での装備認定試験を優秀な成績で終えて帰国途中の護衛艦が、入港直前の伊豆大島沖で、漁船と衝突し乗組員２人が行方不明となりました。出勤前のＴＶのニュースを見て、当社が出る幕はないかなと思いながらも、横須賀地方総監部に、もし必要があったらと会社の電話番号を伝えました。出社すると、早速に漂流している漁船の船体を横須賀まで運んで欲しいとのこと。既に、「深田」では、対応できる船舶の手配を始めており、我が社は防衛部との打ち合わせに専念することになりました。しかし距岸20マイル以上の沖合に出られる曳船が東京湾内で見つからず、黒潮で近くまでに流されて来ればなどと考えていました。結局警戒中の自衛艦が房総沖まで曳航して、洲崎灯台の沖合で受け取ることになり、事故当日の夕刻には「クレーン台船」「曳船２隻」を出港させることが出来ました。この間の調整には、OBとして相手の立場や事情が理解できる自分が十分に役に立てたと自負しています。

９月には、八戸沖での空自の「ASM射撃訓練」の標的設置・撤収作業を請け負い、工事部長（海上15期）に現場作業を任せ、私は10月に予定されていた「新型魚雷試験」の準備にあたっていました。その最中に空自の「Ｆ－15」が山口県沖に墜落、幸いパイロットは脱出生還しましたが、事故調査のため機体の引き上げを空幕から受注しました。現場作業はグループ会社の全面的な支援を得るとともに、空自OB（９期）を派遣し、機体の大部分を回収することができました。契約工事がなく、暇

新型魚雷試験中

な時があるかと思えばこのように３つも工事が重なるときもあり、会社に泊まり込むときもありますが、まだまだ元気にフルタイムで通勤しています。

我々６期生は今年の春で幹部候補生学校を卒業して、３等陸・海・空尉に任官して丁度45年になります。２年前から江田島に集まろうと私が発案して、準備を進めてきました。その日が10月17～18日で、直前に３つの工事に追われ、あわや幹事の私が不参加かという事態でしたが、なんとか工事の方も落ち着き、同期生のおかげで「任官45周年記念」のクラス会も盛大に実施できました。我々が候補生の時の学校長は、父と兵学校同期で、「クラスを大事にしろよ。いつどこで助けられるか判らないのだぞ」と言われるのが口癖でした。実際私も現役時代は勿論、前述したように退職後も公私ともに何度も助けて貰いました。その言葉が忘れられず少しでもお役に立てればと、幹候のクラス会幹事、そして「６期生会」の業務幹事を引き受けて、今この原稿を書いている次第です。しかし、残念ながらクラス会の案内にも返事を下さらない級友が若干おられるのも事実です。自分の青春を、人生の大半を捧げた母体に背を向けてと疑問を感じます。おこがましいようですが、防大だけでなく、クラス会・同窓会を大事にして行きたいものと思います。まだまだ公私ともに（？）生涯現役を目指して頑張っている老水兵の戯言を、「新型魚雷試験」の現場での写真と共に、お目を汚させて頂きます。

（オフショアエンジニアリング株式会社　事業本部長）

思いつくままに

椿原　久生（７期・空）

１．はじめに

08年５月に行われた三八会（７期の有志で作っている会）の恒例の旅行の際、参加者の一人から「お前の言うことは、いつも先走っていて理解しにくい、学生時代と少しも変わっていないなあ」と同期ならではの有り難い“忠告”をいただいた。反省をしてみるに今までいろんな役職、ロータリークラブ会長、三重県建築士事務所協会会長、日本建築士事務所協会連合会政経研究会（政治連盟）会長等を経験した中で、少しもそのような事を言われた事は記憶にないものの、よくよく考えてみると確かに先に先にと走ってきた人生であったと、又、いつも自分の思うのと違った方向に進んで来たように思われる。

目が悪くなってきたと思い、いろんな治療も受けてみたが良くならないので随分思い悩んだあげく、別の方向に進んだものの高齢になった今日でも遠距離視力もほぼ1.2以上、老眼に至ってはほとんど不自由無く、読書の際百均の1.0の老眼鏡をかければ全く支障が無い状態である、日々、いろんな健康法を試みる中で目のトレーニングも欠かしてはいないものの自分が早とちりなのか？運命なのか？思い悩む今日この頃です。

先に挙げた役職にしても自分の意に反して押しつけられたものがほとんどであるのは運命のいたずらと己の意志薄弱のせいと反省しきりであるが、既に「手後れ」です。

この原稿を書かせていただくにあたっては、同期の山本征路君、伊藤文夫君の熱心なお勧めがあり「自分より適任者がいると思われる事と、小学生の時より作文が不得手」を理由

に固辞したものの、早く辞めた者の“懺悔録”と言う意味でも書くべきだとの“ご命令”に従う事にしました。

2．振り返ってみて

確たる目標がないまま退職したものの、やることもなく無為に時間は過ぎて行く、ふらふらと名古屋の街を彷徨っていると偶然に6期の先輩と出会い「どうせ低空飛行で電気工学を卒業したのだから、もう一度勉強したらどうか」と有り難いご忠告をいただいたが、第2外国語が中国語（それが後に大いに役立つ事になる）だったので大学院は無理、それならと建築に進んでみようと編入学を探したところ、国立は2年へ、私学は3年へ、但し、試験の結果によるとのことであった。入った以上卒業しなければ意味がない、結局40人近い受験生の中から自分一人3学年に編入学を果たしました。

2年間はそれこそしっかり勉強し領収書（卒業証書）を手にする事が出来ました。

その後は、三重県では最大手の建設会社の工事主任を経て、1972年1級建築士事務所、土地家屋調査士、行政書士事務所を開業、1974年法人化し07年9月末廃業するまで官公庁の仕事を主に建築物の設計、管理・測量・登記等を行いました、電気工学を防大時代専攻したこともあって、意匠設計はもとより、構造計算、設備設計、積算もほとんど手がけましたが、反面、どれも極致を究めるには至らなかったのが心残りです。

現在は個人で、年金（厚生年金）生活をしながら、上記の仕事を気の向くままやっていますが、官公庁の仕事は当然ながら全くやらず、個人の仕事をボランティアも兼ねてやっています。

元来、暇があれば“ごろん”として週刊誌を読んだり、くだらないドラマを観たりするのが趣味と言えばそれだったのですが、実際はそうはいかず、04年に父が亡くなってから残された10アールほどの梨畑、7アールほどのミカン畑、その他柿、梅、野菜等を栽培しなければならない事になり、繁忙期には朝4時頃起床し、出勤までの時間（今は関係なし）、土日の余暇をそれに当てています。

丹精した梨園　08年4月

最近は、これらの果樹、作物もかなりいい物が採れるようになり、これも長年努力した土作りの成果で、栽培はこちらの努力が敏感に反映することを実感すると共に、大きな事を言うようですが、これからは我が国も生鮮食料を外国に依存するのではなく、ある程度は国産でまかなうべきだと痛感する次第です。

冒頭に述べました健康法ですが、40歳を過ぎた頃から体操－持久走－ストレッチングを始めましたが、これは体全体に良く、特に目、耳、歯、頭髪に良く若さを保つ秘訣でもあると思います。

3．未来に向かって

現在の建設業界は厳冬の時代であり、全くのいわゆる“三ちゃん”の家内工業か、大企業以外は経営が相当難しいと思われます。

企業全体で考えても、中小企業が生きていくには、他がまねの出来ないノウハウを持ち常に商品、工法等の開発、研究等を怠らない姿勢が必要であり、如何に顧客のニーズを満足出来るかが問題であると思われます。

「人生男盛り」はこの年齢になると、どんなに贔屓目に見ても、とうの昔に過ぎているが、

何かのコマーシャルのように「健康であればどうにかなる」思われるので、益々節制に相務めていきたいと思っています。

07年９月に会社を引退した後、小学生の時から憧れていた音楽の世界に一歩を踏み入れ、小学生の時はクラリネットだったのですが、今度はアルトサックスにして、若く、厳しい男の先生の特訓を受け、今では何とか「防衛大学校学生歌」をまがりなりにも吹けるようになりました、もう少し上達したら、ソロ演奏で老人施設等を訪問したいと思っています。

最後に後輩諸君に申し上げたいのですが、結婚をしていても異性を好きになることがありますが、決して悪いことではありません、但し慎重を期することが肝要です。

以上、拙い文章ですが、「私の生きざまを紹介する」責を果たす事が出来れば幸いです。

幸運な出会いの人生

黒河　治重（８期・陸）

これまでの人生

幸運な出会いが私の人生の転機となりました。防衛大では槇校長先生であります。厳しい中にも優しさを兼ね備え、私のみならず同期生殆んどが尊敬していたと思われます。このたび、槇先生の記念室が出来ることを聞きうれしい限りです。防衛大を出て自衛隊に定年まで勤務のはずが、防衛大研究科での岡崎清先生との出会いがきっかけで私は民間企業に転職したのでした。経師は遇い易し人師は遭い難しと言われますが先生は自分の進むべき道を教えてくれた人でした。岡崎電子材料研究室ではとにかく生の実験データはどのような理論武装の研究にも勝るということを教えられこれに深く感銘し、後に企業に行っても現場主義を貫きとおすことが出来たのです。先生とはお亡くなりになるまで公私共にお世話になり感謝の気持ちを忘れることが出来ません。一方、趣味の手相での出会いは当時自衛隊の月刊誌で手相コラムを連載されていた手相家門脇尚平先生です。私は北部方面通信群札幌に赴任してから隊員とのコミュニケーシヨンに手相を活用していた程度のものでした。退職を決断する前に門脇先生を訪問し私の将来を占ってもらいました。先生は鑑定後即座に自衛隊に残っても良いが、転職しても将来は満足のいく結果になるとの言葉をいただき、そんなに手相で人の人生が読めるのかと半信半疑でした。岡崎先生と、門脇先生の２人との出会いで私の退職の迷いが決断に変わったのです。門脇先生との出会いから手相鑑定に趣味としてのめりこむようになり、会社生活においても、特に、海外に出張した折にはお客様との夕食会には必ず手相

を見ることでビジネスの潤滑油として威力を発揮しました。次は仕事との出会いですが、今日では隆盛を極めているハイテクの半導体業界も45年頃当時は想像もできないレベルの揺籃の時期でありました。、中途入社で国際電気株式会社（現日立国際電気）に入り、半導体装置の国産化に従事させていただいた訳ですがここでの出会いはSiエピタキシアルCVD（化学気相成長）技術です。この技術を駆使しての装置開発研究をテーマにあたえられたのです。失敗と成功を繰り返しながら定年まで継続して30余年間も関与を続けることが出来ました。会社でも上司、部下にも恵まれ支えていただいた結果ではありますが、昭和59年にはエピタキシアルCVD装置開発で科学技術長官賞の功労賞を頂き、夫婦で受賞式に招かれ出席しました。その後、半導体のグローバル化と相俟って半導体装置開発、拡販ビジネスを世界的に展開することができ、お客様からも高い評価を受け、新工場を富山県八尾に建設するまでになりました。自分が責任者としてやり始めてここまで事業が拡大したのは良かったのですが、仕事の多忙と相俟って日増しに欧米、アジアなどへの海外出張が増え、社内での事業経営推進の責任などの激務とストレスなども重なり体調不良となり、防衛医大に58歳で入院する羽目になりました。しかしここでも防衛医大の神の手と言われた望月教授に運よく出会え執刀していただき、進行ガンからの奇跡的な完全回復ができました。自衛隊後の半導体業界に身を浸し業界特有の景気の好不況に翻弄されながらも入社からエピCVDと言う技術一筋でその後は会社の経営陣としても12年間の長きにわたり従事させていただき無事63歳で定年を迎えられたことはラッキーでした。また、エピタキシアルCVD技術は防衛機器に使われるエレクトロニクス部品作成には不可欠なもので国防にも少なからず貢献できたこととうれしく思います。

これからの人生

退職後は前会社関係での人材育成研修のために週１日出勤しております。私の場合は一度生き帰ったもうけものの人生ですので欲を出さず、健康第一に考えております。このため毎日１万歩以上歩くことを実行し、そして自分でも料理が出来ることが必要と考え、男の料理学校に月１回通っております。次に大切なことは趣味をたくさん持つことと思いますが、現役中は忙中閑ありで興味あるものには挑戦してきました。しかしものにならないものが多くこれからは峻別と断念を重要視しております。まずはゴルフですが雨読晴ゴルフで毎年50回以上自分のホームコースや、同期生とのプレイができること。目標は大きく、ホールインワンとエイジシュート達成です。結婚後37年も私を支え続け、息子も育ててくれた妻に対しての御礼の有言実行を考え、妻の希望する国内外旅行をすでにスタートさせております。家では鉢植えのバラ作りに頑張っており、妻には咲かせたバラの花を月１本贈ることを実行しようとしております。健康、趣味と家庭が三位一体となつて末永く夢のあるエクセレントな人生をおくれることが男のロマンと思っています。

『男盛り』について思う

林　　吉永（９期・空）

「防衛大学校同窓会本部事務局から依頼があったから「機関誌『小原台だより』へ寄稿せよ」と、現在の職場で隣りに席する、九期生会業務幹事である林茂君の命を戴き、こうしてPCキーボードに向かって指を動かすことになった。こんな場合、チョイとふた昔前ならば「筆を執ることになった」などと、粋な言い方が有ったのだが、今は、何かにつけ我が年頃には馴染みが薄い「話し言葉・書き言葉」の時代になってしまった。子を持つ親の世代も含めて・・・私から見れば・・・若者の、「尻上がりで、言葉を縮めてしまった、しかも早口」の会話に慣れなければと思いつつ、同年輩の者が「若者言葉」に染まって話すのを耳にして腹立たしく思うこの頃である。

さて、命題は、「今人生、男盛り」に適うものとのご注文である。辞書・・・これもPC及び電子辞書・・・ネット検索のクリックを重ねていくと最終的に「男の精力」に行き着いてしまうので「はまる」ことを警戒し中断・・・を繰ると、「男盛り」の説明・解説がある。曰く、「男が心身ともに充実し、元気いっぱい働ける年代、多く、三、四〇代をいう」、「男性の、心身ともに充実し、最も活力の旺盛な年ごろ」とある。アナログ版の『広辞苑』では「男の最も血気盛んな年配、壮年（年若く元気盛りの時、またその年頃の人）、壮齢（血気盛んな年頃）」であった。英語では、「男盛りである」というのを“ be in the prime of (one ̓s) manhood ”と表現する。ちなみに“ manhood ”は、「成年、成年男性（であること）、壮年期、男らしさ、（男性の）生殖力、（集合的）男子、人間であること」だそうだ。

片手落ちではいけないので、「女盛り」を見ると、「女の一生のうちで、最も美しくなる年頃、また、女として最も成熟した年頃」と記されている。どうもこれら男・女二つは対を成しているようだ。

このように「盛り」の概念を理解すると、どうも「命題のご注文」が何を求めているか判らなくなった。平均的に観察すると我々の年齢は「男盛り」ではないのだ。個人的願望として、また、特例として「男盛りを持続させたい」のであるが、某三期先輩からは、「60歳を超えると体力の衰えをはっきりと感じるよ」と忠告があり、現在はその現象を実感している最中である。

しかしながら、自衛隊の中に、密かに存続する・・・帝国陸・海軍にもあったと仄聞している・・・そちらの方が元祖かもしれない・・・「精神主義」があって、自衛官が現役である限り「男盛り」を高揚させていることも確かである。その効果として、自衛隊以外の職業に就いている男子との比較において、自衛官が若く見えることに異論は無い。陰では、「頭を使わないし、社会的苦労を知らない世間知らずだから」と言う声があって、それもそうだと頷いてしまいがちである。自衛隊の任務、宣誓を思い起こせば、実際、「男盛り」でなければ「命がけの使命遂行」に支障が出てしまうのである。そうすると、自衛官に限っては「男盛りの年齢」が「入隊から定年まで」となる。先輩・同輩・後輩諸兄！ホントにそうでしたか？

同様の「命がけで国民の生命や財産の安全、保護のために行動する男盛り」が求められる立場は、警察官、消防士、海上保安庁の隊員にもある。しかし、こんな理屈が通らなくなった。それは、「命がけの男盛り」を標榜する立場に女性が採用されるようになったからである。関係する諸機関の「女性導入」制度に馴染んでから久しい。

そこで一言物申したい。「男盛り」の時間帯延長を義務付ける世界に「女盛り」は持ち込めないだろう。それは、修羅場に在って、「男盛

り」の連中が「女盛り」である同僚の保護に執心してしまうことが十分に考えられるからだ。当然、制度の立ち上がりにおいて、マーフィーの法則ではないが、「男盛り」と「女盛り」の同居は「自然界の法則」が優先されることが多く、自衛隊の職務上大きな障害となることが予測されたのである。

だから、「女盛り」の戦闘職への任命は、「『女盛り』を捨てて頂かなくてはならない」という条件があったはずである。部隊においても、指揮官は、「女盛り」を隔離するのではなく、「男盛り」と「女盛り」ならぬ「男勝り」とを戦力発揮にプラスする方向で同居させることに意を用いねばならなかった。ところが、部隊においては「女盛り」を「男盛り」から隔離、保護することに力を入れ、仮眠室・洗面所など女性用施設を整備した。米国のミサイル部隊などでは、地下サイロに24時間シフトで男女混合チームを勤務させ、仮眠ベッドはカーテンで仕切っただけ、シャワールームは共用である。そこでは女性用の特別施設は無い。

さて、このような観方をすると、次には、自衛隊が「男盛り」の集団なのかどうか確認したくなる。自衛官の中に、「男盛り」からはみ出している妙に老けた輩はいないか。「羹に懲りて膾を吹く」の類は「老長けた」人種であって、すこぶる用心深く臆病である。この個性は、時として「戦闘・作戦」という文脈の中で「命がけ」への適応が憚られることがある。我々の現役時代には、このような人種があちこちに居たような気がする。

ところが、今は違う。国際平和維持活動派遣部隊の自衛官諸官は、「命がけ」でミッションに挑んでいる。「男盛り」のムンムンする仕事ぶりに敬意を表したい。『小説防衛省』（徳間書店・2008年）に書かれた「落合峻ペルシア湾掃海部隊指揮官以下509名の掃海活動」や、カンボジアに派遣された「渡邊隆施設大隊長以下600名の施設工事活動」には、最も命の危険にさらされる部署に油の乗った「男盛り」が自ら志願し、真摯に任務を全うする様子が描かれていて感動する。

今日では、既に延べ一万名に届く数の隊員が、二十箇所を超える国、地域において国際平和維持活動や戦乱によって荒廃した地域の復興支援、或いは、大災害の救難・復興など多岐にわたる危機管理の修羅場に赴いて「男盛り」を発揮している。彼らユニフォームの後輩達が、国際システムの一員として、日本を背負って国際安全保障に寄与している現実を直視したい。そんな彼ら後輩達を誇りに思い、彼らの力を尽くした活動がもたらす国際社会への貢献が、「日本の安全保障と国益」に大きな役割を果たしていることを国民と共に感謝したい。

さて、他方、我々の時代は、日本の社会から疎外され、「とにかく事有れば命がけで祖国の防衛に、国民の安全と保護のために働くんだ」と自らに言い聞かせることで内なる使命感を奮い立たせていた。そんな社会環境の中で、部隊のそこかしこに「『男盛り』を終了した現役自衛官」がいた。そこには「命がけ」が観念的に過ぎなかった「時代精神」があった。今日の自衛隊が見せている進化を考えると、「先輩」と奉られ「後輩」を利用することしか考えない「『男盛り』を過ぎた我が身」とのギャップがどれ程大きいかということに気付き、「男盛り」の後輩達に「何をしてやれるか思うべし」と反省する日々である。

指揮官と幕僚

酒巻　尚生（10期・陸）

昭和41年３月小原台を卒業した私は、翌年３等陸尉に任官し札幌に駐屯する第11戦車大隊に赴任しました。陸上自衛官勤務の始まりです。その後の約35年間、戦車中隊長、戦術教官、陸幕等幕僚（防衛・人事・教育訓練・調査）、米国防衛駐在官、第９師団長、防衛庁統合幕僚会議事務局長などを勤め、平成11年３月、光栄にも北部方面総監を拝命して思い出の地「札幌」に再度勤務することができました。平成13年１月に退官しましたが、当日は、35年間慣れ親しんできた制服を脱ぐことの寂しさを感ずるよりも、充実した自衛官生活を送ることができた大いなる満足感で、終日自分でも不思議なくらい爽やかな気持ちをもって部隊を後にすることができました。退職後は、後輩の皆さんのお世話をもって（株）日立製作所に顧問として入社し、これまでの約８年間を現役時代とはまた違った意味で充実した日々を送らせてもらっております。

現役時代を振り返れば思い出は枚挙にいとまがありませんが、このたび、機関紙「小原台だより」へ投稿する機会を与えられましたので、幹部自衛官、特に防衛大学校出身幹部全員に等しく要求されるであろう「幹部自衛官としての責任」の一端について私見を述べさせていただきます。

平成６～８年頃、幹部候補生学校で実施した職種希望調査で、戦闘職種（普・特・機）希望者が激減し、通信・武器等の後方支援職種（技術職域）、さらには、会計・音楽職種等の希望者がかなりの人数に上っているという事象が起こりました。更に、若手幹部のなかで「責任を執りたくない、執らされたくない」という極めて退廃的な理由をもって中隊長等の指揮官職を希望しない者が多く存在しているという事実が部隊等で多く見受けられました。

当時、若者の間で３Ｋ（キツイ・汚い・危険）回避の風潮が蔓延しているということは仄聞していましたが、陸上自衛隊の中で、それも幹部自衛官の主流を占めるべき防衛大学校卒業者のなかにもかかる風潮があるとは、私には到底信じられませんでした。自衛隊を単に一つの就職先と捉え、できることなら３Ｋを避けつつ平穏な日々を送り、また、できるだけ責任をかぶらないような生き方を選択し、さらには、退職後の再就職を少しでも自己に有利にするためには普・特・機のような戦闘職種で苦労するよりも現職間に何がしかの技術が身につく技術職域を希望した方が良いといった極めて利己的な考え方などが若手幹部のなかに蔓延していたとしたら、自衛隊という組織の基盤を揺るがす大問題でなかろうかと真剣に危惧したものでした。

私自身は、迷うことなく「機甲科」を希望しました。陸上自衛隊の道を選んだからには、指揮官として思う存分部隊を指揮してみたいという極めて単純な気持ちが強かっただけであったかも知れません。生まれて初めて戦車に乗って（乗せられてといった方が適当かもしれませんが）北海道大演習場を駆け回った小隊長・中隊長時代は失敗だらけの中にも今振り返っても楽しい思い出が山積されています。特に、28歳で戦車中隊長を拝命した時の心地よい緊張感はいまだに忘れられません。生まれて初めて57名の隊員と戦車８両を預けられたのです。中隊構成員の２/３は私より年長であり、また、戦車乗員としてのみならず人生経験の豊富な人たちばかりであったことから「自分に中隊長が勤まるのか？」との大きな不安を抱えつつ中隊長に就いたのでした。「私は私でしかない。自分をさらけ出して体力・気力の続く限り中隊の先頭に立っていこ

う」と腹を決めつつも、ともすれば責任の重圧に押しつぶされそうになりつつ挑んだ中隊長勤務でしたが、汗を流し油に塗れた悲喜交々の日々を隊員の皆さんと一緒に過ごすことができた充実感・満足感は、私にとって今でも人生の大きな宝物となっています。当時の中隊の方たちとは40年近くたった今でも時々再会し往時を思い出しつつ杯を上げております。

昭和55年に陸幕防衛部に補職されて以来、私の自衛官人生は大きく方向が変わり、熱望していた大隊長（英国留学のため）、連隊長（米国防衛駐在官のため）などの指揮官職の機会が得られることなく、平成８年に第９師団長を拝命するまでは所謂「幕僚勤務？」主体の勤務態様となってしまいました。

巷間「責任を執らされる指揮官よりは気楽な幕僚のほうが良い」などの風潮があると言われておりましたが、果たしてそうでしょうか。指揮官は指揮官として、幕僚は幕僚としての責任の取り方があるはずです。指揮官と幕僚という立場上の相違、負うべき軽重の度に差違があることは事実でありますが、「責任」は幹部自衛官であれば誰しもが共通して背負わなければならない極めて基本的な資質そのものであろうかと思います。

防衛大学校以来「二人以上揃ったら組織として行動せよ。そして、その中の先任者が指揮を執れ」と言われ続けてきた事は諸兄等しく認識していることと思います。私は常々「幕僚といえども指揮官である」という考え方を持って勤務して参りました。若い頃の一時期、私は恵庭市に駐屯していた第一戦車団（昭和55年度末の改編で第７師団に吸収される形で廃止）第３科で訓練班長として勤務しておりました。訓練班長は紛れもなく一幕僚でありましたが、同時に班所属の６名の優秀な幹部・陸曹を指揮する小部隊の指揮官でもあるとの自負心を強く持って勤務したことを記憶しております。団の教育訓練に関する計画・実施全ての面での役割を任されていた以上は、職務遂行の段階で生じた全ての事象（例え、班員の責めによるものであったとしても）に関する第一義的な責任は班長である私にあったのです。

指揮官には「最終的な決断を下さねばならない」という幕僚に比しより厳しい責任が要求されており、この事が常時目に見えない重圧感となっていることは論を待ちません。しかしながら、この事が「幕僚の責任の軽減」を意味しているものではなく、行動の結果について全責任を負うという覚悟は、幹部自衛官であれば誰もが常に持ち合わせていなければならないのではないでしょうか。「責任を負わねばならない指揮官よりは幕僚の方が気楽だ」と考えている人は、組織の本質に対する理解不足以前に幹部自衛官としての基本的な資質に欠けている者であり、早々に自衛隊を去った方が良いのです。

特に、小原台で４年間研鑽を積んだ防衛大学校出身幹部はかかる心構え、即ち、「常に自らの身の処し方を考えながら、自分で選んだ幹部自衛官の道を全うする」気構えを持って自分自身を律していくことがより強く求められております。なぜならば、「廉恥・真勇・礼節」の学生綱領がこれらの基本的な心構えを四年間の小原台生活を通じて教えてくれているからです。

「責任をとる気のない幹部、責任をとれない幹部」の存在は自衛隊にとって「百害あって一利なし」なのであります。防衛大学校の卒業生全員が強い責任感と行動力を持って常に部隊等の先頭に立っていくことを希っております。

就職援護の現場から

(財)自衛隊援護協会福岡支部長
吉田　邦雄（11期・陸）

1　はじめに

（財）自衛隊援護協会は、厚生労働大臣から認可を受け退職自衛官の無料職業紹介を実施している組織です。即ち、企業からの求人を受理し、求職者（退職予定自衛官）の皆様に提示して、就職試験（面接がほとんど）時に紹介状を発行し、企業から採否通知書を受領して就職を完結します。全国に札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡に７コ支部を配置して活動しています。さはいいながら、少人数のため各地方協力本部、陸・海・空駐屯地、基地の援護センター等と協同しながらの業務遂行になります。私は平成11年に定年退官し、約５年間民間のビルメンテナンス会社で働きました。採用・人事担当、警備部長、ISO取得のための準備室長、支社長等を経験し、退職自衛官も相当数採用し現場で運用しました。現在の仕事に就いてから２年７ヵ月が経過し、退職自衛官の再就職に関して、現役の後輩諸官に何らかの参考になればと思い投稿させていただくことにしました。

2　現在の労働情勢及び雇用環境

平成18年４月１日に高年齢者雇用安定法が施行され、企業は社員に対して65歳まで職場を提供することが義務化されました。（平成25年から、現在は移行期間中です。）既に大手企業はほぼ100％この制度になっています。社会的には65歳まで働ける労働環境が整備されつつあります。団塊の世代の集団退職、少子化からくる18歳年齢人口の減少により労働力人口が減少し、子育ての終わった女性の再雇用の検討、各職域における外国人労働者の雇用の検討等が進められています。（20年度は介護職域にインドネシアから要員の雇用をしました。製造業においては日系ブラジル人３世までの受け入れをしています。）

現在の雇用環境は、特に九州・沖縄地区において極めて厳しく平均の有効求人倍率は、各県とも0.5から0.6で推移しています。自衛隊の定年退職者の主体である50歳代にあっては、0.3から0.4程度です。つまり50歳代では求職者３人に対して仕事は１つしかないという状況にあります。世界的な景気の低迷が予測され、ここ数年間はこの状況は改善されない見通しです。

3　自衛隊と民間企業の違い

自衛隊は現在の日本社会の中で、極めて優秀な、稀有の組織、集団です。同業に近い警察、消防と比較してもその優秀性は群を抜いています。皆さんは気付いていないと思いますが、佐官では数回から十数回の職務を代わり、色々なポストで勤務するうち、体力や精神力はもとより企画力、調整能力、文書作成能力、実行統制能力、分析能力、報告能力等が身についています。又自衛隊はあらゆる教育制度が整い、各種の手厚い教育を実施しています。一般の公務員と違い若年定年制を取っていることから、就職援護のための教育についても定年10年前の能力開発設計集合教育、３年前の業務管理教育、技能教育、就職補導教育、通信教育、部内・部外技能教育等が実施されています。

民間企業では、現業をこなすのに精一杯で予算的にも人員の余裕からも教育など実施できないというのが実情です。その結果、組織・規則が未整備、企業内上下左右の連絡調整・報告が不十分・・

誰が、何の根拠で、何をやっているのかさっぱり分からない。特に中小企業では社長が発案しなければ、誰も動かない等の特性があります。自衛隊を退職して再就職した際、最も戸惑うことの一つです。気が遠くなるような文化の違いがあります。

4　求職者（現役で活躍中）の皆さんへ

現役で仕事をされておられる時は、定年後の再就職のことなど念頭にないと思いますし、充実した生活を送っておられることと思います。しかしながら50歳代半ばで定年を迎え、年金支給は65歳からという厳しい現実があります。

平成19年度の九州地区における佐官の定年者の就職状況は、業種の多い順に ①金融、保険業 ②サービス業 ③公務、団体 ④製造業の順となっており、これで全体の85.5%を占めています。職務で見ますと ①専門的・技術的職務 ②管理的職務 ③事務的職務 ④サービスの職務 ⑤保安の職務の順で、これで全体の92.5%です。又年収は現役時代の1/3程度に低下するのが一般的な状況です。

50歳代の人の平均余命は、90歳というデータがあります。定年後35年の人生があるという事で、悠悠自適でノンビリ過ごすには長過ぎますし、又経済的にもそれは許されないというのが実情だと思われます。充実した人生を送るためにも、定年後は再就職することが必要です。このためには、就職援護のための教育（3項で述べた）に誠実に取組み、就職する心構えを確立すれば、退官後の再就職には十分対応できます。業務管理教育等受講時に次のような自己認識を是非実施していただきたいと思います。

・自分は何が出来るか・・自分の職務経歴を整理し、自分に何が出来るかを明らかにする。
・なぜ働くのか・・再就職の原点となる就職意欲を確立する。
・経済状況・・子供の教育、家のローン、その他必要な経費は？
・健康状態・・血圧、血糖値等の中高年症候は大丈夫か？

5　終わりに

陸上自衛隊の西部方面総監部で実施される幹部の業務管理教育に参加して感じることは、援護協会のことが、定年数年前の方にも理解されていないこと、定年は遠い先のことと真剣に考えておられないこと、或いは定年後の再就職は駐屯地の援護センターが世話してくれる等と他人事のように思っておられる方が多いことです。

この事が原因の一つとなり、定年後充実した仕事に就いておられる方が多くない現実があります。紙面の都合で意を尽くせず申し訳なく思いますが、援護協会は退職自衛官のための組織です。我々は退職者の幸福の追求を目的と捉え、退職する自衛官の方のお役に立てる、第二の人生の幸せを確保できる援護を常に考え業務を実施しております。何か疑問なことがあれば、遠慮なく援護協会支部或いは駐屯地・基地の援護センターに問い合わせて下さい。

最後に、「俺はこんな仕事がしたい。こんな求人を探してくれ。」と我々を或いは駐屯地援護センターの援護マンのケツを叩いて下さい。

入校式

101km完歩記念

英語授業風景

断郊

小原台は今

槇記念室完成・ご来館あれ

遺品

防衛大学教授
田　中　宏　巳

現職の教職員で槇先生を直接知る人がほとんどいなくなり、学生の中に「槇」の字を読めない者が出始め、何か方策を講じないと、草創期の歴史が風化しかねない状況にある。槇先生が学校長をつとめておられた時期に、今日まで続く組織制度、教育訓練内容、学生舎生活、校友会活動等の骨格が成立し、伝統が形成されてきた。したがって片時でも本校に身を置く者は、意識してもしなくても槇先生の影響を受けているのである。

組織も発足後半世紀以上も過ぎると、歴史的価値をもってくるのか、古本屋の書棚や古本リストを見ると、随分と防衛庁・陸海空自衛隊関係や防大関係の資料が多くなった。まだ旧軍には及ばないが、それほど遠くない時期に追い抜くのは間違いない。自衛官OBや現役諸官にも、自分たちの足跡が歴史の一部になりつつあることへの自覚が芽生えはじめてはいるが、そのためにはどうすればいいか、確たる方向が見えずに迷っているのが現状ではないかと思う。

防大の歴史の極めて大きな位置を占める槇先生の足跡を残すために、五百旗頭学校長及び馬場副校長の指導の下で、資料館展示という形を取ることになった。年史や伝記の編纂、研究組織の設置などの方法がある中で、資料館展示の方法を選ばれた五百旗部学校長の見識に深く敬意を表するものである。なお作業部会の立ち上げ、諸経費の捻出等に尽力されたのは丸茂前総務部長で、お陰で苦手な予算の話に煩わされず、展示内容の吟味に専念できた。また事務局を引受けた総務企画室高橋事務官の行き届いた配慮にも大いに助けられた。

私を含めた校内の教官四名（横山、羽鳥、野村）と外部の有識者三名（尾頭、内田、山田）の合わせて七名でプロジェクトチームが編成されたが、外部有識者とは槇先生を知る本校の卒業生（八期、十一期）である。卒業生と組んで作業を進める例は過去になく、その意味でも画期的プロジェクトとして自賛したい衝動に駆られる。教官四名は槇先生をまったく知らない世代であり、卒業生の助言を受けなければ、あらぬ方向に展開していたかもしれない。

遺稿

チームを立ち上げて、ほぼ一年間にわたり二週間に一回のぐらいのペースで、槇先生の著書、原稿を教材に勉強会が開かれた。五百旗頭校長、馬場副校長もときどき出席され、とくに馬場副校長は槇先生に関する思い出を数多く披瀝された。槇先生は英オックスフォード大学で歴史学を学んだが、一方で有名な政治学者アーネスト・バーカーに師事し、慶應義塾大学では政治史、政治思想史の講義を担当された。そのため先生が書かれたものは、哲学的あるいは思想史的記述が多く、正直いって難解で、何を話しているのかよく分からなかったという卒業生の懐旧談に納得した。途中から、哲学を専門にする轟教官に勉強会に入ってもらい、氏の解説を受けることでようやく理解が進んだ。

槇先生が前身である保安大学校長に就任されたのは、昭和二十七年八月である。警察予備隊が創設されて二年、海上警備隊の創設とほぼ同時期である。この時点で、陸海一本の幹部養成校の設立を決めた勇気に驚く。すでに内務省系の後藤田正晴、内海倫らにより概要が固まり、槇校長の着任によって最後の詰めがなされた。保安隊の要請を待って教育内容を決めるのではなく、それに先行して立てられたわけである。幕末、海軍操練所が先にあり、そのあとから海軍が設置された歴史的経緯を見ても、幹部養成が陸海軍の設立に先んじるのは、特異な現象ではないらしい。幹部養成が先行し、その卒業生により陸海（空）の設立と発展が進められるとすれば、幹部養成こそ保安隊・警備隊、そして自衛隊発展の根幹であると断言しても過言であるまい。

本校の教育目的には二つの流れがある。一方は第二次大戦における旧軍の失敗から学んだ「広い視野」「科学的思考力」「豊かな人間性」の達成であり、他方は戦後の民主主義体制下における国防の任にあずかる者に課せられた「民主主義の原点である自主自律」と「国家防衛のために一生を捧げる誇り」の実現であった。先生には、入校式、開校祭、卒業式に学生に話をする機会ぐらいしかなかったが、決して戦前の歴史を話さず、戦前の漢語系の言葉を使わず、平易な日本語で表現することにより、新しい時代に生きる自覚を促した。先生が最も力を入れた教育目標は「自主自律」だが、それはとりもなおさず、学生に民主主義下の模範的社会人・幹部を目指すことを期待した言葉であった。

幹部は自衛隊の組織・精神の支柱である。幹部育成に当たる本校の目標は、槇先生以来不動である。道に迷ったら出発点に戻るのが山登りの鉄則だが、幹部にも迷うことが必ずある。その時は「槇」の根本に戻るのが早道と思う。

研究ノート

防大留学生協力家庭の現状について

訓練部学生課　留学生係長　１等空尉
井　上　利　光

防衛大学校では昭和33年タイ王国からの留学生を皮切りに、これまで10カ国200名以上の留学生を本科課程に受け入れてきました。現在も日本語研修学生を含めて67名の本科留学生が在学し、日本人学生とともに教育訓練、学生舎生活及び校友会活動に励んでいます。彼らは言語、文化、習慣の違いを乗り越えて、優れた士官を目指し、国の代表として友好親善や信頼関係の増進にも大きく寄与しています。

しかし、本校が全寮制をとっているため、留学生は市民との交流や一般家庭を知る機会は必然的に限られたものとなります。そこで設けられたのが留学生協力家庭制度です。

本制度は昭和63年に設立され、平成元年に校内職員による活動が始まり、平成２年に部外の家庭による活動が始まりました。現在は31家庭（２家庭が部内）が活動中です。

留学生協力家庭制度は一般家庭と留学生との個人的交流を通じて、日本の伝統、文化、生活習慣等を幅広く理解させ、日本での留学が彼らにとってより有意義なものになること、さらには両国の友好親善の更なる発展の一助となることを目的としております。

活動は本制度の趣旨にご賛同いただいた留学生協力家庭のご厚意に基づくボランティアであり、週末のホームステイやホームビジットといった個人的交流をお願いしております。

現在、留学生数が留学生協力家庭数を大きく上回り、協力家庭が不足している状況であり、継続して募集活動を実施しております。もし、この記事を読んで関心をもたれた方は是非ご支援下さい。

（連絡先：防衛大学校　訓練部　学生課　留学生係
電話：046−841−3810　内線2110）

以下、留学生協力家庭として活動されている２家庭の留学生との交流のエピソードや感想等を紹介します。

協力家庭としての防衛大学校留学生との交流
留学生協力家庭　市川　秀雄・計子様ご夫妻

私たちは平成８年度に留学生協力家庭として委嘱を拝受し、タイ王国留学生３名、インドネシア共和国留学生１名、カンボジア王国留学生２名を受け入れました。「ボランティアであり、特別な待遇はしなくてもよい。」という学校からの言葉もあり、家族同様に対応をしております。

最初のタイ王国留学生は来日前に母親をなくしたこともあり、妻を母親として接し、家庭料理作りをよく手伝っていました。その他のタイ王国留学生には孫が懐き、よく遊んでいました。我が家で日本のテレビ番組を見て日本語の勉強をしていたことや七夕祭りや花火大会に一緒に行った事、箱根を旅行した事等様々な思い出が残っております。

インドネシア共和国留学生はイスラム教徒であり、初めて来訪した時手足を水で洗い拭かずに畳みの座敷で跪

き、礼拝して畳が濡れたことは今でも印象に残っております。出された料理は全て食べなければならないということで、金平ゴボウの中の唐辛子まで食べ、辛さに耐える顔は傑作でした。また、文系であった彼とは靖国神社等にも一緒に行きました。

現在はカンボジア王国留学生２名を受け持っていますが、大変素直な子供達で、これからたくさんの思い出ができていくことでしょう。日本での親代わりとなり彼らを支えて行きたいと考えております。

最後に現在、日本を取り巻く国際情勢は国際テロ、北朝鮮核問題等不透明、不確実であり、世界平和の安定を堅持していくためには日本人学生と留学生が防衛大学校で修めた知識・技能をさらに切磋琢磨し、友好関係を堅持することが重要であると考えております。そのために、私たちは留学生協力家庭として留学生が防衛大学校において勉学、訓練に邁進できるよう今後も支援をしていく所存であります。

身近な地域の中での国際交流
留学生協力家庭　小嶋　修一・紀子様ご夫妻

留学生協力家庭を引き受けて５年目、タイ王国留学生４名、大韓民国留学生１名を受け持っております。地元で出来る国際交流をしたいと予てから考えていたところでの友人を介した防衛大学校からの働きかけでした。「普通の日本の家庭を見せてほしい。」という学校からの言葉もあり、私たちは無理をせず、普段の自分達の生活の中で留学生と接しております。顔合わせの会食時にたどたどしい日本語でお茶をすすめてくれました。「小嶋さんの家の男の人をお父さんと呼んでいいですか」という言葉を聞いたときは本当に嬉しかったです。家族が増えたように感じています。

毎年９月には地区の町内会が一同に集う神社の祭りに参加しています。神輿を担ぎ、山車を引き、近隣町民とお祭りを楽しみます。町内の皆さんは大歓声で留学生を迎えてくれます。法被姿でおにぎりや飲み物をとり、激しく体をぶつけ合って神輿を担ぐ姿は国籍の違いを感じさせません。

また、留学生を連れて日本文化体験教室にも行ってお

ります。袴を試着したり、書道、折り紙、お琴、そして茶道等を体験し、その度に「素敵な日本の思い出」を写真に収めています。その後、一緒に食事に行き、様々な話をします。私たちにとっても素晴らしい思い出です。

留学生協力家庭の活動は言葉や習慣の異なる学生達と触れ合う事によりお互いの歴史、文化、風俗習慣を理解できるだけでなく、私達自身も日本を再認識できる良さがあります。国を代表して来ている彼等には自国への誇りと愛国心があります。そして大きな使命感を持って遠い日本へ学びに来ています。時に挫けそうになる時もあり、故郷への思いを胸にひめ、日本で学べる事の喜びを語ってくれます。

「お父さん達は僕たちに愛情をくれて嬉しい」と言ってくれる留学生（子供）達にこれからもたくさんの愛情を注いであげたいと考えています。

防大への支援事業の状況

小原台事務局総務部長
山本　政雄（24期・海）

防衛大学校同窓会は、各種の学校行事に参加すると同時に、年間を通じて実施されるこれらの行事に、平成20年も様々な形で直接的な支援を行った。

平成20年２月14日、校友会の優秀団体と個人に対し、報奨金等の贈呈を行った。対象となった６団体及び個人15名に対し、学生食堂において、小原台事務局長本村久郎１空佐が、その栄誉を称えるとともに、日々校友会活動に励む全学生に、激励の言葉が贈られた。特に、全自大会で優勝をおさめた弓道の志村真斗学生と、東日本学生選手権で優勝した相撲の水田直維学生の功績は見事であり、大いに他の学生の模範となった。

３月12日の第55期生会発会式には、会長代理として石川亨副会長が出席して祝辞を述べ、期生会の発足を祝った。また、同月18日には第52期生の卒業謝恩会が行われ、これには会長代理の遠竹郁夫副会長が参加して、同じく祝辞を贈り、名実ともに同窓会に加入したことを歓迎した。そしてその５日後に挙行された平成19年度卒業式には、竹河内捷次会長が来賓として出席し、本科第52期生及び理工学研究科第45期前期課程と同５期後期課程並びに総合安全保障研究科第10期の、各課程卒業生合計約500名の旅立ちを祝福した。その際、竹河内会長から卒業生に「小原台生活で培った諸々の良きものを活かし、日々新たに精進し幹部自衛官として大いに活躍してもらいたい」との言葉が贈られた。またこの日、竹河内会長も対象となった、第９期生のホームカミングデーも開催され、約350名もの多数の９期生が来校した。これに対し、事務局員が受付や誘導等を中心とした支援を積極的に実施し、同行事の円滑な進行に寄与した。

そして、卒業式の余韻も冷めやらぬ翌４月５日には、新たに本科第56期生等を迎えて平成20年度入校式が挙行され、先崎一副会長が会長代理として参列し、新入生の門出を祝った。同月９日、本科学生１年生を対象としたOB講話が開催され、今回は第15期生から武縄正（陸代表、元航空学校副校長）、中島榮一（海代表、元自衛艦隊司令官）及び奈良信行（空代表、元技本開発官）の各氏が講師として招へいされた。武縄氏は「伝いたいこと・後輩へ」と題して、自らの体験を基にした、幹部自衛官としての心構えについて述べられ、中島氏は「私が学んだこと」との題で、防衛大学校や部隊で学ぶ姿勢について話された。また、奈良氏は「‘知る’こと」とのテーマによって、自己研鑽を納めていくための基礎的な事項について、講話された。いずれも含蓄のある極めて奥深い講話であり、新入生一同、防大生活に対する決意を一層強くしたものと思われる。

７月の夏季定期訓練に際しては、各地に分散して部隊実習等に参加した３年生を対象として、各地域支部が主催して激励会を実施したが、本部としてもこれを大いに支援した。今年度は約20箇所で実施し、学生と現役及び退職会員との交流が行われ、これによって地域支部活性化の一助ともなった。さらには、学生自身に対する同窓会活動の一端を実感させることができ、同窓会として大きな成果が得られたものと思料する。

10月７日に、会長以下、理事及び事務局員等34名が防大を訪問し、学生との交流会食に参加した。この際、会長から開校祭実行委員長４学年畑中健作学生へ恒例の開校祭助成金を交付し、同委員長からは、同窓会の支援に対する感謝の言葉とともに、開校祭を成功裏に実施する旨の決意が述べられた。

また、その開校祭期間を挟んだ11月４日から11日の間、「卒業留学生招へい行事」が行われた。これは、さらなる留学成果の獲得を目的に、毎年２カ国から各１名（計２名）の、本校卒業後約10年を経過した留学生を母校に招へいする行事であり、平成２年度から実施されている。本年度は、マレーシア国空軍のアーマド・クサイリ・ビン・アーマド・ファドリ少佐（第42期管理学科）と、タイ王国陸軍のアッタポン・チンダーサップ少佐（第43期機械システム工学科）が招かれた。同窓会としても本行事を支援すべく、11月11日に明治記念館において、両人に加えて駐在武官や学校側関係者を招き、会長以下が出席して会食を実施した。

以上のように、同窓会として、母校に対し直接的支援を積極的に実施している現状について、紹介した。

平成20年度運動系校友会活動結果及び部員状況

校友会名	成　　績	部員数	
		男子	女子
応援団リーダー部	開校記念祭演舞披露、各部等応援実施、川崎音楽祭参加	11	
短艇委員会	全日本カッター競技大会　優勝	58	
バスケットボール部	男子　秋季関東リーグ戦 5部横浜エリア2位 女子　春季神奈川リーグ戦 3部優勝　2部昇格	35	10
柔道部	関東学生優勝大会　男子団体ベスト16	57	9
ラグビー部	関東学生クラブ選手権　3部2位 関東学生リーグ戦　2部リーグ参戦	134	
サッカー部	神奈川県大学秋季リーグ戦　1部6位	57	
剣道部	関東理工系学生選手権大会 男子団体準優勝、男子個人優勝 関東理工系学生新人選手権大会 男子団体優勝（33年ぶり） 全日本学生剣道選手権大会（1名）出場	73	8
空手道部	全国国公立大学選手権大会出場 秋季関東リーグ戦　男子2部2位 女子2部2位	43	7
バレーボール部	秋季関東リーグ戦　男子5部7位 春季関東リーグ戦　女子7部優勝　6部昇格	27	12
卓球部	秋季関東学生リーグ戦　5部2位	25	
陸上競技部	日本学生陸上競技対校選手権大会出場（1500m） 箱根間往復大学駅伝競走予選会出場 23位（国公立1位）	67	8
硬式庭球部	関東理工科リーグ戦 男子5部優勝　4部昇格 女子8部優勝	54	5
硬式野球部	神奈川秋季リーグ戦　2部4位	48	
射撃部	全日本学生ライフル射撃選手権大会出場	14	
山岳部	広沢寺、三つ峠、鳳凰三山、瑞かき山・金峰山登山実施 文部科学省大学登山リーダー研修会参加	11	
水泳（競泳）部	全国国公立大学選手権大会、 日本学生選手権水泳競技会出場	34	4
水泳（水球）部	関東学生水球リーグ戦　3部2位	12	
ハンドボール部	秋季関東リーグ戦　3部6位	34	
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦　2部Bブロック3位	78	
ヨット（小型）部	神奈川5大学選手権　総合　準優勝	18	1
ヨット（クルーザー）部	世界学生ヨット選手権予選大会　準優勝	8	3

校友会名	成　　績	部員数	
		男子	女子
銃剣道部	全日本青年大会　男子団体優勝 全日本学生選手権大会　男子団体優勝、男子個人戦優勝 国民体育大会（2名）出場	23	7
グライダー部	久住山岳滑翔大会、全日本学生新人競技大会出場	29	5
ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ　6部3位	25	
ボクシング部	神奈川県学生アマチュアボクシング大会優勝　1部昇格	34	
レスリング部	東日本学生2部リーグ戦　準優勝	26	
ボート部	東日本新人選手権大会優勝、全日本大学選手権大会出場	24	
フィールドホッケー部	春季関東学生リーグ戦　男子2部6位 女子2部7位	32	13
ワンダーフォーゲル部	西湖レークサイド、尾瀬ヶ原 大菩薩嶺周辺登山実施	14	
パラシュート部	日本選手権大会　Jrの部優勝	17	
準硬式野球部	秋季神奈川大学リーグ戦　1部4位	63	
合気道部	全日本合気道演武大会出場	52	3
体操部	東日本体操競技選手権大会出場	23	5
弓道部	関東学生弓道連盟秋季 男子リーグ　2部優勝　1部昇格 女子リーグ　2部3位	28	6
少林寺拳法部	関東学生大会 団体演武優良賞 全日本学生大会　団体演武最優秀賞（5連覇達成）	55	2
フェンシング部	全国国公立フェンシング選手権大会出場	16	
ウェイトリフティング部	全日本大学対抗ウェイトリフティング選手権大会出場	15	
相撲部	全国国公立大学対抗相撲大会 団体戦2連覇、個人戦優勝 全国学生相撲個人体重別選手権大会 準優勝 全国学生相撲選手権大会出場	15	1
バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦　男子5部2位	22	1
居合道部	開校記念祭演武	19	2
吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式・定期演奏会実施 久里浜駐屯地観閲式演奏支援	45	12
儀仗隊	開校記念祭記念式典・自衛隊音楽まつり参加 川崎音楽祭参加	54	5

顕彰碑献花式

平成20年度顕彰献花式は、11月8日（土）13：30～14：00の間、秋雨の中、顕彰碑前において厳かに実施された。本式典は、「防衛大学校を卒業した自衛官の殉職者及び防衛大学校在学中の殉職者、または殉職に準ずる者の霊を慰める式典」として、防大開校記念祭行事として行なわれた。本年の顕彰者は、インドネシアからの留学生で航空機事故により亡くなられたフェビ・フィティリアン（47期空・空軍中尉）様を加えた、90柱でした。

式には、主催者側から五百旗頭学校長を初めとする主要幹部、同窓会から竹河内会長、１期から56期までの各期の代表者、統・陸・海・空幕の代表者、学生の代表者及び多数の同窓生が参列した。

同窓会長の慰霊の辞

式は、まず、参列者全員による黙祷、防大儀仗隊による儀仗に引き続き、学校長の慰霊の辞、次いで同窓会会長が同窓生を代表して慰霊の辞を述べられ、同窓生一同、志を半ばに殉職等をされた御霊のご遺志を受け継ぎ、我が国の平和と独立を守る使命を果たす決意を新たにした。その後、各期代表者による献花が荘厳な雰囲気のなか行なわれた。

小原台事務局広報担当記

献　花

防大卒業留学生歓迎夕食会

防大では平成２年度から毎年、開校祭の時期にあわせ、防大卒業後約10年を経過した留学生を招聘して、約10日間程度日本国内の研修や開校祭の見学などの行事を企画・運営している。これは、留学生が母国に帰国してからも相互の交流を継続することにより、わが国と留学生派遣国との友好親善を深めることを目的としている。

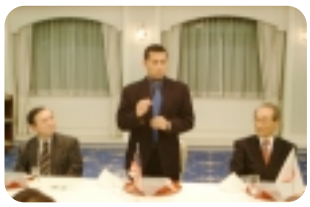
今年は、マレーシアからアーマド・クサイリ・ビン・アーマド・ファドリ空軍少佐（航空42期）、タイ王国からアッタポン・チンダーサップ陸軍少佐（陸上43期）の２名が11月４日に来日した。

歓迎夕食会は、同窓会の主催で11月11日（火）18：00から明治記念館で開催された。主賓の留学生のほか、国内ゲストとして、かつて派遣国の防衛駐在官を歴任した宇都昌二氏（陸上19期・マレーシア駐在官歴任）、両留学生と所縁の深い同期生６名及びタイ王国から陸幹部学校＃54CGS入校中のキューナン中佐を招待した。同窓会からは竹河内会長、遠竹各副会長、渡邊事務局長、林事務局長補佐、坪井事業部長及び小池事業担当の６名が参加し、総勢16名の夕食会であった。

竹河内会長が歓迎の言葉として本行事の意義などを述べたあと、挨拶に立った両留学生は、「防大で学んだことは、ことごとく今の仕事の役に立っており、自分の今日あるのは、防大の先輩や同僚のおかげです」と感謝の言葉を述べた。夕食会当日は、明治記念館で天皇陛下とスペイン国王の晩餐会が開催されており、記念深いひと時であった。

遠竹副会長の音頭で乾杯したあとは、友好親善ムードに包まれて、いたる所で防大での思い出話や今後の抱負に会話がはずみ、瞬く間に過ぎた２時間に名残惜しそうであった。最後は、全員で逍遥歌を合唱したあと両留学生を見送りして、意義深い交流行事を和やかな雰囲気で終了した。本行事の国際親善に果たす役割は極めて大きいものと考えられ、今後は招聘者数の増加などの拡充施策が望まれる。

事業部担当記



第12回防大同窓会期別対抗ゴルフ大会

今年で12回目を迎えた恒例の防大同窓会期別対抗ゴルフ大会が、今年も千葉カントリークラブ川間コースにおいて、シニアの部（第１期から第８期）が９月18日に、レギュラーの部（第９期から第18期）が９月25日にそれぞれ行われました。両日とも竹河内同窓会会長の参加を得て、選手は各期の栄誉を担い日頃の練習の成果を遺憾なく発揮し、防大同窓生らしい溌溂とした熱戦が繰り広げられました。

開会式
同窓会会長挨拶

受付の状況

今年新たに作成された
チャンピオンキャップ

★ シニアの部

シニアの部は、各期10名合計73名20組が競い、各期上位５名のネットの集計の結果、みごと第８期生が今年の栄冠を獲得し、同窓会会長から優勝カップとチャンピオンキャップを渡されました。

集計結果の競技委員長・
会長への報告

シニアの部優勝チーム
第８期生

優勝チーム
代表スピーチ

★ レギュラーの部

今年は第18期生が新たに参戦し、第13期生の五連覇を何期が阻止するのかが大会前の注目の的でした。競技は、各期10名合計99名25組が競い、各組上位７名のグロスの集計結果、第13期生の五連覇を阻止し、栄えある優勝に輝いたのは第10期生でした。また、ネットの部では見事、第12期生が栄冠を獲得し、それぞれ同窓会会長から優勝カップとチャンピオンキャップを渡されました。

事業部担当記

アテストの状況

グロス優勝チーム
第10期生

ネット優勝チーム
第12期生

第11回防大同窓会テニス大会

梅雨の最中、数少ない晴天日に恵まれた６月７日(土)、第11回防大同窓会テニス大会が、選手147名、応援の家族27名、計174名の参加を得て、母校のテニスコートにおいて行われ、グランドシニアの部では上妻、松本ペア（５期）が２連覇を、シニアの部では８期生チームが予選を大接戦の末勝ち上がり初優勝を、レギュラーの部では17期生チームが初参加の18期生チームを決勝戦で大接戦の末破り初優勝を、それぞれ果たしました。

開会式
日高副会長挨拶

防大同窓会テニス大会は、昨年度までは５月に実施していたものを、校友会活動に影響を与えないよう、今年度から６月に変更して開催したもので、参加者が年々多くなり、益々盛大かつ和やかな大会となりました。試合を通じて、また、試合後の懇親会を通じて同窓生間の親睦を深めることができたこと、大会開催には防衛大学校関係者の絶大なご協力をいただいたことを併せて報告させていただきます。

なお、試合結果は次のとおりです。

1　グランドシニアの部（１期～６期）
　優　勝：上妻・松本（＃５）
　準優勝：井川・増田（＃２）
　第３位：萩原・清水（＃４）

2　シニアの部（７期から12期）
　優勝：８期　　準優勝：12期　　第３位：11期

3　レギュラーの部（13期から18期）
　優勝：17期　　準優勝：18期　　第３位：16期

事業部担当記

大会会長大会視察

グランドシニアの部優勝
（上妻、松本ペア）

レギュラーの部優勝（17期）

第10回囲碁大会

囲碁大会が平成20年９月６日(土)、市谷の日本棋院で行われた。本大会は第10回の記念大会であり、 全国から１期生から18期生の121名が参加して、熱戦が繰り広げられた。

団体戦はＡグループでは、優勝６期、準優勝７期、Ｂグループ優勝３期、準優勝2期であり、この結果１期、９期はＢグループへ降格、３期、２期はＡグループへ昇格となった。

また、翌日行われた個人戦では、優勝 坪内成人（６期)、準優勝 村松来多郎（18期)、第３位 松井 宏（７期）の各氏がそれぞれ表彰された。

来年は平成21年９月５日(土）に開催される予定。

事業部担当記

９期生のホーム・カミング・デー（HCD）

平成20年３月23日(日)、ホーム・カミング・デー（HCD）として、第９期生が卒業式（本科第52期生）へ招待されました。

HCDへはせ参じた第９期生及びその家族は総勢342名、43年前の若者に戻ったがごとく、早朝をものともせず小原台へ集まりました。

卒業式典は例年の如く、卒業証書授与、五百旗頭学校長式辞、福田総理訓示、石破防衛大臣訓示、北岡伸一氏の来賓祝辞と続き、その後任命宣誓式が行われ、恒例の帽子投げで終了しました。（式典会場の席数の制約から、式典会場入場組約150名、残りの参加者は映写ホールで実況中継を観覧しました。）

卒業式典終了後、資料館において、殉職者に対する献花式がしめやかに行われました。

観閲式では、晴天のもと、在校生による観閲パレード、そして祝賀飛行が雄々しく行われ、往年を思い出した古強者達の心を熱くさせました。

卒業式典、そして観閲式の後、第９期生懇親会が学生会館大ホールで盛大に挙行されました。藤田幸生期生会会長のあいさつで始まった懇親会は、奥様方を交え、すぐに大宴会へ発展し、時が過ぎるのを忘れるほどの盛り上がりでした。第９期生の皆さんは43年前の若者へタイムスリップし、奥様方はご主人の若かりし頃に思いを致したひとときのようでした。（・・・学生会館から見下ろす東京湾の波が往時の如くに・・・）

第３回ホーム・ビジット・デー（HVD）

11月９日（日）20年防大開校祭の日、卒業20周年の節目を迎えた32期生107名とそのご家族209名が小原台に集い、第３回ホーム・ビジット・デー（HVD）が盛大に開催されました。

HVDも、今年で３回目をむかえ、「現役会員の同窓会意識の高揚」「同期生の団結強化」及び「防大在校生との交流」を図るという目的も逐次浸透し、毎年活性化が図られるようになってきました。

行事開始に先立ち期の代表３名が五百旗頭学校長を表敬訪問し、行事への御礼と概要を報告するとともに、学校長から暖かい激励のお言葉を頂きました。

まず、学校正面玄関前において参加者全員で記念撮影を実施し、引き続き、OB道路沿いへの記念すべき第１号

記念植樹（金木犀）

となる記念植樹が実施し、生命力のある「金木犀」が植えられました。

観閲式見学は、心配された天候も参加者の熱意で持ち堪え、順調に予定通りに進行されました。観閲式終了後、防衛学館教場に設けられた会場で「総会・懇親会」が開

催され、中には卒業後初めてと言う旧友との再会を喜び合い旧交を温めるとともに家族共々の交流により、より一層強固な同期の絆が築かれました。

懇親会の終盤には、竹河内同窓会会長が激励訪問され、日程が入校学生の外国研修と重なっているにも関わらず、前回の規模以上の参加者数にふれて「32期の団結力の強さ」を称えられました。そして皆が今小原台に一同に会して「同窓会の基本は期生会、しっかりまとまること」「卒業生の心の原点は槇校長、建学の原点に戻り新たなスタートをきること」の意義と喜び、嬉しさを熱く語られると、HVD懇親会の歓声は最高潮に達しました。最後に代表者による会場を沸かす流暢な口上に引き続き「逍遥歌」を全員で合唱し、今後の期生会の益々の発展と強固な団結を期して「一本締め」で華々しく幕を閉じました。

同窓会長挨拶

実行委員代表者から、「卒業20周年の節目に、ここ小原台に集い、語り合うことにより、同期の絆を更に高めるとともに今後の人生のモチベーションを高めあえる意義ある行事であった。」「参加家族からお父さんの青春時代を過した『防大』のイメージアップができ、大変良かった。」等のコメントを寄せてくれました。

集合写真

MCI事業について

MCI（Military Cyber Institute）は、防衛大学校創立50周年記念事業の一環として提案された事業であり、「同窓生の軍事に関する識見を結集し、国家・社会に対して軍事的考慮の重要性を広く発信する。」ことを目的としております。

平成15年度に準備委員会が発足し、平成18年度から防衛大学校同窓会の事業部の一つとして本格的に活動を開始しました。

1　MCI事業の現状

⑴情報システムの構築と運用

平成15年度に情報システムの中核として同窓会ホームページを立ち上げ、現在同窓会としての情報発信及び意見交換の場として運用中です。

⑵軍事情報の発信

ア　軍事情報発信の一環として、平成18年度から同窓生の著作物の紹介を上記ホームページ内で開始しました。20年10月末現在、69名255冊の著作が掲載されております。

イ　広く軍事情報を発信するため、既に個人のホームページで軍事情報の発信をされている同窓生とのリンクを平成20年度から開始致しました。

ウ　現在、著作物に引き続き同窓生の論文や講演録の掲載を準備中です。

2　MCI事業として提案された事業の概要

⑴防衛能力者の登録…継続検討

防衛講話、戦史研究、語学、その他特殊軍事技能所有者を同窓会に登録し、部外から要請があればその専門分野に基づき、必要な人材を紹介するという構想です。

⑵貢献志願者の登録…継続検討

災害時のボランティア活動、隊員募集支援、基地行事等支援、趣味等の指導が出来る同窓生を登録し、要請があれば同窓会として紹介するという構想です。

MCIについて簡単に紹介致しましたが、活動を始めてようやく3年を経たばかりの事業であり、MCIは目的を達成するまでには長い期間を要する事業です。

また、MCI事業は同窓生の皆様の御理解・御協力があってこそ成り立つ事業です。

MCI事業については、不案内な会員の皆様もまだまだ多く、今後とも「小原台だより」や「同窓会ホームページ」などを通じて積極的に広報に努め、皆様のいろいろな御意見を伺いながら着実に一歩一歩事業を進めていく所存です。

今後とも同窓生の皆様の変わらぬ御理解・御協力をお願い致します。

MCI事業部

地域支部等への助成事業について●●●●●●●●●●●●●●

1　紹介趣旨

『地域支部等への助成事業』は、地域支部等を資金面で支援して活動の活発化を図るため、平成18年度から実施されております。しかしながら、この助成事業がすべての地域支部等に周知され、等しく恩恵を受けているか疑問であることから、改めてその概要を『19年度代議員会資料』から抜粋し、紹介するものです。

2　助成基準（助成基準額）

⑴現職会員と退職会員が協力して支部として参加する行事で、同窓会の社会的貢献効果または広報効果が認められる事業（審査結果による。）

⑵地域支部等が主催する講演会の講師に対する謝金（３万円／講師）

⑶県単位以上の支部が主催するスポーツ行事において、「防衛大学校同窓会」を銘記した優勝カップの購入（３万円以下）

⑷上記以外の要望は、理事会で個別に審査

3　要望手続き

⑴「地域支部等への助成」事業（経費）要望書（防衛大学校同窓会HPに掲載）で要望

⑵地域支部等からの要望は、年度を通じて受付

⑶要望手続きの流れ　　別図のとおり

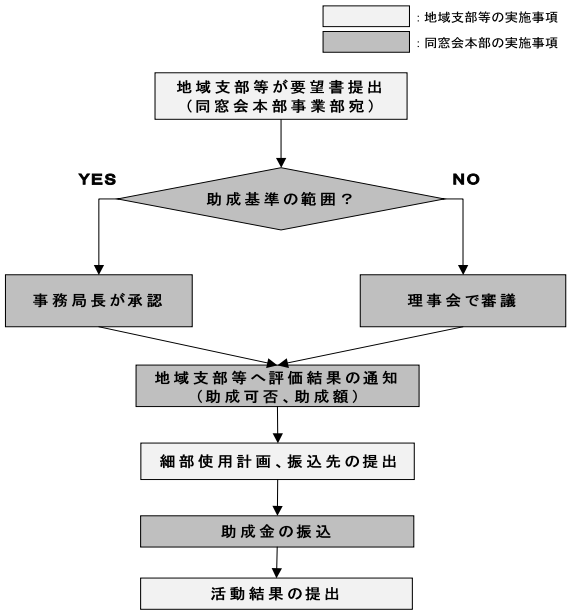
4　その他

細部は、防衛大学校同窓会HPに掲載

事業部担当記

別図

要望手続きの流れ



防衛大学校同窓会創設５０周年記念事業について●●●●●

防衛大学校同窓会創設50周年記念事業の検討状況について報告いたします。

昨年の『小原台だより』第15号において本事業に関わる背景、プレ検討成果、定例理事会での合意事項及び全般業務予定表について報告いたしましたが、その後、これら平成19年度の検討成果等に基づき平成20年度は、基本構想の決定及び構想の具体化に向け検討を進めてまいりました。

この間、防大から開校60周年記念事業への協力要請があり、これを踏まえた検討の結果、７月の理事会において「基本構想」の了承を受けました。その後、準備委員の交代（17・18期生へ）を経て、現在（20年11月）、事業実施計画（大綱）を検討中です。

基本構想（骨子）は以下のとおりです。

【50周年記念事業の基本構想（事業ガイドライン）】

1　目的・趣旨

防大同窓会は、創設50周年を迎えるこの機会を、半世紀にわたる同窓生の業績や同窓会発展の歴史を顧みることにより、同窓会の将来に対する決意を新たにする契機として捉え、創設50周年に相応しい記念事業を周到に準備し、これを円滑に執り行う。

2　方針事項

⑴記念事業の検討にあたっては、同窓会設立の趣旨に基づき下記事項に着意する。

ア　現役からOB会員に至るまで、広く同窓会員相互の絆を強化し、また同窓会活動の目的理念の自覚と士気の高揚が図れること。同時に、現在あるいは将来に抱えている同窓会内部の諸課題に対し、全会的に取り組む求心力が高められること。

イ　母校防衛大学校の充実・発展に直接・間接に寄与できること。特に、来る平成24年、防衛大学校開校60周年を視野に入れた事業を積極的に組み込むこと。

ウ　社会的活動に寄与する機運を醸成できること。

⑵本事業の執行を平成23年から平成24年の２年間とし、平成23年２月に予定される代議員会の行事と平成24年11月に実施される防衛大学校開校記念祭を最大限活用する。

○事業項目の概要と全般業務予定表は次頁のとおりです。

○新たな準備委員会をもって事業計画の具体化に向け鋭意検討中ですが、事業内容等に関するご意見ご要望がありましたら、同窓会本部準備委員会までお願いいたします。

50周年記念事業準備委員

事業項目の概要　50周年事業を「同窓会自体の事業」と「母校直接支援事業」に区分

同窓会自体の事業

1　祝賀式典とレセプション
2　式典の一環として記念講演会
3　小原台だより記念特別号発刊
4　地方における記念講演の実施と助成
5　ボランティア活動助成制度の研究

母校直接支援事業

1　大絵画の寄贈（学生食堂落成に伴う装飾）
2　故槙氏著「防衛の務め」復刻出版事業の支援
3　留学生招聘事業の拡大支援

全般業務予定表

暦年（平成）	19	20	21	22	23	24
段階	構想段階	計画段階		実行段階		
内容	基本構想の決定	構想の具体化と事業計画の作成		細部計画の作成と事業の執行		
	・方針 ・事業規模 ・組織 ・会計 ・業務予定 ・その他	・事業項目・内容 ・事業実施要領 ・予算計画 ・実行組織の編成（部門別） ・業務予定その他		・実行委員会の発足 ・事業計画の具体化 ・部門別に推進	2月祝賀式 記念講演会 等 同窓会自体の事業	11月記念祭 学生食堂落成に併せ、大絵画寄贈等 母校直接支援の事業
組織（委員は事務局員）	準備委員会			実行委員会		
	第1期 長;16期 各委員:16・17期	第2期　長;17期 20.7月～22.2月 各委員:17・18期		委員長:同窓会副会長（50周年担当役員） 副委員長（委員長補佐）:18期 各委員:19～21期		
委員会事務	・委員会は、一水会・理事会に報告 ・委員長は代議員会(2月)に報告			・実行委員長に一任 ・委員長は事業終了後代議員会に報告		

同窓会の法人化に関する検討の状況●●●●●●●●●●●●●

同窓会の法人化に関する問題は、17年に作成された「防衛大学校同窓会のあり方検討に関する答申書」において、同窓会館設立等を狙いとした資金運用、収益事業、資産管理上のトラブル防止、会計処理の透明性確保による社会的信用度の向上等を目的としてその検討を提唱されたものであります。

同窓会本部は、本問題を「長期的検討課題」の項目と位置付け、18年度以降、プロジェクトチームを編成し、検討を継続してまいりました。

20年度の検討においては、新法律（一般社団法人及び一般財団法人に関する法律：平成18年６月公布、20年12月施行）に基づき、同窓会が一般社団法人化された場合の「モデル」を作成して検討を行いました。

モデルの作成に当たっては「一般社団法人防衛大学校同窓会」の組織・機構の状況、事業の遂行、総会の実施要領、資料の開示・広告要領、税制、会計事務、立ち上げ手続き、業務量や経費の状況等について明らかにするとともに、同窓会の性格変化や新たに生じる作業や経費等について考察を行いました。この際、部外法律事務所に検討を依頼し、専門的アドバイスを受けております。

この結果、防大同窓会の現状を踏まえた場合、法人格取得による会計上等のトラブル防止、透明性向上等による社会的ステータスの保持、役員等の個人責任明確化等のメリットがあるものの、法人化することにより、同窓生の差別化等同窓会自体の性格が変化する可能性があること、経費や業務量の増大等のデメリットが生じることが判明しました。

同窓会本部においては、新法律に基づく一般社団法人に関する制度及び他組織の動向、同窓会を取り巻く社会環境の変化等に関する情報の収集を重視して、今後とも検討を継続してまいります。

20年度プロジェクトチーム　鈴木　健（15期陸）記

国政から見た我が国の防衛

衆議院議員
中谷　　元（24期・陸）

私が、防衛大学校に入学した時は昭和51年であり、ソ連の侵略にどう対応するか、防衛計画の大綱が作成され、基盤的防衛力構想に基づいて防衛力の整備が急がれた頃であった。１学年の時の夕方、食事を終え、学生舎の床掃除をしていた私は、上級生から「掃除を中断しテレビを見ろ、これが歴史の節目だ。」といわれたが、中国の毛沢東主席が死亡の臨時ニュースであった。これを機に、中国は大きな変化をし、鄧小平の経済の自由化、政治の近代化は国境を越え、人の往来も、貿易量も、世界最大となり、当時とはアジア情勢は一変している。卒業したのは昭和55年であり、ソ連のアフガン侵攻直後であった。まさに、米ソ東西冷戦の最盛期であったが、昭和53年11月27日からの「日米防衛協力のための指針（旧）」に基づいて、日米同盟がより強化され、日米共同演習が各地で行われるようになって、自衛隊の役割が日米防衛協力の重要な責任となってきた時期でもあった。

その後、陸上自衛隊に任官して、まさに、陸上自衛隊の最前線で普通化部隊の小隊長を務めたが、仮想敵国であるソ連の上陸を阻止するため、陣地構築や戦闘訓練を重ね、地方の陸曹や隊員達と共に部隊の練度を上げ、国を守る基盤的防衛力を構築してきたが、幹部自衛官の任の重さと部隊の忙しさはこれほどとは思っていなくて、まさに自衛隊は国民の目の見えないところで黙々と国防の任に当たりながら、血のにじむような部隊の力で、現在の防衛力を維持していると思う。

衆議院に当選したのは平成２年であり、中国では天安門事件、東欧でのベルリンの壁の崩壊、ソビエト連邦の崩壊が起こり、冷戦が終焉して行った。世界は平和に向かうと期待していたが、宗教、民族、領土のいさかいは重石が取れれば複雑になり、湾岸戦争、アフリカでの対立、南北問題が起こり、世界の安全保障が大きく変化した。衆議院議員としての最初の委員会は国際平和協力法案の特別委員会であり、イラクの侵攻を阻止する多国籍軍の後方支援をする法案を審議したが、自衛隊が活動を行う上で、どこから先が戦闘地域となるのか、医療や補給の後方支援をどの距離でどの程度まで行うことができるのか、政府はこのボーダーラインを説明できず、結局、廃案になってしまった。その後、掃海艇の派遣、PKO国連平和維持活動協力法案が成立したが、その時、政治の合意によって海外への自衛隊派遣の原則が確立された。いわゆる５原則であるが、日本が武力行使を行わないために、停戦の合意、受け入れの同意、中立、武器使用の制限、撤退の自由の条件を満たす場合という前提を作ってしまった。これは、今も生きており、この範囲内でカンボジア、モザンビーク、ゴマ、ゴラン高原などPKO派遣が行われ、制約され限られた活動であったが、安全な中で、わが国の自衛隊の能力と士気、規律の高さが国際的に大きく評価された。自衛隊の仕事のやり方は、丁寧、確実、迅速、一つ一つ、確実に、実績を積み重ね、一人の死傷者も不祥事も出さずに、完璧にやり遂げた結果は、海外でも、日本国民にも評価され、参考とされることになった。阪神大震災、地下鉄サリン事件も発生し、国内では、国家の緊急時における、自衛隊の活動の場は広がっていったが、やはり、試されるのは個人の能力と資質、部隊としての組織力統率であり、その期待に答えてきた優れた部隊を練成してきた、同窓会の先輩諸兄には頭が下がる思いである。

平成９年、新たな日米防衛協力のための指針が作られ、これに基づいてガイドライン周辺事態法案が国会で議論、成立した。このときの武力行使をしない前提が、いわゆる非戦闘地域の理論であり、後方地域支援の範囲を設定し、それがイラクやテロ対策法案に準用されている。しかし、この運用については課題を残しており、これを改善するには、憲法の壁を突破しなければならない状態であるが、まだそこまでには至っていない。

平成13年、小泉内閣のとき防衛庁長官を拝命したが、同期はまだ３佐に昇任したばかりの防衛班長クラスであり、将官は全員私の先輩で、この先一体どうなることかと思ったが、さすがに同じ釜の飯を食った仲間であって、初めての自衛官出身の長官を、先輩方は完璧に補佐してくれた。特に、米国での９.11同時多発テロ事件が起こったとき、速やかにインド洋への自衛艦が派遣できたし、在日米軍の基地を警備する警護出動、九州南西海域における北朝鮮の工作船の領海侵犯での警告射撃、船体射撃の対応、北朝鮮のミサイル発射への即応体制の確立、東チモールへのPKO派遣など、大きな法律改正もでき、防衛庁を挙げて組織を上げて補佐をしてくれた。改めて、いざというときの幹部自衛官の能力の高さ、人間的な資質を幹部自衛官の仕事ぶりから目にすることができ、防衛大学校の教育成果はたいしたものだと実感をした。この他にも、領域警備、有事法制、PKO法案の武器使用の改正、秘密保全法案を提案し、成立することができたが、これも、防衛大学校を卒業し、自ら自衛隊で学び経験したことによる成果であると確信する。

現在、防衛庁長官を退任し、衆議院のテロ特別措置法委員会の筆頭理事や自民党の安全保障調査会長をしているが、イラクへの復興支援法案、インド洋での給油活動の延長法案、ネパール、スーダンへの自衛官の派遣など、国会で審議をして、その成立のため全力を挙げている。

これからの課題は、これら海外における自衛隊の国際協力活動を一般法において実施できるようにすること、海賊、国連での活動をしっかり行えるようにすること、憲法において自衛隊を国を守るしっかりした機関と位置づけ、その根拠を定めること、自衛隊の処遇、地位、国際的な役割を高めることなどであるが、まだまだ課題が多く道半ばである。日本の経済事情や社会的許容対応能力、政府の統治体制も年々、時代の変化と共に大きく変わりつつある。しかし、国を守る、国際社会の中で、しっかりした国にしていくその目標は、これからも変わることがない。小原台でつちかった、廉恥，真勇、礼節の精神と仲間と絆、友情を忘れることなく、これからも全力で努力していく所存である。

我が原点は小原台にあり

参議院議員
佐藤　正久（27期・陸）

小原台会員の皆様、新年おめでとうございます。お元気にお過ごしのことと存じます。昨年は皆様にとってどのような年でしたでしょうか。私、佐藤にとっての昨年は議員になって以降の１年半が過ぎた年でした。それは正に、「光陰矢の如し」であり、無我夢中の永田町生活でした。手さぐり状態の中で、１年中、国内はもとより海外をも視察し、休みは殆ど無く、病気もせず、皆様から頂いた当面の任務を果たせたのではないかと思っています。本日は、永田町におけるこの１年半を振り返ってみたいと思います。

一昨年夏、皆様からのご支持を得て新米議員となり、多くの場所で多くの方々と接し、多くの事象に遭遇しましたが、その全てが成功したものであるとは言い難く、むしろ失敗の連続であったかもしれません。例え失敗であっても、その中に今後の光が見えれば成功だとの気持ちをもって、全てのことに全力で取り組んできたつもりです。

国会議員としての新たな戦場に立ち、日々の活動の源、即ち、強い気持ち、思いを惹起・持続させ、健康に過ごすことができ、そしてまた皆様と良好な人間関係を構築できた礎は、防衛大学校での学校生活にあります。専攻をはじめ選択科目等の勉学、ホッケー部での厳しい体力錬成・技術の習得・連携プレイ、学生舎や野外訓練での共同生活を通じて修得した人間力の錬摩など、自衛官時代と現在の佐藤が求められている資質の全てが防大にあったと思います。若人の城「防大」に進まなければ、現在の佐藤はあり得ません。本当に運命を感じています。皆様は如何でしょうか。

地方を訪問する度に、多くの同窓生から声を掛けて頂きますが、皆様異口同音に防大の期別を仰います。そこでは常に先輩後輩の関係だけが存在する場となり、同じ同窓生としての心地よさ、安堵感を感じています。また、明日をも知れぬ議員には、自衛官以上に柔軟性が求められますが、自衛官時代に学んだ状況の特質の把握の仕方、状況不明下で特に求められる遭遇戦での戦術判断が極めて有効です。また、多くの場で挨拶や講演が求められますが、これは幹部任官以来の部隊での朝礼・終礼、精神教育をはじめ各種隊員教育の延長しにか過ぎません。このように考えますと、防大や自衛隊からいかに多くのことを学び、そして今、それを実践しているか知れません。防大と自衛隊、私を育んでくれた皆様に感謝する所以です。

参議院議員として、外交防衛委員会、災害対策特別委員会等４つの委員会の一員として数多くの質問の機会を頂き、自衛隊に対しほんの少し恩返しができたのではないかと思っています。当選直後から、海上自衛隊イラク給油活動、防衛省改革、クラスター弾禁止条約、あたご事案、そして能登半島沖地震と岩手・宮城内陸地震対応など、いずれも重要で緊急性の高い案件が次々と発生し、息のつく暇もないほどでした。これら一連の活動の中で、特に印象に残った２つについて紹介したいと思います。

その第１は、海上自衛隊インド洋への派遣が道半ばにして中止されたことです。その中途離脱は敵前逃亡に等しいものだとの意識を芽生えさせるほどの屈折感を現場の皆様に与えたとすれば、その責任の一端を有する国会議員として、本当に申し訳なく思います。一昨年11月23日の横須賀基地での帰国歓迎行事に参加した私は、前回の晴れやかな清々しい中での見送りとは全く逆の、俯き加減で笑顔を無くした隊員に接し、悲しく、無力感に陥りました。その気持ちを派遣指揮官兼補給艦「とわだ」艦長の尾島１等海佐が「残念である。日本の航跡が消えてしまい、本当に残念である」と帰国挨拶で述べられました。私は尾島１佐と防大同期、同室であり、その人となりをよく知っているだけに「無念である」との言葉は、強く、深く私の心に沁み込みました。議員として、現場の皆さんが後顧の憂いなく活動できるよう、自分の持ち場で精一杯働くことが佐藤の任務であることを改めて感じさせてくれた一瞬でした。

第２は、実態を反映していないクラスター弾禁止についてです。対人地雷禁止の時もそうでしたが、防衛省、自衛隊等直接防衛に関係する者の意見が反映されたものとは言い難く、一方的かつ情緒的に決定されたことが大きな問題だと思っています。我が国の防衛構想は、戦略環境、防衛能力及び国内法上制約等各種要素を十分に検討したものと認識していますが、今回のように政府が独断的に決定要領を決定してしまうとすれば、防衛省や各自衛隊で作成する防衛計画は有名無実となり、防衛方針が揺らぎ、隊員の士気は弛緩するばかりとなるでしょう。議員としては、正すべきは正し、マイナスをプラスに転じるための具体的対応を如何に行うべきか、引き続き考えたいと思っています。

当選直後はネームプレートの色が無色の１年学生でしたが、１年半が経過し緑色の２年学生へと進級できたと自己評価しています。先輩方からのご指導・激励や同僚後輩皆様方からのご指導・ご協力により、何とか２年学生へ及第できたと感謝しております。今後は３年学生としての黄色、そして尊敬され、ある意味要注意であり隠然たる立場の、赤色の４年学生としての資格を皆様から与えて頂けるよう努力したいと思っています。（了）

NGOの新たな枠組みへのささやかな挑戦

（JDRAC）
日本地雷処理・復興支援センター
平崎　憲昭（5期・陸）

凍結中であった東ティモール不発弾処理教育の再開に忙殺されている時、同期の松島君から、小原台に現在実施しているNPO活動についての投稿依頼があり、PR不足の当会としては絶好の機会と思い、拙文ながら紹介させていただきます。

東ティモール陸自PKOが撤収する前年、施設OB有志から、1992年派遣の、カンボジアの成果が数年で消滅したので、これらPKO成果の維持、拡充を主目的としたNPOへの参加を求められ、PKOの後継又は連接した事業をNGOが実施した事例は、日本は勿論、世界中何処にも無く、法的規制等相当な困難を予測したが、将来のNGOの有り方、特に新しい枠組への挑戦と云う観点から参加することとした。

当NPOの特色は、一般のNGOは現地NGOと連携してローカル的な復興支援を実施するが、これと異なりJDRACは主として対象国政府と連携し、復興の基本である「国造り・ひと造り」を支援することにあり、特に対象国政府内に、事業承継の組織及び人材の育成が出来、事業成果の自立発展性が高い所にあります。

■現在までの活動内容及び評価

⑴組立式建物技術訓練センターの開設・運営

本プロジェクトは、陸自PKOが撤収に際し贈与した資器材の有効活用を目的とした事業であり、実施にあたっては、外務省の草の根無償資金の贈与受が大前提でしたが、申請当初は該当しないと拒否されました。

草の根無償協力は、基本的に日本NGOが現地NGOと協力して行う活動に対しての供与を目的としており、東ティモール政府の要請に基づいて実施する本プロジェクトに対する資金供与は不可能である。特に東ティモール政府との実施協定の締結は国際協定に該当し、民間NGOの締結は認められないと云う点にあった。この為、内閣府を中心に調整を重ね、特例として認められました。

平成16年7月から約2年間施設職種OB3名を派遣し、第3期に分け見積・設計・施工等の技術訓練を実施し38名の技術者を養成しました。

成果としては、陸自PKOが撤収時贈与した組立式建物約600棟を利用し、ディリー、スアイ、オクシ等全国各地に公共施設、病院施設等を建設し将来に亘る有効利用の基盤を整備しました。特に本訓練にて養成した技術者は全員公共事業省に雇用され、現在復興に汗を流しております。

⑵不発弾処理教育

組立式建物技術訓練実施間、国連支援団（UNMISET）から、在ティモール日本大使館を通じ、来年5月UNMISETは任務が終了し撤収するが、東ティモール政府（警察・軍）に対し不発弾処理について未教育でありJDRACで教育して欲しいとの要請があり、JDRACとしては国連要請に基づくNGO活動が草の根無償協力事業に該当するか、否か、杞憂したが、再び特例として認められました。

これらは、PKO又は国連と連携した事業を対象国をカウンターパートとして実施する新しいNGOと云う局面を開いたと云えます。

不発弾処理教育は、東ティモール警察官に実施することとなり、平成17年5月から武器職種OB4名（5期・久光君、6期・大脇君等）を派遣、第1期教育は異常なく終了したが、第2期教育時東ティモール国は処遇改善を要求する兵士の大量離脱事件が発生し、政府の初動対処の不手際から騒乱状態となり、最終的には治安に当っていた警察と国軍の相撃により警察組織崩壊と云う収拾のつかない事態となり、国連支援団が再編・強化され、治安の回復にあたりました。不発弾処理教育は東ティモール内務省、UNOTL（国連支援団）日本大使館、JDRAC四者による再三の協議の結果、平成20年4月まで凍結する事に合意し現在に至っています。本騒乱中、発起人を含む主要理事の退会等がありましたが、残余理事の協力を得て、本年10月再開の予定です。

両プロジェクトは、国連安保理協議の場で大島大使から自衛隊OBの東ティモールでの平和構築活動への参画として紹介され、国連としても今後このようなNGOの活用が必要であると、また明石代表からはPKOの理想的な出口であるとの評価を受けております。

これらは国際貢献活動の幅及び枠組の拡大に対する新しい試みとして認識されつつあると理解することが出来ます。

当NPOは教育と云う地味で効果の遅効的な事業を実施しており、認知度は低く、かつ財政基盤は脆弱で苦しい活動を続けております。１名でも多くの方々のご理解とご支援を励みとし頑張って参る所存ですので宜しくお願い致します。

※ホームページを判り易くリュニアールしましたので
ご覧頂ければ幸いです
アドレス：www.jdrac.org
E-mail　：info@jdrac.org

囲碁遍歴

松井　　宏（７期・空）

子供の頃から父が打つのを見ていたので、はやくから囲碁がどのようなものかは知っていたが、一番熱中したのは、防大棋道部の時である。

当時、外出といえば、６期の仲地さん、榎田さんと共に「さいか屋デパート」の裏通りにあった「囲碁喫茶シャトウ」で入り浸りのように過ごしたものだった。２学年終わりの春休みに、八重洲にある日本棋院中央会館で初段免状に挑戦した。両先輩は四戦全勝で見事合格したが、私は三勝一敗、翌月再挑戦し、合格した。それ以来、囲碁に対する情熱がやや希薄になった時期もあったが、いろいろな人との出会いもあり、50年間打ちつづけている。今回は機会を頂いたので、拙文ながら、私の囲碁遍歴やサークルについて紹介させていただくことにした。

もろえ会：この会は、諸江義厚氏（陸士56期、昭和52年航空自衛隊第２術科学校長を最後に退官）のお人柄を慕って、ご退官後も厚誼を保ちたいとする人達が氏を囲んで碁を打とうと発足した会である。昭和五十二年、当時六本木に勤務していた公文、越川、赤座、須田の各氏に私も加わりスタートした。その後33年間場所やメンバーに変遷はあったが、今でも毎月第３土曜日に、ニュー新橋ビルの４階で打ちつづけている。最近では、同期の諸氏も参加し、同窓会大会へ向けての強化練習の場にもなっている。諸江さんは、今年、米寿を迎えるが、矍鑠（かくしゃく）として、私達との対局を楽しんで頂いている。20期生前後が学生の頃、防衛学教授をされていたので薫陶を受けた人も多いことと思う。

中園道場：平成元年、高校の同窓会イベントで、当時、アマ本因坊・アマ10傑の２冠のタイトルを持っていた中園清三氏による３面打ちが行なわれた。中園さんが、熊本高校の後輩だと知ったこの時から、中園さんを師とするサークルができた。月一回、第１金曜日を例会としており、会員相互の自由対局や中園さんの２面打ちでの指導碁の後、赤提灯での放談を楽しんでいる。その他、修猷館高校・開成高校・前橋高校等OBによる定期戦及び懇親会なども実施している。この道場も20年になるが、中園さんには皆勤で指導して頂いている。当初、青山でスタートし、築地本願寺・有楽町熊本館・新橋航空会館と場所を変えたが、今は、池袋のサンシャイン囲碁サロンで行なっている。

三沢囲碁クラブ：第一次湾岸戦争の頃、三沢基地に勤務した。三沢市は、米軍基地（軍人・軍属・家族を含め約１万）を抱えた人口四万の基地の町である。そこに石井誠さんが幹事をしていた会員50名程度の三沢囲碁クラブがあり、私も在籍した。青森は、十和田湖・八甲田山を境に、津軽と南部に分かれており、両者間の交流はほとんど無い。その代わり、南部側にある三沢・八戸・十和田・三戸同志は交わりが深く、日曜日ごと週を違えて囲碁大会を行なっているので、毎週の様に、いずれかの大会に参加できた。

そこで、土棟善行さんと出合い数回対局した。土棟さんは、当時、三沢高校生だった。医師からプロへ転向した坂井秀至さんと同世代で、中学の時の子供大会、及び高校選手権共に、決勝戦で坂井さんとの対戦になり、二度とも、坂井さんに優勝を阻止された。その土棟さんが、昨年度、世界アマ選手権日本代表決定戦で優勝し、初めてのタイトルを手にした。その決定戦の相手が、中園清三さんだったのは、中園道場に集う私にとってはちょっぴり辛かった。

印西囲碁連合会：私の住んでいる印西市は千葉県の北部に位置し、周囲を印旛沼・手賀沼・利根川に囲まれ、里山が点在する元々は農業を中心とする田舎である。「千葉ニュータウン」と称し、北総開発公団が30年前頃から開発した鉄道の駅を中心に発展した新住民地域と、成田線沿線の「木下駅周辺」の旧町が上手く融和している。あと２年あまりで、成田空港まで鉄道が延長され、都心と空港との主要なアクセスとなる予定なので、多くの方に私の大好きなこの町を車窓から見ていただけることと思う。

人口６万少々のこの町に、300名ぐらいの囲碁同好の仲間がいる。地域ごとに同好会のグループが４つ有り、それらをまとめて印西囲碁連合会ができている。月に一回、約100名の参加を得て、定例の大会を行なっている。

BAA（Beautiful Ageing Association）：社団法人ビューティフルエージング協会というのがある。現在、49の企業が参画しており、企業の立場から、中高年がその経験および能力を生かして有意義な人生を送る社会（ビューティフル・エージ ング社会）の実現に寄与するため、ライフデザインアドバイザーの養成、企業の人材開発部局・OB会事務局と共同しての関連事項に関する調査・研究、また、OB交流プログラムの提供等を目的とした協会である。航空自衛隊退官後、勤務した日本航空の囲碁仲間の推薦を受け、そこの囲碁のメンバーに加入している。年五回の定例大会があり、いろいろな企業OBとの交流を楽しんでいる。

数年前、「高齢者囲碁大会」に参加した。この大会は、市の大会→地区大会→県大会→全国大会（ネンリンピック）へと繋がっていく大会である。運も幸いして、県大会で優勝し、「千葉県老連本因坊」の称号を頂くと共に、ネンリンピック福岡（平成17年度開催）の県代表になった。

ネンリンピックとは、厚生労働省、㈶長寿社会開発センター、及び開催県が主催する60歳以上の祭典であり、サッカー・ラクビー・マラソン・剣道等18種目のスポーツ交流大会、及び囲碁・将棋・俳句大会等がある。高齢者の国体のようなものである。

千葉県チームとしてユニホームを揃え、団結式を行い、平成17年11月12日、福岡に乗り込んだ。総合開会式はヤフードームで常陸宮殿下のご臨席を賜り、福岡県知事の歓迎挨拶で始まった。

二日目から各競技会場に場所を移し、囲碁大会は遠賀川流域沿いにある中間市で行なわれた。遠賀川の河口にある芦屋基地は私の初任地であり、７年間もいたので、この辺は土地感もあり郷愁に浸りながらの参加となった。

各県代表96名を16名ずつ６ブロックに分け、四回戦を行い、ブロック毎に、金・銀・銅メダルを競う大会であった。私はDブロックで準優勝、銀メダルを頂いた。金が取れなかったのは残念だったが、印西に帰ってきて、仲間が健闘を称えてくれた。

この他、印西での共同碁会所、東日本大学OB・OG大会、防衛大同窓会囲碁大会、調本会（元調達実施本部のサークル）のことや、最近、日韓交流をはじめたことなど、紹介したいことは尽きないが、紙面の関係で省略させていただく。「虚空遍歴（山本周五郎著）」の主人公冲也が浄瑠璃に殉じたまでにはいたらないが、これからも、いろいろな囲碁との出会いを求めて、力及ばないことに苦悩しながら、かつ楽しんで生きたいと思う。

台湾勤務を通じて感ずること

交流協会台北事務所　前主任
長野　陽一（13期・陸）

台湾は、日本に一番近い外国で、最も親日的で、歴史的に関係の深い国である。私は、2003年１月から2007年５月までの約４年半を台湾にある財団法人・交流協会台北事務所で軍事担当の主任として勤務した。「台湾にある㈶交流協会台北事務所の軍事担当主任」といっても何のことかさっぱり分からないと思います。これが現在の日台防衛関係の実態です。

日本は1972年、中華民国（台湾）と国交を断絶し、中華人民共和国（中国）と国交を正常化した。これに伴って、台湾の日本大使館は閉鎖され、新しく中国（北京）に開設されて、台湾においては従来の大使館に代わり、日台交流の窓口として「㈶交流協会」（台湾は「亜東関係協会」）を設立し、本部は東京都港区に、事務所を台北と高雄の２ヶ所に開設した。

㈶交流協会設立の目的は、「台湾在留邦人及び旅行者の入域（注：入国ではない）、滞在、子女教育等につき、各種の便宜をはかること、並びに、わが国と台湾との間の民間の貿易及び経済技術交流はじめその他の諸関係が支障なく維持、遂行されるよう必要な調査を行うとともに適切な措置を講ずること」（設立趣意書）のためです。この業務を担当するため、各省庁の関係者が出向し本部及び事務所で勤務している。

現在、防衛省は37か所の在外公館などに48名の防衛駐在官を派遣（2008年５月現在）しているが、台湾の防衛駐在官は、1972年の国交断絶と共に引き上げて以来、約30年間にわたって、再び派遣されることはなかった。

その後もわが国の安全にとって台湾海峡の重要性が変わらない中で、軍事専門家を台湾に派遣する日本の政治情勢と関係省庁の認識が変化し、交流協会に軍事担当者を配置する必要性が議論されました。結果、各国の防衛駐在官と同じ現役の制服自衛官を派遣することは、当時の時点では中国との関係も考慮してできませんでしたが、退職自衛官であれば対応可能ということで、私が退職して派遣されることになった。しかし、中国との政治的枠組みもあり、日本の防衛に関する台湾に対する姿勢は、原則的なものに止まっています。また、日本の台湾に対する行政的措置も制約があります。以下、行政的措置のいくつかの事例を紹介します。

日台関係は、国と国の関係ではないということから台湾に関する表現は苦肉の策が多い。交流協会は、「日本」を冠することができず、国の代表たる事務所の長は、大使や代表ではなく「所長」であり、各省庁の事務所への出向者は全員が一様に肩書は「主任」である。（「一つの中国」原則）

日本の行政窓口の各市町村における台湾への異動にあったての住民票の転出入記載欄の記載は、「中国」「中国（台湾）」「中国台湾省」とまちまちで、中には「中華人民共和国」と誤記を認識した意識的な誤記もある。そのような中、東京都は５月、全国で初めて住民票の転出入地記載に「台湾」と表記することを認める通知を出した。一歩前進である。（「92年のコンセンサス」の「各自表述」）

また、台北（注：国名を冠し得ない）駐福岡経済文化弁事処（福岡市）長が長崎県知事の表敬訪問を希望したところ、県知事は中国側に配慮するとして表敬を受けませんでした。これは何も地方だけでなく、中央の各省庁の姿勢はもっと厳しいのが現状です。

台湾は今年５月、馬英九国民党政権が誕生し、中国共産党との「対話」を再開、人的・物的交流を拡大して対中融和政策を積極的に推進している。

台湾軍は、４～６年以内に従来の徴兵制を廃止し完全志願兵制を目指し、兵員を大幅に削減して約20万にする大変革を推進中である。そして10月には、やっとPAC−３ミサイル、アパッチ攻撃ヘリ等総額約63億ドルの軍備購入案が米議会に提出されたことで、将来、装備されることになるであろう。

与那国島は台湾の台北市より南、花蓮市とは約100kmの指呼の間にあり、日本の南西諸島防衛の最前線である。こんな地理的状況にある当該地域の情勢と台湾軍の状況を把握することは、わが国の防衛上も無関係でなく、馬英九国民党政権の対中政策を注意深く見守りながら、わが国の国益の観点から対台湾政策、特に防衛に関する施策を進めることが重要ではないでしょうか。

防衛学教育はいま・・・

防衛大学校防衛学教育学
戦略教育室教授
加藤三千夫（15期・陸）

1．はじめに

縁あって、平成18年４月から防衛学教育学群戦略教育室で、軍事・科学技術担当教官として勤務しています。担当は、「軍事と科学技術」（３学年必修科目）と「科学技術と安全保障」（3、４学年選択科目）です。防衛学を学生に教育している話をすると、同期生や先輩から必ず返ってくる言葉があります。「今の防大生はどうだ、眠っているか？ 俺たちもよく眠っていたからなぁ・・・」「学科内容は、まだ同じような科目か？」などです。学生の受講態度は、教務班の特性によるかなり異なることが分ってきましたが、いかに学生を眠らせないように授業するかは永遠の課題のような気がします。

現在の防衛学のカリキュラムは我々の時代のものとは全く異なっており、将来防衛任務に就く幹部としての素養の付与と伸展性を期待して、学問体系として確立されていて、基本的・基礎的な科目に精選されていることを話すと一様に驚きと関心をもたれます。そこで、防衛学が我々（15期生以降）の時代から如何に改善され変革を遂げてきたかをご紹介するとともに、防衛学の発展と深く関係のある「日本防衛学会」（平成19年７月新規発足）についてもお知らせしPRをさせていただきます。

2．防衛学教育の変遷

防衛学の教育体系について大幅な見直しがあったのは、昭和40年代後半の人文社会系の新設検討時でした。それまでの防衛学は、ご存知のように防大開校時の陸上・海上・航空の各防衛学教室に別れ、各自衛隊の要請に基づいた要員別の初級幹部として必要な基礎的な戦術や技術に関するもので、「防衛工学」的な要素を多分に持っていました（当時30単位）。この見直しの過程で「防衛学の科目を整理し、人文・社会科学系の学問を増加する」こと、新たに防衛学の教育目的が「将来防衛を専門職務として担当すべき学生に対して、広く防衛に関する正しい判断力を修得させる」こととされました。そうして、防衛学においては、基本的に「戦争や紛争の防止と解決のための学術的基盤を取り扱う」ことになり、防衛学は「戦争や紛争の防止と解決の科学」であり、「軍事問題を中心にし、それに政治・経済・社会・科学技術等の諸問題が絡み合った総合的学際的領域を研究対象とする」と規定されました。そうして、その後数回の改革を経て、現在では要員色を努めて排除した戦史（世界戦争史、日本戦争史）、国防論、戦略、軍事・科学、統率等に関する基礎理論からなる「共通防衛学」を中心に教育（24単位）が行われています。したがって、陸上・海上・航空防衛学教室は、平成12年度に3個教室（陸上・海上・航空防衛学教室）体制から陸・海・空自衛官とシビル教官混成の3個教育室（国防論、戦略、統率・戦史教育室）から成る防衛学教育学群体制に改編され、現在は安全保障・危機管理教育センター（平成17年度新設）が新たに加わっています。

3．日本防衛学会の設立経緯

防衛学教育のこのような変遷の過程で、防衛学を教える教官に対する期待度も大きく変わってきました。昭和48年、第３代猪木校長のイニシアチブにより、防衛学に関する教育研究の質的向上を図るため、防衛学教育を担当する制服教官のための教育研究の発表の場として「防衛学教育研究発表会」が開催されることとなり、今日までに34回（投稿時点）を数えております。

この間、内外情勢の変化を受け防衛学に関する研究も有機的・総合的な学問体系への志向が強まり、内外関係機関・大学等との連携の必要性の増大を受け、昭和63年２月に、従来からの研究発表会を組織化し、一般の学会に準拠した「防衛大学校防衛学研究会」を発足させました。その後平成19年７月まで「防衛学研究発表会及び研究会・講演会」の実施並びに機関誌「防衛学研究」の編集・刊行という二つの事業を継続してきました。そうして、防衛庁が防衛省に格上げされ、国際貢献が自衛隊の本来任務として追加されたのを契機に、この「防衛大学校防衛学研究会」を発展的に解消し、部外に広く開かれた私的な学術団体として新たに「日本防衛学会」を発足いたしました。

その目指すところは、防衛の実務者と学者との交流を通じて、防大にしかない「防衛学」を全国に発信しようというものです。平成19年11月22・23日に、日本防衛学会となって初めての「研究大会」を防衛大学校で開催しました。また、平成20年５月17日には、青山学院大学において、「新しい時代の日中韓関係」と題し、中曽根元総理に基調講演をお願いし、第一回記念シンポジウムを開催致しました。いずれも大変好評を博しました。まだまだ、よく知られていない「日本防衛学会」の名を広く全国に広めるべく関係者と鋭意努力中です。本年（平成20年）も11月21・22日、防大において平成20年度研究大会を実施いたします。来年度もシンポジウム（都内予定）と研究大会を開催いたしますので、是非多くの方々のご参加をお願い申し上げます。また、同窓会員の皆様には既に会員になる資格がありますので、日本防衛学会の趣旨にご賛同の同窓生の皆様には是非会員になっていただき、「日本防衛学会」を大きく育てていただければ幸いと思います。なお、小生、「日本防衛学会」設立準備段階から学会設立に係わり、現在企画運営委員長として関係各位のご協力を得て何とか職務を勤めております。

詳しくは、日本防衛学会HP（http://www.jsds.jpn.org/）を御覧ください。

4．おわりに

このように防衛学もまた、防衛学教官に対する要求も時代の要請とともに変革しつつあることがお分かりいただけたものと思います。また、同窓先輩諸氏から現役防衛学教官に対するご鞭撻をいただければ幸い存じます。

アフリカで地雷処理

日本地雷処理を支援する会（JMAS）
理事　大田　保重（15期・陸）

１．はじめに

2002年６月、自衛隊OBにより「主として、地雷等（地雷、不発弾及びこれらに類する爆発物）に苦しむ地球上の全ての地域と人々に対し、地雷処理の支援・協力に関する事業を行い、全ての地域と人々の自発的発展に寄与する。」ことを目的として認定特定非営利活動法人日本地雷処理を支援する会（JMAS：Japan Mine Action Service）が設立された。2007年５月末、当時の土井理事長（９期・陸）に「外務省からアフリカでの地雷除去の検討を依頼されている。アフリカ経験（モザンビークにおけるPKO）を有する君の力を是非貸して欲しい」と誘われ、「15年も前のただ１国の経験で役にたてるか」と思いながらも陸自の同じ武器職種の大先輩の依頼に断る訳にいかず、JMASの活動に加わってもう１年半にならんとしています。現在は既に事業展開中のカンボジア、ラオス、アフガニスタンのアジア諸国に続き今年６月に開始したアフリカにおける唯一の事業であるアンゴラ事業担当として、自衛隊退職後の再就職先での勤務の傍ら、現地スタッフのサポートに当たっています。今回、折角の機会を頂きましたので、その活動の一端を紹介させて頂きます。

２．アフリカにおける地雷処理活動の検討経緯

2007年７月、JMASは外務省から「アフリカにおける対人地雷活動の現状及び我が国による今後の支援のあり方」について専門的立場から研究し、対アフリカ政策の立案・実施に資する提言等を纏めた成果を報告する「平成19年度対アフリカ政策研究会議」を企画書提出等による競争を経て、この業務委託を受けました。2008年５月末横浜で開催された「第４回アフリカ開発会議（TICADⅣ）」を控えていたことから、今年度実施可能な具体策を纏めあげることが求められていたため、２次に亙る現地調査を実施し、事業を概定しました。

第１次調査は、2007年８月中旬～10月初旬に東、西、南アフリカの各国に調査員を派遣し（夫々期間は違う）、対人地雷に関して

①我が国による地雷処理実施の可能性
②我が国による教育訓練及び同支援実施の可能性
③当該国による地雷処理組織設立支援の可能性

の面から、我が国による支援のあり方を検討するに必要な情報資料を収集しました。

第２次調査は、第１次調査の結果を必要性（実施効果、当該国の要請度、実施時期）及び可能性（費用、治安、派遣員）の面から比較・検討し、モーリタニア・イスラム共和国及びアンゴラ共和国の２カ国に絞り、2008年１月中旬～２月中旬に亙り、地雷除去事業を企画するために必要な調査（地雷の数・種類等埋設地雷原の細部、事務所用施設、現地スタッフの雇用、NGO承認手続き等）を実施し、比較的条件が整っているアンゴラ共和国において事業を進めることとしました。

私は、モーリタニアを担当し、主として西サハラ国境沿いの汚染地帯（同国の地雷は1975～79年の西サハラとの紛争によるもの）を調査しました。駱駝の遊牧で生計をたてている砂漠内の村を訪れ、住民からヒャリングを実施した際、ある年配女性の「村の周囲が地雷原のため、もう30年もプリズンにいるようなものです。何とかして欲しい。」の言に、是非事業化を進めたいと思いましたが、残念ながら使用言語（仏語、アラビア語）による現地スタッフの派遣問題等から当該事業を、当面見送りとしました。2008年８月６日、モーリタニアで軍事クーデターの報に同国における事業見送りの理由はどうであったにしろ、「事業を進めておれば・・・・」と思わず胸を撫で下ろした次第です。

３．アンゴラ共和国における活動

1975年ポルトガルから独立以来2000年３月停戦までの27年間にわたる主として旧ソ連及びキューバに支援されたアンゴラ解放人民運動（MPLA）とアメリカ、南アフリカに支援されたアンゴラ全面独立民族同盟（UNITA）による長期にわたる内戦は、全18州、約4,500ヶ所にわたり約60種の対人地雷および約30種の対戦車地雷を含む世界第３位とされる約600万個～1,500万個の大量・多種の地雷を残しました。

同国は、埋蔵量約80億バレルとされる石油やダイヤモンド等資源が豊富であり、欧米をはじめ中国等各国による開発ラッシュで、英のMAG（Mine Advisory Group）をはじめとする７個国際NGOが地雷処理活動を実施中で、JMASは８番目のNGOにならんと、土井現地代表（９期・陸）以下４名の日本人現地スタッフが現地日本大使館をはじめ企業（コマツ、住商、豊田通商等）の協力を得つつ準備中であります。しかし、７月末に到着した機材の通関に２ヶ月余要す等関係者の非効率的仕事振り等により「トンネルを抜けると又真っ暗なトンネルに突入」状態であり、計画の修正を余儀なくされています。

事業は、首都ルアンダの北東約70kmのベンゴ州Mabubas（住民1,300人の旧軍駐屯跡地）において、政府のNGO連携無償資金及び前記企業の物的・経済的支援により、ローカルスタッフを含め約20名を以って処理機（コマツ製）で処理、その後ドーザ等建設機械で居住地、畑等を開発し、併せて住民へ操作・整備技術の移転を図るものであります。

４．終わりに

地雷等に苦しんでいる国及び人々は、アジアおよびアフリカを主に数多く存在し、我々の活動の場に限りはありません。JMASでは現在、先崎会長（12期・陸）以下約30名の同窓生が活動に参加していますが、残念ながら海空OBは皆無です。この種活動には垣根は無く、陸のみならず、海空OBの皆さんのお力を拝借する機会は多々あります。JMASへのご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。

モーリタニアにて同国関係者と

津軽の郷土と共に

本松　敬史（29期・陸）

29期陸上要員も防大を卒業して既に23年もの年月が経過し、現在は全国各地で各級指揮官や幕僚等それぞれの部署の中堅どころとして活躍しております。今でも時に宴会等で再会すれば、互いに顔形をしげしげと観察し、あまりの風貌の変遷を嘆きつつも、酒を酌み交わしつつ、暫くすればまたいつもの同窓生に戻り、仕事や家庭の悩みを打ち明ける。齢を重ねる度に同期生の有り難さを感じる今日この頃です。

かく言う私も昨年夏より青森県弘前市に所在する弘前駐屯地に勤務しており、今回機関紙「小原台だより」を通じ、同窓生の方々に近況をご報告する次第です。

Ⅰ　弘前に着任

昨年８月、平成12年８月から続いた陸幕（市ヶ谷）連続勤務という刑期（７年？）を終え、弘前に所在する第39普通科連隊長兼ねて弘前駐屯地司令として着任し、早１年以上の月日が経過しました。じ来、朝に夕に霊峰岩木山を仰ぎつつ部隊を練成し、たわわに実った真っ赤なリンゴ園の中を隊員とともに疾走できる喜びを噛みしめつつ、充実した健全な日々（市ヶ谷勤務ではあり得ません！）を過ごしております。

Ⅱ　弘前（駐屯地）って？

ここ弘前は、東に八甲田山、西に岩木山を望む津軽平野南部に位置、16世紀当初に初代藩主であった津軽為信公が開藩し、以来経済・文化の中心として栄えてきた津軽地方の代表都市です。明治29年には旧陸軍第８師団が創設され、八甲田雪中行軍でも有名な歩兵第31聯隊（映画（「八甲田死の彷徨」）では高倉健演ずる徳島（本名 福島）大尉が所属）等が日露戦争から大東亜戦争に至るまで、「津軽の郷土部隊」として各戦線において活躍しました。また、旧制弘前高校（現弘前大学）が所在し、自衛隊との交流もある等、今日に至るまで軍都と学都とがバランス良く調和しております。更には、明治以降の宣教師の来弘に伴い建設されたキリスト教様式の近代建築物が各所に点在する一方で、江戸時代津軽藩により区画整理した禅寺地区も集中的に存在するという和洋折衷の全国的にも珍しい一種独特の文化・雰囲気を有する地域です。こうした土壌や背景等を有する津軽地区において、弘前駐屯地は弘前市等の強い誘致運動を受け昭和43年に開設され、今年で40周年を迎えた弘前駐屯部隊は、まさに地元とともにある典型的な「郷土部隊」であります。歴代駐屯地司令の要望事項は、一貫して「和」であり、三つの「和」（隊員同士の和、隊員と家族との和、周辺住民との和）を基調として、各級指揮官の要望事項に基づき、駐屯地所在部隊はそれぞれ隊務を運営しております。

弘前駐屯地
（岩木山を望む）

Ⅲ　弘前ねぷたとともに

８月１日、いよいよ今年も自衛隊ねぷたの出陣です。「弘前ねぷた」発祥の由来は諸説がありますが、全体の雰囲気からは、これから敵征伐に向かう男達の荘厳な出陣というのが相応しいと。「やーやどー」のかけ声とともに浴衣に鉢巻き、提灯姿の我々は、正面からのスポットライトを浴びながら、市内のメインストリート土手町を練り歩く。市民の一番人気は、新隊員からなる剣舞（白虎隊のような出で立ちで春日八郎の「ああ弘前城」に合わせ剣を使用した舞）であり、至る所で大きな歓声が沸き上がる。自衛隊ねぷたは毎年プロのねぷた絵師により製作され、年を追う事にその迫力は増大しており、自衛隊ねぷたを観終わるとそそくさと帰宅する市民も多いとのこと。参加する我々の神経も益々高ぶり、まさにアドレナリンが体中を駆け巡る快感。祭りに命を賭ける男達が全国各地にいると聞きますが、まさに彼らの気分を満喫、追体験できるのです。このねぷた祭りにおける自衛隊の位置づけこそ津軽の郷土部隊そのものであり、ねぷた以外にも弘前の風物詩や各種行事への協力、運営と弘前自衛隊とは密接不離な関係にあります。

弘前ねぷた（自衛隊ねぷた）

Ⅳ　足元を固めよ、明日の飛躍のために。

これが、弘前第39普通科連隊を指揮統率するに当たっての私の要望事項です。実は今から13年前、第１普通科連隊の中隊長当時のそれも「足元を固めよ。」でした。連隊長として着任した昨夏以降、不祥事等が続く防衛省・陸上自衛隊を取り巻く環境は厳しいものがあり、また「いつ、如何なる事態が生起するのか不明」といった事態認識等も踏まえ、我々は今一度服務の本旨に立ち返り、自分たちが何をなすべきかの任務を分析しつつ、基礎動作、基本的行動を確実に実施していくことで部隊としての「足元」を固めていく。これは隊員にとって実に地味で退屈なものでありますが、一方で何時如何なる事態にも実効的に対応しうる早道であり、また従来から素直で忍耐強いとされる津軽の隊員の気質に合致した要望事項であると確信しております。

弘前はリンゴで有名ですが、今年は６月と９月に雹と霜により甚大な被害を被りました。11月初旬現在、表面に多少の傷は残っているものの、例年になく甘く、そして大きく赤い実を付けました。こうした自然界、特にリンゴ達の逞しい生命力について、部隊隊員に折に触れ例示強調しつつ、津軽の隊員達の隊務全般に対する意欲の振起を図っております。現在も冬季検閲（積雪地における陣地防御）に向けた部隊練成を実施中であり、夏季訓練以降、部隊にたとえ炎天下或いは土砂降りの中であっても40km以上を踏破、これに引き続き黙々と所望の掩体を構築させるという辛さと達成感とを体感させる等、来る冬季訓練検閲受閲に向け主努力を傾注しているところです。

私にとって、連隊長としての一日一日が自衛官人生における「宝の山」のように輝いて見えます。これこそが、諸先輩方がよく言う「黄金の日々」なのでしょう。こうした充実した日々を過ごせる幸せを噛みしめる今日この頃です。

期生会だより

卒業50周年記念行事

2期生会会長　井川　　宏（海）

昭和33年３月に防衛大学校を卒業した私たち第２期生は、平成20年３月で卒業50周年を迎えた。理想に燃え決意を胸に小原台を後にしてから半世紀が過ぎたのである。この機会に小原台に集い、それぞれの越し方を振り返り、後に続いてくれる後輩を育てている防衛大学の現状を認識し、そしてこれからの行く末を思いつつ期友の懇親を深めることにした。そのために、例年秋に東京で実施している総会・懇親会を小原台で開催することとした。防衛大学校校長始め関係各部の多大のご理解、ご支援を頂いて準備を進め、平成20年11月５日に開催することができた。

当日は、２期生97名に家族25名、合計122名が参加した。２期生として卒業したのは362名であるが、平成20年11月５日現在では、その約1/5の70名が死亡して、現存するものは292名であるので、参加者は現存者の約1/3である。

幹事君塚栄治陸将による現状説明の後、顕彰碑、顕彰室を訪れて殉職者の往時を偲び、ご冥福を祈った。校内ツアーでは、記念講堂、新しい図書館、新しい学生舎など近年における施設の充実ぶりを認識することができた。資料館の１階に新しく開設されたばかりの槇記念室では、久里浜時代の写真なども展示されており、往時を偲び感慨一入であった。

五百旗頭 眞校長、馬場 順昭副校長、岡﨑 匠副校長、君塚 栄治幹事をお招きして開催した懇親会では、五百旗頭校長から近年における防衛大学校の新しい進展と将来の構想について詳しくご説明いただいた。中でも、初代校長槇智雄先生の建学の精神にたち返って21世紀の幹部自衛官教育の根本を考えるための現われとして、馬場副校長を代表とする準備委員会による研究・準備を経て槇記念室を開設したというお話は、槇先生のご薫陶を直接頂いた私ども２期生に大きな感銘を与えた。おかげで、防衛大学校は今後とも槇先生の建学の精神をしっかりと受け継いで新しい時代に向けて進んでゆくに相違ないと確信した。

かくて、懇親会は盛大におこなわれ、「防衛大学校の現状を見せていただき、それぞれの50年の越し方や、わが身そして母校の将来などについて思いを致しつつ期友の懇親を深める」という当記念行事の目的を果たすことができた。

卒業50周年記念行事のいま一つとして記念植樹をすることとした。卒業50周年というのは今後各期が順次迎えるのであるから、２期生の木を一本だけ植えるのではなく以後の各期が続いて同じような木を植えてゆきやがて卒業生の並木又は林になる、その先駆けになれるような植樹をしたいと考えた。そのためには先ず１期生と相談をしなければならないので、法性 弘１期生会長に話したところ全面的な賛同を頂いた。

場所としては、本館と新体育館の間の道路の東側が候補の一つとして上がった。その後学校と協議を進めてゆくうちに、本館前の芝生の左右に１期と２期がそれぞれ１本ずつ植えるということになった。これでは当初の卒業生の並木とは違うではないかとの思いもあったが、久里浜の仮校舎に入校して、昭和30年３月に春休みを返上して木製の二段ベッドをはじめとする設備等の小原台への移転作業に従事した１期と２期を特別に扱って頂くならそれを受け入れようということになった。植える木は、私どもが生涯の師と仰ぐ槇先生にちなんで槇の木を選んだ。

新体育館の前の道路を卒業生の並木にすることについては３期生以降の皆さんにお任せすることになるが、実施することになれば１期と２期にも１本ずつ植えさして頂ければありがたいと思っている。

最後に、以上の卒業50周年記念行事に際しての五百旗頭校長始め防衛大学校関係者のご理解と甚大なご協力に深く感謝申し上げます。

９期生ホームカミングデー

第９期生会　功刀　正文（海）

年一回、防大の古い卒業生がクラス単位で、学校長から後輩の卒業式に合わせて招待されるという「ホームカミングデー」、平成20年の卒業式に招待されたのは我々９期生でした。

最初に１期生が招待された平成12年の卒業生は44期生、つまり43期後輩の卒業式に参加するわけで今回の卒業生は52期生でした。

３月23日、52期生の卒業式は素晴らしい天気となりました。北は北海道、南は鹿児島から、更には、この日のために地雷処理任務でラオスに行っていた同期生も帰国参加しました。43年前の９期卒業生は486名でした。そのうち殉職者が５名、そのほかに他界した者が27名、合わせて32名の者が物故しておりました。今回の参加者は197名でしたが、これは現在の９期生の約45%になります。夫人も145名が参加、合わせて342名の参加となりました。

当日は防衛学館の受付に、まるで遠足に行く小学生のような笑顔を浮かべながら、朝早くから集まってきました。受付を済ませて控室に入ると、すぐにもうクラス会の様相、中には43年振りという同期もいて、お互いの外見の変化に戸惑いながらも再会を喜び合っていました。

卒業式会場は、当時の中講堂や人文科学館の跡に建てられた立派な記念講堂、その席の一角に、ホームカミングデーのために約150の席を確保してくれました。そこに、参加者の約半数が座り、その他の者は隣のAVホールに座って、陸自通信団が設置してくれた映像装置に映る卒業式を観ました。後方からその一団を見下ろすと、目に入る部分は、既に前期高齢者の仲間入りしていることが十分窺える姿になっていましたが、しかし元気に、隣に座る夫人に生き生きと誇らしげに、「俺の時は、こうやったんだ」とでも説明しているような情景があちこちに見られました。

式は厳粛のうちに執り行われ、卒業証書を授与される52期生の元気溌溂とした凛々しい制服姿に、43年前の自分を重ね合わせ、自然に背筋がピンと張ってくるのを覚えました。五百旗頭校長が式辞で触れた「槙イズム」と「学生綱領」という言葉は、槙校長の自主自立の精神を、自らに課すべきものとして、我々９期生がその綱領をまとめたこともあり、改めて心に深く残るものとなりました。

卒業式のあと、観閲式までの間に資料館顕彰室において、殉職した同期遺族と参加者代表によって顕花を行いました。隣室に納められている遺品にも接し感慨深いものがありました。

観閲式は私達のときと同じく陸上競技場において行われ、陸海空の幹部候補生の制服に着替えた卒業生を前に在校生が元気溌剌と行進していくのを、学校側が用意してくれた席で見学しました。

ここまでが学校行事。そのあとは期生会の行事となり学生会館（当時のPX跡に建てられた厚生棟）の４階大ホールを借り切って懇親会を行いました。卒業式行事執行中の校長からは直筆の心温まるメッセージもいただきました。そして久しぶりの再会を喜び、あとは時の経つのを忘れて旧交を温めました。40数年前４年間眺めた小原台からの東京湾もそのままでした。最後に逍遙歌を合唱し、感涙し、あっという間に２時間が過ぎました。「もうこれで、俺死んでもいい」などと言う同期もおり、参加した者皆が深い満足感と充実感を覚え、人生に一つの区切りがついたような気持ちになってそれぞれ母校を後にしました。我々９期生のホームカミングデーは、このように意義深く、そして無事に終了しました。これに備え約２年前に陸海空各６名、計18名の委員による準備委員会を立ち上げクラスとしてやるべきことの準備を進めて来ました。

最後に、総理大臣はじめ重要なご来賓をお迎えしての学校最大の行事に我々を招待いただき、多大なご配慮いただいた学校側に対し、また細部にわたりいろいろご支援いただいた同窓会の本部及び小原台事務局に対し心から感謝を申し上げ、ホームカミングデーの経過報告といたします。

16期生だより

16期生会事務局長　石川由喜夫（陸）

16期生の皆様お元気でしょうか、防大に入校して40年の歳月が過ぎて現役も会長の折木君１人だけになり、健康の維持が重要な日課となる年齢に達する今日この頃ですが、会社勤務・地域への社会貢献・趣味の助長拡大等を通じ、第２の人生にて益々ご活躍のことと推察申し上げます。

さて、防衛大学校同窓会事務局の活動を支援するため、平成18年７月から２年間にわたり、16期々生会として10名の勤務員を送り出しこの度支援が終了しました。

７/11には、期生会長・各部会長参加のもと、会社勤務をしながらのボランティヤ勤務をしていただいた10名の皆様に対し感謝を込めた「昼食会」を開催し、同窓会発展のための苦労話などに意見交換をしました。

今回の２年間の勤務終了者（５名）は次のとおりです。大変ご苦労様でした。

（陸）：小池　重倫
（海）：前川　　眞
（空）：赤瀬　　公、池田　茂実、中村　吉廣

また、引き続き事務局の中核となり勤務していただく方（５名）は次のとおりです。

（陸）：田代　満次、坪井　　寛、富本　啓一、
　　増田　憲二、山本 博秋

５名の方には、引き続きご苦労をおかけしますが、「同窓会発展のため」更なる汗を流していただき、頑張っていただきたいと思います。

16期生会に関する連絡調整（事務局）は、下記のとおりです。

〒271−0075　千葉県松戸市胡録台146−8　石川由喜夫
TEL 090−4702−1733、047−366−2756（兼FAX）
y-ishikawa@sooshin.co.jp又はyukiishi24622@yahoo.co.jp

第31期生便り

31期生会会長　前田　忠男（陸）

先日、市ヶ谷台の研修で訪れた２学年？にばったりエレベーターの前で出くわしました。挨拶こそしませんでしたが、やや緊張気味の学生たちとは別のエレベーターに乗り、その中でふと思ったのは、自分がすっかり親父になっていることでした。私たちも学生当時、１佐を見れば、「かなり頑張ったな、１佐 までなったか、このおじさん」という生意気な振る舞いが思い出されました。

さて、我が31期生も卒業20年を過ぎ、すっかりおじさんの仲間入りを果たしたものの、一方で、中央では統陸海空幕の防衛班長、運用担当班長（運用サイドはそれぞれ職名が異なる）等に名を連ね自衛隊の意志・施策決定の中枢を担うに至り、第一線では指揮官・主要幕僚、自衛隊の機関或いは民間企業等ではまさしくブレインとして活躍していると自負できます。故土田学校長の「防大生は、卒業後20年（佐官での大成）を見据えて育てなければ･･･」というお言葉が思い出されました。防大のビジョンは、第１期生創作の「人征かぬ山に花有りスミレ草」に詠まれたとおり、自衛隊の行う国際任務や災害派遣、そして国家危急の秋に備える各種行動における「使命感」に帰着するのだと考えています。これは、単に一つの期によって完成されるものではなく、前の大戦で魁となり戦われた英霊を含めた防大の伝統として受け継がれ育まれるものと確信いたします。

現在、自衛隊の運用を預かる統合幕僚監部に身を置く者として、防大が陸海空そろっての士官学校であったこと、諸先輩が国防の意志を営々と継承していただいたことに特に感謝したいと思います。

また、現五百旗頭学校長が中心となって推進されている防衛省改革の議論では、その検討に我が期から参画した者もおります。我々の先輩である齋藤統幕長はじめ多くの方々がこれまでご苦労をなさった経験から「あるべき自衛隊」、「あるべき防衛省」の絵姿を描こうと尽力されております。まさしく、時代は防大の時代なのかもしれません。我々31期生は、その防大の時代の一翼を担うべく一致団結して同窓会を支え、防大のため、同期のために頑張って参る所存です。

最後に、同期生の皆さん、ご存じの通り昨年の開校祭において卒業20周年記念行事並びに役員の改正等を実施いたしました。これからの勤務を考慮し、その本部機能を中央に保持し、中央に勤務する同期生を主体に軽微な運営ができるよう新たな態勢を整えているところであります。引き続き、ご理解、ご協力をお願い申し上げます。益々のご発展を祈念申し上げます。

卒業20周年記念行事のお知らせ

33期生会会長　中塚　千陽（空）

時の過ぎるのは早いもので、平成元年卒業の我々33期生も来年３月をもって卒業20周年を迎えることとなりました。

「20周年」と言ってもピンと来ない同期の皆さんも、「同期が大隊指導官をしている」と言えば自分の「オヤジ加減」を実感せずにはいられないことでしょう・・・

平成 21年２月１日（日）15：00～17：00グランドヒル市ヶ谷にて記念パーティを企画しております。出欠については別途案内を出しますので、ふるってご参加のほど、よろしくお願いいたします。

これまで10周年記念パーティ以外は何も活動してこなかった33期生ですが、来年は節目の年ということもあり、私個人としては「２月に東京で記念パーティ」、「11月開校祭のHVD参加」を２大行事として考えております。たまたま現在市ヶ谷勤務しておりますので、多数の同期の支援を得て本行事を進めていこうと考えているところです。

なお、通信費節約のため、次を例に私宛に各自のメールアドレスをお教えいただければ幸いです。なお本メールは来年の記念行事の通信以外の目的には使用しません。また、今後「BCCによる配信」を希望する方は、その旨本文最初にご記入ください。

宛先：patriot@js8.so-net.ne.jp
件名：２大隊（空）４班の中塚です。
（↑下線部はそれぞれ学生時代のデータを）
本文：「BCCによる配信」を希望
（以下、来年の行事等に関するご意見等）

では皆様からのメールを楽しみにお待ちしております。

支 部 だ よ り

四国地域支部の活動状況

四国地域支部事務局長　松浦　孝昇（７期・陸）

四国地域支部は、平成19年12月８日、香川県琴平グランドホテルにおいて、設立総会を開催し、支部（会員数150名）が発足しました。その際、竹河内同窓会会長及び鈴木同窓会事務局総務部長にも懇親会への出席をいただき船出を祝っていただきましたが、今年は、実質的に初年度の活動となりました。

１．徳島県地区支部の設立総会

四国地域支部の中で、徳島県地区支部のみが未結成でありましたが、稲井淳一準備委員長（陸３期）のもと、平成20年４月20日（日）徳島市の阿波観光ホテルで設立総会が盛会に実施され、４地区支部の足並みが揃うことになりました。懇親会には、佐々木四国地域支部長も招かれ、佐々木支部長から祝辞を述べ、門出をお祝いしました。

なお、徳島県地区支部には、阿波踊りの「防大連」が結成されており、今年の夏も、佐藤参議院議員（ヒゲの隊長）の参加を得て、多いに盛り上がり、成功裡に終了したとのことです。

２．防衛大学校部隊実習生に対する激励

第14旅団は、７月３日～24日にわたり、防衛大学校第３学年（陸上要員）45名に対し、夏季定期訓練部隊実習を支援しました。同窓会活動として３世代が集まれる会合は、又と無い機会と捉え、今年改装を終えたばかりの重要文化財でもある「旧善通寺偕行社」で、７月22日に激励会を実施しました。3世代、即ち、防大生46名（内１名は教官）、防大同窓生（現職会員）20名、防大同窓生（退職会員）である香川県地区支部より19名の参加を得ました。佐々木支部長はもとより、１期生（陸）の近藤一視先輩、宮下　裕　善通寺市長（３期　空）、師富　敏幸第14旅団長（20期）、松井　俊彦　善通寺駐屯地司令（22期）をはじめとする主要メンバーの参加をいただき、まさに１期から57期までの３世代が一同に会することができました。大先輩は、後を託した若き後輩諸君の元気な姿をみて頼もしく思い、若い後輩諸君は、これから辿るであろう先輩の姿を見て自分の将来の姿を描いたのではないでしょうか。多いに話の花が咲き、有意義な会合になりました。

３．四国地域支部の総会及び懇親会

四国地域支部としては、４県の持ち回りで、総会及び懇親会を開くこととしております。２年目の今年は、高知県地区支部担当で、12月６日、高知市の由緒ある城西館で、盛会に実施されました。総会に引続き、講演及び懇親会が開催され、多いに懇親を深めることができました。また、支部長も佐々木支部長から　池 支部長（兼高知県地区支部長）へとバトンタッチされました。

４．主要役員

四国地域支部
- 支 部 長　佐々木　淳（３期　空）（20.12.6まで）
- 　　池　　裕生（４期　陸）（20.12.6以降）
- 事務局長　松浦　孝昇（７期　陸）

徳島県地区支部
- 支 部 長　先山　英毅（９期　陸）
- 事務局長　清水　祥人（12期　陸）

香川県地区支部
- 支 部 長　佐々木　淳（３期　空）（20.12.6まで）
- 　　豊田　勝也（４期　陸）（20.12.6以降）
- 事務局長　松浦　孝昇（７期　陸）

愛媛県地区支部
- 支 部 長　赤岡　　順（４期　陸）
- 事務局長　瀬川紘一郎（10期　海）

高知県地区支部
- 支 部 長　池　　裕生（４期　陸）
- 事務局長　大西猪一郎（４期　陸）

徳島地区支部だより

事務長　清水　祥人（12期・陸）

1．防大徳島同窓会の設立

当支部は、平成19年度四国支部設立に伴って、平成20年４月20日発足しました。会員数（OBのみ）は、33名（陸：15名、海：12名、空：６名）でありますが、その狙いとするところは、防大４年間の小原台における、学生生活も、人生の一里塚と考え、「袖振りあうも他生の縁」防大OBとして徳島に庵りを結ぶもの、１年に一度位い集まって親睦を図るとともに、母校の発展に関わる活動に寄与することにあります。

2．定期総会

⑴新役員

会　長	先山　英毅	（９期　陸）
副会長	青木　初年	（９期　空）
理　事	稲井　淳一	（３期　陸）
	熊山　健二	（３期　陸）
	松本　　弘	（８期　海）
	高原　正弘	（10期　陸）
事務長	清水　祥人	（12期　陸）

⑵　今後、先山会長の下、会員相互の親睦交流を深めると共に音信不通のOBを掘りおこし会の充実発展に努めてまいります。

⑶定期総会の写真

3．懇親会と俄か防大連の誕生

⑴懇親会

四国支部長、徳島地連部長、徳島教育航空群司令、小松島航空隊司令、県防災企画監等の臨席をえて、和気藹々と歓談もはずみ、有意義な一時を過すことができました。

⑵俄（にわ）か防大連の誕生

阿波のオノコには、時空を超えて会い和すのに、時間はかからなかった。カラオケもコンパニオンもいらない、酒さえあれば、世代を超えて、見事「俄か防大連」が出来あがり、時間がたつのも忘れ、話の渦が巻き、次回の再会を約し終了しました。

4．防衛大学連

防大在校生で編成している、防衛大学連は、３期（陸）熊山健二を連長として心が躍りだすままに、巧いかどうかは問題でなく「踊る阿呆」になって、毎年防大生の意気を、示しています。

5．蛇足ながら阿波踊りのいわれについて

- 蜂須賀家正公が、徳島城を築城したとき、これを大勢で祝ったのが今の阿波踊（組即ち連踊り）りの原型とされています。
- 約400年の歴史をもつ、その踊りの本質は「手を上げて足を運べば阿波踊り」と言われるように、２拍子の軽快で陽気な、ヨシコノのリズムにあわせ、連を組で練り歩く「ぞめき」踊りにあるようです。

東北地域支部の活動について

前東北地域支部長　袖井　　孝（９期・陸）

1．はじめに

私は、平成17年２月から平成18年３月まで、東北小原台会の会長を、平成18年４月から平成20年５月まで、東北地域支部長をさせて頂きました。以下、活動の概要について印象に残る事項を中心に記述致します。

2．東北小原台会の発足とその活動等

東北小原台会は、平成４年東北地域等で退職した防大卒業生をもって、発足しました。発足当初から、会員相互の親睦を図ることを目的に、毎年２月に定期総会、懇親会を行ない、旧交を温めるのが恒例の行事でした。この当時、宮城県会議員の村井嘉浩氏（B28・陸）も、当時、東北小原台会本部役員として活躍されていました。

平成11年２月、現役支部（17個支部）と退職会員支部（東北小原台会）から成る東北防大同窓会が発足し、東北

小原台会もこの統制を受けて、活動することになりました。

私は、平成17年２月、松尾（１期）－阿部（３期）－塚原（５期）－西島（６期）の歴代会長のあとをうけ、会長に就任させて頂きました。同年10月には、村井嘉浩氏（県議３期）が宮城県知事に立候補され、見事当選（防衛大学校卒として初の県知事ご当選）されましたことは、記憶に新しいところです。

３．東北防大同窓会の廃止・解散と東北地域支部の発足

平成18年２月、「防衛大学校同窓会支部及び運営要領等に関する細則」の改正により、これまで現職会員支部（17個支部）と退職会員支部（東北小原台会）とを統括してきた東北防大同窓会が平成18年３月に廃止、解散となり新たに防衛大学校同窓会東北地域支部が平成18年４月に発足致しました。

支部発足当初は、東北小原台の会員をもってスタートしました。しかしながら、この組織は入会時に終身会費１万円を納めた希望者をもって構成しましたため、東北地域には会員以外の同窓生がまだかなりいると言う事になり、本部役員を中心にそれらの方々の氏名、居住地、期別等を把握することになりました。平成18年11月までに157名の会員を掌握し、平成20年５月の総会時には168名の会員（陸：150名、海：５名、空：13名）を掌握することが出来ました。その後は、全会員に東北地域の活動状況と会員名簿等を通知しております。

会則につきましては、同窓会会則の本旨を踏まえ、会の拡充を図る方向で、会の目的、地区支部設立の可否、事業内容、会費、役員の選任、慶弔の有り方等について検討し、成案を得ました。特に地区支部の設立については、当分の間、宮城支部と青森、秋田、岩手、山形、福島の会員からなる直轄支部を設け、東北地域支部が統括することにしました。その後の検討により宮城地区支部を除き地区支部を設けず（他の県の活動の継続が困難とのことから）、東北地域支部が一括して諸事業を行い各県の会員に連絡することに致しました。

年間事業としましては年次総会、懇親会等の実施、母校の発展・充実への寄与、現役との交流、会員便りの発行、会員の把握と名簿の整理、会費の徴収、防衛大教授との意見交換、本部代議員会への参加、機関紙小原台だよりへの投稿等を行なうことを決定しました。

今後の東北地域支部の課題としては、限られた予算の中で現役会員との交流をいかに進めていくか、さらには今回初めて行なった講演会の成果を拡充して、防大父兄会や隊友会との関係を深め、より充実したものにしていくことが必要になると思います。

４．平成20年度東北地域支部総会、講演会、懇親会について

総会は、20年５月17日（土）、仙台市のホテルガーデンパレスにおいて行なわれました。今回は、第１部総会、第２部講演会、第３部懇親会という構成で実施しました。

総会には１期から28期までの同窓生38名が出席されました。村井宮城県知事からもご祝辞を頂きました。その後、平成19年度事業計画、予算計画、監査計画の説明、会則の改正、20年度事業計画、予算計画の審議、役員改選等を審議し、無事に終了致しました。

講演会では、仙台大学准教授の大山さく子氏が「福祉サービスの現状について（豊かな高齢を目指して）」と題して、約１時間にわたり講演くださいました。この講演会は、東北地域支部としては初めての企画であり、新会長仲村悦義氏のご尽力により実現したものであります。

恒例の親睦会には来賓として、宗像東北方面総監、山本東北方面総監部幕僚長、富井宮城地方協力本部長、斉藤東北方面航空隊長、そして講演いただいた大山准教授にご参加頂きました。親睦会では、方面総監よりご祝辞を頂き、その後の懇談では、小原台で学んだ学生の頃の話題等が中心に話が弾みました。会の最後には全員で学生歌を斉唱し、更なる活動を皆で誓い合い、私も今後、会の発展に少しでも寄与できたらという強い思いであります。

別海支部便り
～一期一会で終わらない～

第５偵察隊　３等陸尉　石田　征也（51期・陸）

一期一会。大老井伊直弼が『茶湯一会集』に残した言葉であるが、元をたどれば茶人、宗二の「一期に一度の会」という言葉がその由来。日頃、縁のない人は数え切れないほどいるが、茶会という場を通じて人と出会い、縁が出来る。その出会いはまさに運命である。たとえ一瞬の関係であっても大事にし、お茶で最高のおもてなしをしよう。一期一会という言葉からは、人との関係を大事にし、同時に自らの仕事を最高にするための心構えが感じ取れる。

２月15日金曜日19：00より、別海駐屯地で勤務する防大出身の幹部４人（第５偵察隊長兼駐屯地司令　二等陸佐　今村　武、業務隊長　二等陸佐　辰巳　彦太郎、第27普通科連隊第３中隊長　三等陸佐　藤田　剛、第３中隊第２小隊長　三等陸尉　郡山　伸衛）に、普通科隊付教育機関中の幹部候補生２人（一般幹部候補生　曹長　石田　征也、同　山本　誠　共に防大出身者）を交えて“別海防大幹部団結会”が開催された。わずか６人の小さな会ではあったが、かつての防大青春時代の話に華を咲かせ、上下の隔たりなく和気藹々と親睦を深めることができた。

別海駐屯地は僻地にある。第５偵察隊及び第27普通科連隊第３中隊を主力とする総勢300人弱の規模で、うち防大出身の幹部は６人（隊付２名を含む）のみという小さな駐屯地である。しかし、規模の小ささに反して国防に果たす役割は非常に大きい。別海・中標津・標津・羅臼を範囲とする広大な隊区を持ち、洋上では北方領土を占

領するロシアと国境を接している。更に日本最大の演習場である矢臼別演習場を管理しているのも別海駐屯地の業務隊である。「我ら道東第一線」。別海で勤務する者達の合言葉である。

こうした環境下にある別海駐屯地で、偶然同時期に勤務することになった６人の防大出身幹部達。この６人は、防大卒業生というフィルターを通さなければ出会うことはなかった、まさに運命的な出会いで縁を作ることになったのである。

我々は、別海での運命的な出会いを永遠の関係とすべく“別海防大幹部団結会”を開いた。そして会の終わりに、これからも国の守りに貢献するために、防大出身者同士それぞれの立場で全力を尽くしていく旨を誓い合い、団結会は成功裏に終わった。お茶ではなくお酒が飲み交わされた会であったが、我々の関係は「一期に一度」で終わることのない強固なものとなった。

山本　誠（幹候）　石田征也（幹候）　郡山伸衛（第３中隊 第２小隊長）
藤田　剛（３等陸佐 第３中隊長）　辰巳彦太郎（２等陸佐 業務隊長）　今村　武（２等陸佐 駐屯地司令 兼第５偵察隊長）

小原台クラブ会務報告
（2008年を主として）

地域支部 小原台クラブ事務局　丸谷　俊博（24期・陸）

１　要　旨

幹部会議を原則、毎月１回実施。新年会、総会、ゴルフコンペを各１回実施。

会報を１回発行。オープンセミナーを月１回開催。支援（寄附）実施。

■役　員

会　　長　岩﨑　俊雄　９期
事務局長　丸谷　俊博　24期
副 会 長　仲摩　徹弥　10期
　　中島　正雄　13期
幹 事 長　長谷川礼司　17期
副幹事長　金子登志夫　26期
　　内田　　光　26期
　　小木曽　淳　31期
　　後藤　昌宏　43期
会　　計　敦賀　　薫　43期
監 査 役　古里　昭弘　９期
　　若宮　達夫　14期

２　主要イベント

⑴2007年12月　「小原台クラブ会報　第31号」発行　約1,000部
⑵2008年２月１日㈮　新年会開催。日本橋サリュコパンにて。
⑶2008年７月５日㈯　小原台クラブ総会、講演会、懇親会を開催。新橋第一ホテルアネックスにて。
⑷2008年11月20日㈭　ゴルフコンペ開催予定。立野クラシックゴルフ倶楽部にて。
⑸2008年12月　「小原台クラブ会報　第32号」発行予定　約1,000部
⑹2009年１月30日㈮　新年会開催予定。日本橋サリュコパンにて。

ゴルフコンペ

３　概要報告

⑴新年会（2008／02／01）

岩﨑会長のご挨拶の後、菅沼名誉会長による新年を寿ぎ出席各位のご健勝を祈念する乾杯で懇親会が始まりました。小原台クラブの特性である１期代から40期代迄が忌憚無く歓談し、交流を深める新年会となりました。

⑵総会（2008／07／05）

総会では、岩﨑会長挨拶、若宮事務局長からの会務報告、会計及び監査報告に続き、平成20年度の活動計画と予算提案があり、いずれも原案通り承認されました。

岩﨑会長総会挨拶

記念講演会は、山崎敦氏（㈱セイフティーネット11期海）に「従業員のメンタルヘルスを考える」と題してかつて３名の部下を自殺で失った経験から、平成13年１月、自殺防止を目指したメンタルヘルスケアを事業とする㈱セーフティネットを設立し、現在、会員企業の社員、家族から毎月3,000件をこえる相談を受けている状況等について語って頂きました。

懇親会は、小原台クラブ会員が同伴した民間からの参加者（講演会から）も交え和気藹々と、また様々な方のスピーチや激励を交えながら盛会裏に終了しました。

⑶支援活動

防衛大学校学術教育振興会、及び特定非営利活動法人「日本地雷処理を支援する会（JMAS）」への寄附を継続しています。

⑷小原台クラブオープンセミナー

防大卒業生及び民間の中堅若手の育成を目的とし、また講師にもその趣旨をご理解頂き、無償にて受けて頂きながら月１回の講演会を継続しております。懇親会には講師も参加。

※定例会場：「東京都南部労政会館（ゲートシティ大崎ウエストタワー2F）」。

講演会：19：00〜20：15　懇親会：20：30〜22：30

【開催履歴（前号記載以後の2007年12月〜2008年09月】

2007/12/25

講師　小林　博史 氏

（防大26期　内閣参事官　※防衛省より出向中）

『国の危機管理』

2008/01/31

講師　平井　友行 氏

（㈱みずほコーポレイト銀行　参事役）

『資産・年金運用について』

2008/03/13

講師　南　　圭次　氏

（総務省 総合通信基盤局 電波部 電波環境課 課長補佐）

『メディア・ソフトの市場動向』

2008/04/23

講師　岡田　仁志 氏

（国立情報学研究所　総合研究大学院大学　准教授）

『電子マネー』

2008/05/08

講師　山代　芳喜 氏

（伊藤忠商事パキスタン代表兼カラチ事務所長）

『パキスタンの現状

〜ムシャラフ与党は何故総選挙で敗れたのか〜』

2008/06/12

講師　仲摩　徹彌 氏

（第一ホテルサービス㈱代表取締役社長、防大10期）

『リーダーシップと命令違反』

2008/07/31

講師　志方　俊之 氏

（帝京大学法学部教授、東京都災害対策担当参与、防大２期）

『新しい脅威への対応』

2008/09/16

講師　白子　英城 氏

（株式会社スイックプラス　会長）

『日本の生きざま』

以下、毎月１回をベースに開催予定。

オープンセミナー風景

山口地区支部の活動状況

神田　和穂（14期・陸）

設立２年目を迎えた山口支部は重永会長（空８期）以下61名で、会員相互の懇親を主に活発に各種活動を行っております。

その概要を申し上げますと、

20年３月15日（土）には昨年と同じ新山口駅前「山口グランドホテル」で同窓生34名が集い総会及び懇親会を実施しました。

今回は総会後海上自衛隊第31航空群主席幕僚「將司覚１海佐（防大22期）」から「最近の自衛隊の現状について」と題した講話をいただきました。退職してすっかり現在の自衛隊に疎くなっている会員は、講師のユーモア溢れる語りに、その古い頭を解きほぐしながら聞き入り、現職隊員のご苦労を身に沁みて感じました。

その後懇親会に移りましたが、参加者全員が年齢を超えて若き学生当時に戻り、先輩方々の温かき指導や後輩の苦労話など当時のままのなごやかな情景がくりひろげられました。

次に初の試みですが、山口県には陸・海・空それぞれの自衛隊駐屯地・基地が所在することもあり、現職隊員との連携を深めるべく自衛隊部隊研修を企画・実行することといたしました。

今年度は６月６日（金）に海上自衛隊第31航空群（岩

国）を訪問しました。当日は好天の中、植月司令（当時、防大18期）以下隊員の方々の大歓迎を受けました。ブリーフィングの後に装備品の展示や新滑走路の見学、US-1Aの体験搭乗及び各部隊長との懇談等岩国基地あげての暖かき歓迎に参加者19名は大満足の一日でありました。

また同好者によるゴルフ大会は今年から春秋２回実施することとしました。まず春の大会は風薫る５月14日、宇部72カントリークラブ万年池西コースで、秋は10月１日、前日の雨予想から想像できぬくらい爽やかな秋晴れの下、周南市中須ゴルフクラブでそれぞれ自慢の腕を競いました。春は中藤氏（海８期）が、秋は山根氏（陸２期）が優勝いたしました。

以上簡単に山口支部の活動について紹介しましたが、次年度もさらに創意し会員一同楽しく集える同窓会にすべく努力してまいります。先輩同窓会の皆さん、また山口県会員の皆さんどうぞ新しいアイディアをどんどんお寄せください、お待ちしております。

広島地区支部の活動状況

広島地区支部事務局　森田　　寧（17期・海）

平成20年の活動状況について紹介致します。

例年どおり、２月に定例総会・講演会・懇談会の開催、春・秋季行事としてゴルフコンペ・テニス・ハイキングを実施し、同窓生相互の緊密な交流を推進するとともに、各種団体との交流を図りました。更に、陸・海各部隊の実施する諸行事にも積極的に参加しました。

定期総会・講演会・懇親会は、２月、呉市内において実施し、１期から51期までの同窓生約70名が参加しました。現役同窓生は、海自呉地方総監　杉本正彦海将（18期）をはじめ天野小百合１海尉（43期）、陸51期の柏木和義、藤井大樹候補生ら22名が参加しました。講演会は、海自第１術科学校長　長谷川洋海将補（18期）により「陸・海・空自衛隊統合の現状」についてユーモアを交えた講話が行われ、参加者は興味深く拝聴しました。引続いての懇親会は、久しぶりの再会に、会場のいたるところで話に花が咲き、孫のような51期生の参加は会員を若返らせ、恒例の学生歌と逍遥歌の斉唱では、１期から51期までの同窓生が肩を組合い、最高の盛り上がりを見せて、会は終了しました。

懇親会（学生歌、逍遥歌斉唱中）

春・秋季行事は、郷原CCと瀬野川CCでゴルフコンペを、陸自海田市駐屯地でテニスを、春に「県立中央森林公園」、秋に「蓮華寺山（標高374m）」ハイキングを実施し、延べ約200名の同窓生・家族、自衛隊OB、協力会員等が参加し、盛況裏に終了しました。

春季ハイキング（県立中央公園）

今年、新たな試みとして、「ゴルフ、ハイキング等に参加できない会員が参加できるものはないか」、「気楽に集える一杯会をやろうじゃないか」ということで会員のひろば（仮称）を催すことにしました。

第一回は、「絵を描こう」をテーマに４期（陸）田和久秋、４期（空）澤井昌昭、５期（海）後藤基典各会員の絵画創作に対する思いや苦労・楽しさの話、ゴルフクラブを絵筆に換えた話等を拝聴しながら歓談しました。

第二回は、防衛研究所で勤務・研究され、今なお研鑽されている９期（陸）中村好寿会員の講話を拝聴し、懇談を行いました。「会員のひろば」の各参加者は30名程度でしたが、気楽に集える一杯会、楽しいひろばになったと思います。今後は、「老後を快適に生きる」、「老後の夫婦喧嘩の仕方」等を酒の肴に一杯会を企画していこうと考えています。

今年も、広島地区支部は積極的に活動し、多数の同窓生が集える同窓会にしていきたいと考えています。

「絵を描こう」（会員のひろば）体験談発表風景

会員の訃報

平成20年１月１日から11月14日までに届いた会員の訃報を紹介します。なお、詳細は、防衛大学校同窓会ホームページでご覧下さい。

１期生
（空）尾坪　祐三　１月３日
（空）田村　秀昭　１月４日
（空）鹿島田矩基　４月６日
（陸）鈴木　英夫　４月17日
（海）鈴木富士雄　５月13日
（空）鈴木喜一郎　６月18日
（陸）中森　鎮雄　７月６日
（海）山根　正和　８月17日

２期生
（空）渡邊　榮顯　１月９日
（海）髙野　良三　７月15日
（陸）末本　芳幸　３月２日

３期生
（陸）岩下　義喜　１月20日
（陸）吉岡　　巌　３月16日
（陸）串田　栄司　３月26日
（陸）末本　芳幸　３月２日
（陸）大西　幹生　７月18日

５期生
（陸）山田　恒夫　４月21日
（陸）白石　充司　４月29日
（海）矢崎　泰郎　５月23日

６期生
（陸）橋本　　諒　１月30日
（空）八木　敏行　３月13日
（海）中原　猛敏　４月19日
（海）小林　幸雄　７月６日
（陸）杉森　康宏　９月５日
（海）小野　又弘　10月１日

７期生
（空）江　　勝典　３月４日
（海）小倉　需一　３月26日
（陸）村田　秀信　10月13日

８期生
（陸）荒田　祐一　３月２日

９期生
（陸）印南　　満　２月７日
（陸）中村　　勉　６月28日
（陸）大野　十覇　７月14日
（陸）西迫　健一　10月19日

11期生
（陸）目黒　　均　６月15日

12期生
（空）厚味洋五郎　８月16日

13期生
（陸）東　　勉　６月３日

14期生
（陸）薄井　　學　４月28日
（陸）加治佐　健　５月17日

17期生
（陸）柴田　文夫　２月６日
（陸）稲葉　　裕　９月28日

18期生
（空）木村　邦一　９月３日

23期生
（空）小國　亨兒　９月16日

25期生
（陸）宇佐美　真　７月11日

45期生
（海）木野　真一　５月９日

48期生
（陸）渕原　修起　４月７日

機関誌「小原台だより」投稿のお願い

平成20年度「小原台だより」は、ご投稿いただきました方々のお陰で編集することが出来、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。機関誌編集の担当になって、こんなに多くの同窓生の貴重な体験や訓えに関する投稿によって成り立っていたことに気付き、今まで送られてきた「小原台だより」をたいして読むこともなく直ぐにゴミ箱に捨てていた自分が恥ずかしくなりました。また、数人の同窓生に「小原台だより」のことを聞くと、「そんなものが送られてきていることも知らなかった。」とか「いつも読まずに捨てているよ。」といった評価を聞くことがあります。これは、取りも直さず「小原台だより」がこんなにも素晴らしい内容であることを宣伝したり、広報していないことに他ならないと感じました。編集担当の業務は、実質２カ年で終了します。１年目は、まさに様子見ということになりますが、２年目には半歩でも前進したものにしたいと、密かに決意しています。

さて、平成21年度の「小原台だより」をより充実したものにするため、①同窓生相互の啓発に寄与する記事、②「同窓生アラカルト」に相応しい記事、③「期生会だより」又は「支部だより」に掲載を希望する記事、について皆様からの投稿をお願いします。投稿要領は、次のとおりです。

1　投稿通知期間：平成21年１月～６月　メール（jmk@bodaidsk.com）又は電話（03−3351−8910）で。
2　投稿締切り：平成21年10月15日（木）
3　投稿文書：A４縦使用・横書きで文字サイズ12Pとし、2,000文字（挿入写真の分を含む）、顔写真等を添付
4　投稿方法：メール（jmk@bodaidsk.com）、CD又はフロッピー、文書・写真を郵送 のうちどれか
5　機関誌担当：同窓会本部事務局総務部　笠原　久（18期・空）

平成19年度防衛大学校同窓会決算書

平成20年３月31日
〔単位：円〕

項目				19年度当初予算	19年度実績
一般会計	収入		会費（50期生等）	21,700,000	22,825,230
			預貯金利息	1,380,000	1,857,473
			雑収入	50,000	1,350,262
			合　計	23,130,000	26,032,965
	支出	本部	機関紙の発行	3,800,000	3,701,355
			代議員会・年次懇親会の開催	1,600,000	860,682
			慶弔費（弔電・供花等）	1,000,000	649,809
			同窓会名簿の維持	150,000	13,912
			スポーツ等交流会の実施	90,000	150,210
			防大卒業留学生との交流	150,000	210,210
			会費納入促進活動の推進	370,000	391,645
			長期的検討事項の継続研究	100,000	161,300
			小　計	7,260,000	6,139,123
			支部地域支部への助成	900,000	278,370
		支部	地域支部等の設立準備	100,000	420,200
			現職会員地区支部の活性化支援	300,000	0
			小　計	1,300,000	698,570
			期生会HCDの実施	300,000	328,628
		期生会	HVDの実施	300,000	300,210
			期生会HPの開設助成	100,000	20,125
			期生会との連携強化	160,000	53,170
			期生会名簿の作成支援	1,020,000	362,130
			小　計	1,880,000	1,064,263
			防大開校記念祭等支援	1,600,000	1,743,389
		防大	校友会対外活動支援	800,000	750,000
			競技会支援（記念品）	540,000	340,934
			顕彰・顕花式支援	150,000	128,919
			期生会発足等支援	200,000	207,500
			安全保障講座助成	100,000	100,210
			学生部隊実習支援	400,000	492,500
			小　計	3,790,000	3,763,452
		事業経費小計		14,230,000	11,665,408
		維持管理	事務費	600,000	776,832
			通信費	460,000	301,152
			交通費	600,000	428,850
			会議費	500,000	57,503
			小原台事務局運営費	160,000	33,955
			事務員雇用費	2,000,000	2,025,000
			本部事務局室賃貸費	2,850,000	2,781,983
			その他の経費	400,000	822,570
			維持管理費小計	7,570,000	7,227,845
		予備費		1,300,000	1,454,115
		支出合計		23,100,000	20,347,348
		積立金に繰り入れ		30,000	5,685,617
		合　計		23,130,000	26,032,965
特別会計	収入	前年度からの繰越		21,411,086	25,515,258
		預貯金利息		7,000	6,400
		合　計		21,418,086	25,521,658
	支出	謝金等		1,440,000	728,820
		同窓会システムの維持整備		150,000	170,256
		通信費及び事務費		150,000	56,040
		交通費		250,000	168,960
		予備費		500,000	0
		支出合計		2,490,000	1,124,076
		次年度への繰越		18,928,086	24,397,582
		合　計		21,418,086	25,521,658

会費納入状況

20.10.31 現在

期別	会員数	完者納数	完率納%	未完納者数 陸	海	空	計	期別	会員数	完者納数	完率納%	未完納者数 陸	海	空	計
1	339	320	94	11	6	2	19	29	393	357	91	17	9	10	36
2	359	345	96	10	2	2	14	30	412	345	84	48	13	6	67
3	484	452	93	17	12	3	32	31	432	410	95	15	6	1	22
4	465	434	93	22	8	1	31	32	406	356	88	31	13	6	50
5	529	483	91	26	11	9	46	33	449	376	84	45	20	8	73
6	477	428	90	39	6	4	49	34	430	375	87	40	9	6	55
7	503	459	91	30	7	7	44	35	496	479	97	9	5	3	17
8	467	418	90	36	8	5	49	36	354	344	97	6	2	2	10
9	498	477	96	1	9	11	21	37	384	347	90	16	7	14	37
10	498	449	90	28	11	10	49	38	338	261	77	63	10	4	77
11	495	448	91	29	8	10	47	39	356	327	92	8	11	10	29
12	466	408	88	34	11	13	58	40	388	327	84	35	22	4	61
13	468	406	87	39	11	12	62	41	405	364	90	24	14	3	41
14	491	455	93	21	2	13	36	42	407	366	90	20	12	9	41
15	463	449	97	9	3	2	14	43	431	385	89	23	15	8	46
16	428	403	94	10	4	11	25	44	381	220	58	118	39	4	161
17	498	454	91	20	10	14	44	45	351	156	44	131	20	44	195
18	423	397	94	9	7	10	26	46	360	226	63	71	7	56	134
19	446	415	93	13	16	2	31	47	388	338	87	32	11	7	50
20	383	352	92	17	3	11	31	48	425	375	88	23	15	12	50
21	491	468	95	13	4	6	23	49	＊294	294	100	0	0	0	0
22	475	410	86	33	9	23	65		325	294	90	26	4	1	31
23	410	388	95	8	8	6	22	50	＊323	320	99	0	0	3	3
24	448	415	93	8	18	7	33		369	320	87	27	13	9	49
25	424	401	95	11	4	8	23	51	＊371	370	100	1	0	0	1
26	507	468	92	26	7	6	39		411	370	90	17	13	11	41
27	389	378	97	8	1	2	11	52	＊370	343	93	3	0	24	27
28	453	422	93	17	8	6	31		424	343	81	22	25	34	81

会員数の項：会費納入対象者（留学生を除く防大卒業者数）　49～52期生の欄：＊印の項は、幹候校入校時の在校生に対する数値

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長　　渡邊　元旦

昨年同様、本年も52期生の陸・海・空幹部候補生学校在校者のほぼ全員に完納していただきました。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のために、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果をあげております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦、母校の発展及び社会的活動に寄与する」という会の目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）には、納入を宜しくお願い申し上げます。

納入先　ゆうちょ銀行：口座番号　00260−5−□□24826（百万及び十万の桁は無記入）
加入者名　防衛大学校　同窓会
通 信 欄　期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入
三井住友銀行：飯田橋支店　口座番号：1270680
防衛大学校同窓会　経理部長　田代　満次

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

連絡先　同窓会本部事務局
〒160−0003 東京都新宿区本塩町21−３−２
Tel / Fax 03−3351−8910（自即電話　8−6−28895）
eメール　honbu@bodaidsk.com

【参　考】
普通会費　防大本科卒業生
卒業時の３尉俸給月額（１号俸）の１／４（千円未満切捨）
防大研究科卒業生（一般大学卒業者）（19年度改正）
卒業年度の３尉俸給月額（１号俸）の１／８（千円未満切捨）
延滞金　1,000円×（完納年度－３尉任官年度又は研究科卒業年度）
（防衛大学校同窓会会費に関する細則より）

会費算出例：44期生で過去に分納がない場合
普通会費　60,000円、完納年度　21年度、３尉任官年度　12年度（13.3）
21年度納入額　60,000円＋1,000円×（21−12）＝69,000円
（詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい）

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成20年度同窓会本部役員

会長	竹河内捷次	9（空）
副会長兼理事長	石川　亨	11（海）
副会長	遠竹　郁夫	11（空）
同	先崎　一	12（陸）
同	斎藤　隆	14（海）
理事	牧本　信近	13（海）
同	内山　好夫	13（空）
同	奥山　繁樹	14（陸）
理事兼事務局長	渡邊　元旦	14（陸）
理事兼事務局長補佐	林　直人	15（陸）
理事	藤崎　護	22（陸）
同	久納　雄二	22（陸）
同	重岡　康弘	25（海）
同	飯田　雅典	21（空）
会計監事	丸田清次郎	13（陸）
同	土屋　勝政	14（陸）
同	繁田　信之	14（海）
同	山口　金光	16（空）
ＰＴ長	鈴木　健	15（陸）
ＰＴ	佐田　重夫	15（陸）
同	瓦谷　育夫	15（陸）
同	三好　光男	15（空）
同	徳田　正行	15（空）
顧問	小池　重倫	16（陸）
同	前川　眞	16（海）
同	赤瀬　公	16（空）
同	池田　茂実	16（空）
同	中村　吉廣	16（空）
総務部長	富本　啓一	16（陸）
総務部長補佐	市川　菊代	17（陸）
総務部総務	伊東　基行	17（陸）
同	菊池　伯	18（陸）
総務部防大	木下　憲司	17（海）
総務部HP・機関誌	紀伊　和憲	17（陸）
同	笠原　久	18（空）
人事部長	増田　憲二	16（陸）
人事部長補佐	原田　千敏	17（空）
人事部	渡邊　顕徳	18（陸）
同	持永　昇三	18（海）
事業部長	坪井　寛	16（陸）
事業部長補佐	横山　俊昭	17（空）
事業部 HCD/HVD	森　哲郎	17（海）
同	門野　睦廣	18（陸）
事業部 囲碁・留学生	井上　恭治	17（陸）
事業部 HCD/HVD	東郷　行紀	18（海）
事業部 テニス・助成	吉川　勝三	18（空）
事業部 ゴルフ・講演	原　悦彦	17（空）
同	岡崎　宗男	18（陸）
経理部長	田代　満次	16（陸）
経理部長補佐	持田　清久	17（海）
経理部	田中　仁志	18（空）
ＭＣＩ部長	山本　博秋	16（海）
ＭＣＩ部長補佐	平山　孝雄	17（海）
ＭＣＩ	村田　和美	17（陸）
同	明比　章	18（海）
事務局HP技術担当	荒木　紀夫	8（空）
小原台事務局長	本村　久郎	21（空）
小原台局長補佐	村永　次郎	19（陸）
小原台顧問	山下　啓治	23（海）
小原台総務部長	山本　政雄	24（海）
小原台事務部長	長嵜　秀也	28（空）
小原台渉外部長	牧野　正美	25（陸）
小原台総務係長	大藏　晋	40（陸）
小原台広報係長	奥　和昌	42（陸）
小原台事業係長	久米田　昭	42（空）
小原台事業係	藤澤　智史	48（陸）
小原台企画係長	友野　晋吾	35（陸）

地域支部等役員（平成20年度）

北海道地域支部	支部長	穴口　一男	9　陸
東北地域支部	支部長	仲村　悦義	12　陸
東北地域支部	業務幹事	勝　美治	13　陸
栃木地区支部	支部長	君嶋　信	3　陸
栃木地区支部	業務幹事	松本　達成	8　陸
群馬地区支部	支部長	日野　繁	2　陸
北陸地区支部	支部長	濱谷　隆平	6　陸
北陸地区支部	事務局長	西川　清	15　陸
東海地区支部	支部長	田中　大三	7　陸
東海地区支部	事務局長	水谷　登	13　陸
関西地域支部	支部長	羽藤　忠和	9　陸
関西地域支部	業務幹事	新見　泰朗	17　陸
岡山地区支部	支部長	高橋　正憲	6　空
岡山地区支部	業務幹事	永岑　富彦	10　陸
広島地区支部	支部長	松本　暢夫	11　海
広島地区支部	業務幹事	森田　寧	17　海
山口地区支部	支部長	重永　照彦	8　空
山口地区支部	事務局長	高橋　佳嗣	11　陸
四国地域・香川地区支部	支部長	佐々木　淳	3　空
徳島地区支部	支部長	先山　英毅	3　陸
高知地区支部	支部長	池　裕生	4　陸
愛媛地区支部	支部長	赤岡　順	4　陸
九州地域支部	支部長	山口　賢介	7　陸
九州地域支部	業務幹事	藤井　敬文	12　陸
福岡地区支部	支部長	伊藤　宏美	7　陸
佐賀地区支部	支部長	真崎　峰夫	7　陸
佐賀地区支部	業務幹事	田中　豊博	12　陸
長崎地区支部	支部長	中里　紀一	7　陸
長崎地区支部	業務幹事	樋口八洲太郎	10　海
熊本地区支部	支部長	壇　矯次郎	7　海
大分地区支部	支部長	小俣　健二	7　陸
宮崎地区支部	支部長	後藤田壽司	6　陸
宮崎地区支部	事務局長	阿万　哲士	4　陸
鹿児島地区支部	支部長	市来　徹夫	9　空
鹿児島地区支部	事務局長	福島　卓	11　陸
沖縄地域支部	支部長	藤井　建吉	7　陸
小原台クラブ	支部長	岩崎　俊雄	9　陸
桜華会	会長（支部長）	塚口　千枝	40　陸
桜華会	副会長	東　良子	40　海
桜華会	事務局長	吉田ゆかり	40　空

期生会会長・代議員名簿

20年10月1日現在

期別	会長	代議員			業務幹事（期生会）
		陸	海	空	
1	法性　弘（空）	荒海　巌	田中　治	安藤　堅一	鈴木　龍生（空）
2	井川　宏（海）	服部　幹雄	水野　信夫	吉岡　一成	水野　信夫（海）
3	浮田　尚家（海）	齊藤　信行	松本　昭一	出口　哲夫	加藤　晃（海）
4	加藤　哲朗（陸）	山中　欣也	藤岡　瑩	山本　要	山道　弘（陸）
5	松島　悠佐（陸）	青山　利雄	藤川　耕一	近藤　五朗	浅野　勇蔵（陸）
6	藤原　博（陸）	譲葉　佐敏	関口　鉄也	西田　憲正	関口　鉄也（海）
7	江藤　兵部（空）	竹内　富雄	高木　基博	大杉　祐司	伊藤　文夫（空）
8	三成　裕二（海）	渋谷　昭徳	宮崎　健二	蜂巣　徹	宮崎　健二（海）
9	藤田　幸生（海）	小島　捷利	功刀　正文	鈴木　一嘉	林　茂（陸）
10	酒巻　尚生（陸）	嶋野　隆夫	坂東　勝昭	幸治　昌秀	幸治　昌秀（空）
11	石川　亨（海）	内村　彰和	竹村　訓	赤羽　益三	阿保　文敏（陸）
12	先崎　一（陸）	前田　稔	上村　堯彦	野末（三沢）守	前田　稔（陸）
13	内山　好夫（空）	関　芳雄	小串　茂	花岡　芳孝	内山　好夫（空）
14	吉田　正（空）	石井　利博	斎藤　隆	稲葉　憲一	有井　一弘（空）
15	道家　一成（海）	佐伯　義則	小林　幹夫	江口　啓三	佐藤　誠喜（陸）
16	折木　良一（陸）	石川　由喜夫	小豆野　実	鈴木　直人	石川　由喜夫（陸）
17	永田　久雄（空）	中村　幹生	石村　澄雄	浅見　政博	石村　澄雄（海）
18	大西　正俊（陸）	岩切　厚	高田　博幸	長尾　齊	岩切　厚（陸）
19	酒井　健（陸）	酒井　健	宮浦　弘兒	岩崎　茂	榊枝　宗男（陸）
20	佐藤　貞夫（陸）	西村　智聡	加藤　耕司	宮脇　俊幸	西村　智聡（陸）
21	荒川　龍一郎（陸）	竹田　重樹	曽我　真二	飯田　克幸	山本　洋（陸）
22	宮下　寿広（陸）	盛一　丈嗣	山口　透	福井　正明	田上　安男（陸）
23	岩本　豊一（陸）	岩崎　親裕	細谷　正夫	杉山　伸樹	田中　和久（陸）
24	高橋　均（海）	櫻木　正朋	槻木　新二	岩成　真一	櫻木　正朋（陸）
25	高鹿　治雄（海）	田中　良夫	徳丸　伸一	吉田　浩介	大瀬戸　功（海）
26	屋代　律夫（陸）	立花　尊顕	柴田　敬	佐々木　金也	伊藤　正顕（海）
27	小林　茂（陸）	小林　茂	副島　尚志	丸茂　吉成	小林　茂（陸）
28	田浦　正人（陸）	田浦　正人	畠野　俊一	遠目塚　進	田浦　正人（陸）
29	馬場　邦夫（陸）	中村　浩之	中尾　剛久	村上　和彦	時藤　和夫（空）
30	堀切　光彦（陸）	山崎　繁	正實　敏彦	小田　紀彦	山崎　繁（陸）
31	高山　博光（陸）	山根　直樹	今村　靖弘	有村　誠一郎	山根　直樹（陸）
32	阿部　睦晴（空）	池田　和典	梶元　大介	柴田　利明	植村　茂己（空）
33	中塚　千陽（空）	山根　寿一	真殿　知彦	沖野　克紀	沖野　克紀（空）
34	佐藤　信知（空）	大谷　勝司	福田　達也	小笠原　卓人	小笠原　卓人（空）
35	稲月　秀正（空）	中迫　博文	井上　竜三	吉村　一彦	熊谷　三郎（空）
36	足達　好正（陸）	足達　好正	塩崎　浩之	泉山　正司	足達　好正（陸）
37	宇佐美　和好（空）	小川　隆宏	浦口　薫	宇佐美　和好	宇佐美　和好（空）
38	石井　浩之（空）	森本　康介	濱崎　真吾	霜田　豊英	山崎　武志（空）
39	湯下　兼太郎（陸）	湯下　兼太郎	平田　利幸	中川　一	湯下　兼太郎（陸）
40	清水　徹（海）	小澤　学	川野　邦彦	大石　和浩	兵庫　剛（陸）
41	堤田　和幸（海）	小林　貴	小河　邦生	中谷　大輔	小河　邦生（海）
42	武田　和克（陸）	武田　和克	中尾　喜洋	山口　嘉大	武田　和克（陸）
43	鎌田　淳（空）	澤　繁実	戸永　竜太	岩切　主税	岩切　主税（空）
44	髙橋　秀典（海）	鈴木　攻祐	阿部　直樹	原田　理	阿部　直樹（海）
45	庄司　秀明（陸）	青山　佳史	岡澤　智和	坂田　靖弘	青山　佳史（陸）
46	原田　岳（海）	石岡　直樹	近藤　太郎	寺林　洋平	近藤　太郎（海）
47	吉水　憲太郎（陸）	清田　裕幸	笠原　健治	那須　悠花	清田　裕幸（陸）
48	和田　嵩一（海）	桐谷　高弘	柏木　祐一郎	齋藤　真吾	柏木　祐一郎（海）
49	山上　剛史（空）	納谷　知希	小沼　洋祐	山上　剛史	山上　剛史（空）
50	吉井　拓也（陸）	益田　一宇	八木　佑己	阿部　竹浩	益田　一宇（陸）
51	鬼塚　勇（陸）				
52	成田　優（陸）				

名簿管理に関するお知らせ及びお願い

Ⅰ　利用目的及びプライバシーポリシー

17年４月の個人情報保護法施行に伴い、同窓会名簿管理のあり方について、次のとおり利用目的を明確化するとともにプライバシーポリシーを確立いたしました。名簿管理は同窓会存立の基本的要件であり、会員皆様のより一層のご理解ご協力をお願い致します。

1　利用目的

同窓会本部は、同窓会設立以来、会員の相互親睦、母校への支援、防衛思想の普及等を目的に各種事業を推進するなど、同窓会の充実発展に努力してまいりました。同窓会名簿は、これらの各種事業活動を推進するため不可欠でありかつ同窓会存立の基本であると考えております。

同窓会本部では、同窓会のさらなる充実発展のため、次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供させて頂きたいと考えております。

⑴　同窓会各種事業推進のための連絡
⑵　機関誌「小原台だより」の刊行（業者に郵送先を提供）
⑶　会員の慶弔の実施
⑷　期生会並びに校友会、教務班等グループ活動への協力
⑸　地域支部等の活動への協力

2　プライバシーポリシー

個人情報の取り扱いにあたっては、情報保護の重要性を深く認識し、個人情報に関する法令、その他の規定を遵守するとともに次のプライバシーポリシーに従い皆様の個人情報の適切な保護に努めてまいります。

⑴　会員皆様の個人情報は、利用目的の範囲内で収集、利用させていただきます。
⑵　法令等に規定する場合を除き会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はいたしません。
⑶　会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、同窓会本部事務局人事GP担当者へご連絡いただければ、速やかに対応させていただきます。
⑷　個人情報へのアクセス､破壊、改ざん及び漏洩などしないように適切に管理します。

Ⅱ　会員の異動等に伴う名簿修正

従来、名簿管理は、防衛省関係部署のご協力による情報提供と部外委託により実施していましたが、個人情報保護法制定に伴い、防衛省関係部署からの情報入手と部外委託会社の協力が困難となりました。

このため、各期生会のご協力なしに名簿の維持管理は出来ない状況にあります。平成16年から名簿の修正は期生会代議員にお願いして参りましたが、代議員への負担が過大になる等の問題点がありました。17年度からは、代議員の負担軽減と送達の効率化のため要修正項目を厳選し削減するとともにメールの併用等送達手段の多様化を図りました。

昨年度からは、各期生会業務幹事の皆様に８月の定期異動等を基準に名簿の修正をお願いしましたが、ご多忙な時期にもかかわらずご理解ご協力ありがとうございました。次年度以降も8月の定期異動等を基準に10月下旬までに年一回の修正をお願いすることになりますので引き続きご理解ご協力をよろしくお願いします。

また、会員の皆様におかれましても各期生会業務幹事への積極的ご協力をお願いします。

Ⅲ　同窓会ホームページを活用した異動連絡等

最近のインターネットの普及は目覚ましいものがあり同窓会としてもインターネットの積極的活用を図っております。インターネットを通じた会員の異動通知等は、正確性、迅速性及び安全性はもとより、管理の効率性からもきわめて有効であると考えています。そこで、年１回の定期修正の補助手段として、同窓会ホームページに「異動連絡・ご意見表」の項を設け、住所、勤務地の異動及び本部に対するご意見等を、インターネットを通じて連絡出来るようにしています。各期生会・会員皆様の積極的な活用をお願いいたします。

（参考手順）防大同窓会ホームページ：「お知らせ」→人事Gp「異動連絡」または「異動連絡・ご意見表」

同窓会本部事務局長　渡邊　元旦

パレード

平成20年度防衛大学校同窓会懇親会等のご案内

平成20年度同総会講演会・懇親会を下記のとおり開催いたします。
ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

●日　　時：平成21年２月22日（日）15：30～19：00

●場　　所：明治記会館
東京都港区赤坂２－２－23（TEL：03－3403－1171）

●懇親会費：5,000円

1．講演会：15：30～16：30
講師：中谷　元　元防衛庁長官
演題：「日本を取り巻く国際情勢と日本の安全保障」

2．懇親会：17：00～19：00

参加される方は、同封の返信用「はがき」にて平成21年１月23日（金）までにお申し込み下さい。（いずれにも参加されない方の返信は不要です。）

●代議員会は、平成21年２月22日（日）13：30～15：10の間、行われます。

編集　紀伊和憲・笠原　久
印刷　㈱エイコープリント

防衛大学校同窓会本部連絡先
〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
●局　線　TEL・FAX　03－3351－8910　●専用線　TEL・FAX　8－6－28895
E/M: honbu@bodaidsk.com